

第六篇

絶対国防圏の作戦

第一章 絶対国防圏の設定とその政戦略

〔概説〕

大本営及び政府は、昭和十七年三月七日連絡會議決定の「今後採るべき戦争指導大綱」に準拠して戦争指導を律しつつ昭和十八年夏頃に及んだ。右戦争指導方針は南方形期作戦が一段落した当時に定められたもので、その主たる狙いは、既に述べたように先ず英国を屈伏させ、次いで米国の戦意を喪失させる、そのためには緒戦に獲得した戦果を引続き拡充して長期不敗の政戦略態勢を整えつつ機を見て積極的の方策を講ずるというにあつた。ところが、その後の世界戦政局の推移は、この方針に根本的検討を加えなければならぬ事態となつてきた。

即ち戦略的には太平洋方面における米国の反攻がその速度と規模とにおいて我が方の予想よりも遙かに速くしかも強大であつたため、緒戦の戦果拡張的諸作戦——ミッドウェイ作戦、ガ島作戦及び南東太平洋方面の島嶼作戦等——は悉く失敗に帰し、対英圧迫に指向せらるべき日本の戦力は著しく減耗した。他方政略的には、独伊軍の北阿撤退を転機として伊国の脱落という好まじからぬ事態が招来し、日独伊三国共同戦争遂行の基本構想もまた崩壊するに至つた。

かかる情勢に対処するため、検討は、先ず大本営の戦略方策から始められた。大本営においては、昭和十八年九月初頭「敵情判断」を決定し、この敵情判断に更に諸般の情勢を加味して国軍の全般作戦指導に検討を加え、九月十五日、従来の作戦方針に変更を加えることを決意した。大本営新作戦構想の狙いは、ガ島撤退以後引続き行われている南東太平洋方面における敵との決戦遂行による激烈なる消耗戦から、思い切つて間合いをとり、いわゆる「絶対国防圏」

を設定して不敗の戦略態勢を造成し、その間航空兵力を中核とする陸海戦力の飛躍的充実を図つて、主動的に米英反攻の高潮に対決せんとするものであつた。

右大本営の新作戦構想を遂行するためには、国家の全機能を挙げてこれに集中することが必要であつた。先ず陸海軍の兵備充実を必要とした。次いで新防衛線への陸海戦力の配置が必要であつた。そのためには船舶の増徴は不可欠の要素である。又航空機の大増産を中心とする陸海決勝戦力の造成のためには、鉄鋼、特殊鋼、アルミニウム等の画期的生産増強に俟たねばならぬ。しかし、これらの目的達成の前提条件として、船舶建造量の増大もまた重要な要素であつた。これらの諸要素は、互に因となり果となつて、どれ一つでも輕視せらるべきものではなく、そしてその目的を達成するには真に政治、産業、経済等各般に亘る綜合施策の遂行が必要であつた。

かくして、大本営及び政府は、政戦略の綜合的検討を進め、遂に九月三十日、御前會議を奏請して「今後採るべき戦争指導の大綱」を採択するに至つた。この戦争指導大綱は、開戦後約二九年に垂んとする戦争の実績によつて、漸く深刻に確認せられた戦争様相の分析に基礎を置き、日本が直面しようとしている重大な決戦段階を切抜けるための綜合的最高国策を定めたものである。即ち日本としてはこの時において、緒戦以来の追撃的戦争指導の觀念を清算すると共に独伊への依頼心を払拭し、巨大な敵側の反攻勢力に対し独力を以て立ち向うべき肚構えを確定したと見るべきである。

しかしながらこの基本国策の採択は、敵側施策との相對的關係において一年以上の時間的すれのあつたことは否み得ない事実であつた。この故に日本の努力にも拘らず、この国策の結実に先だち不十

分な態勢のまま敵側より決戦を強要せられる結果となつた。

1 大本営の敵情判断

大本営は、昭和十八年九月初頭、敵情を次の如く判断した。

一、敵情全般

連合側の反攻は今後益々熾烈化するべく、世界戦争は、連合側の枢軸側に対する連続的攻勢を以て推移し、本年後期以降明年春夏の交に至る間に於て愈々高潮となるべし

而して東亜に於ては、米英は、印度、濠洲、支那と共に益々対日圧迫を加重し、南東方面の反攻を更に強化継続すると共に、南西、北東両方面より対日包囲圈の圧縮を図りつつ、空、海より我が占領要域に対する攻撃を強化し、以て為し得る限り速かに東亜に於ける戦局の帰趨を決せんと企図しあるべし又支那方面に於ては、重慶軍は依然抗戦を継続すべく且つ連合側空軍の跳梁は今後逐次増大すべし

ソ国の対日戦回避には変化なかるべきも、米に対する東ソ基地供与に關しては警戒の要あり

二、帝国を繞る敵側の兵力配備並に之が増勢判断

帝国を繞る米英軍の兵力は、目下第一線兵力航空約二、五〇〇機、地上約二三箇師団にして、第二線を含み航空約六、〇〇〇機、地上約七八〇箇師団と判断す。右敵兵力の配備概要左の如し。

兵力区分	航空兵力 (機数)		地上兵力 (師団数)	
	第一線	總兵力	第一線	總兵力
北東方面	約 三〇〇	約 八〇〇	二—三	約 六
中部太平洋方面	約 二〇〇	約 一、〇〇〇		約 三

南東方面	約 二、三〇〇	約 三、〇〇〇	約 二〇	約 三〇
南西方面	約 六〇〇	約 一、〇〇〇	約 二〇	約 三〇

今後に於ける之が増勢の判断は、歐洲に対する敵側第二戦線の構成規模、敵側船腹の状況、米国軍備拡充の進捗度により異なるべきも、敵側は依然歐洲方面の反攻を重視し且つ作戦余裕船腹現在二〇〇万噸今後一年間に於ける増加四〇〇乃至五〇〇万噸噸程度を前提とする帝国周辺に対する敵側總兵力の増勢判断左の如し

時期	航空兵力 (機数)		地上兵力 (師団数)	
	第一線	總兵力	第一線	總兵力
昭和十八年末	約 四、〇〇〇	約 七、七〇〇	約 三	約 一〇
昭和十九年中期	約 五、〇〇〇	約 九、〇〇〇	約 三	約 一〇
昭和十九年末	約 七、〇〇〇	約 一三、〇〇〇	約 三	約 一〇

三、敵海上兵力判断

1 米艦隊主力は、ハワイより南東太平洋方面に亘り数箇の部隊に分れて行動しありて、其の總兵力は空母—約六隻、戦艦—約一五隻、巡洋艦—約一五隻を基幹とするものにして、此の外アラスカ、フリーニシヤン方面及濠洲方面に夫々数隻より成る一部隊行動しあり

又約一〇隻内外の特空母は、主として南東太平洋に於ける護送に任じあり

今後に於ける米空母の増勢予想は、昭和十八年末保有約一二隻、同十九年中期約一六隻、同一九年末約一八隻にして、米国の建艦は順調に進捗しあるを以て或は若干繰上げらるることあるべし

2

印度洋方面に於ては、英艦隊を主体とする空母一隻、特空母二隻、戦艦四隻、巡洋艦一〇隻程度の艦隊印度洋西部に行動しあるも、伊太利脱落の今日歐洲方面より少くも空母四乃至五隻、特空母数隻、戦艦二乃至三隻、巡洋艦十数隻を主体とする有力なる艦隊は、随時増派可能なるべし

3

米潜水艦は、ハワイ、ダッチハーバー、ブリスベン、パース等を基地として約八〇隻内外あり別にセイロン方面を根拠とする十数隻の英潜水艦あり

四、対日企図に関する判断

敵は、今年後半より明年に亘り太平洋方面に於ては、ラバウルを中心とする南東方面の要域、印度洋方面に於ては、緬甸、アンダマン、ニコバル、スマトラ等南西方面の要域に對し、夫々東西相策應して攻勢を執り之が占領を企図すべし
ラバウル方面に於ては、次いで南洋委任統治領及比島方面に對し逐次攻略の歩を進むるならん

此の間適時千島及バンダ海方面の攻略を企図し、海上交通破壊の強化、帝國本土及我が占領要域に對する爆撃を反覆企図すべし又中部太平洋諸島に對しては、現有敵空母兵力を以てしては大規模なる攻略を企図する算少きも、本年末に至ればラバウル方面の攻勢と関連し、ギルバート、ナウル方面或は大島島南島島方面の攻略を企図する算少しとせず

2 大本營作戦方針の変更

〔新作戦方針〕

大本營においては前述の敵情判断に基き、その他各般の情勢に検討を加えて今後の陸海軍全般の作戦指導について研究を進めていたが、従来の作戦方針に変更を加える必要を認めるに至つたので、九月十五日次の如き作戦指導方針を決定し、九月三十日次に述べる「戦争指導大綱」の御前會議決定とともに発動することとなつた。

ととなつた。

帝國陸軍は、海軍と密に協同し左の方針に基き作戦を指導す
一、中、南部太平洋に於ては、南東方面現占領要域に於て来攻する敵を撃破しつつ極力持久を策し、此の間速かにバンダ海方面よりカロリン群島方面に亘り防備を完成し且反撃戦力を整備し、以て来攻する敵に對し徹底的に攻撃を加へ、勉めて事前に其の反撃企図を破潰す

二、南西方面に於ては、帝國の戦争遂行上現占領地域を絶対に確保す

之が為特に緬甸、アンダマン、ニコバル、スマトラ方面に於ては、来攻する敵を徹底的に撃破し其の企図を破潰す

三、支那方面に於ては、概ね現占領地域を安定確保しつつ對敵圧迫を強化して敵側戦意の破潰衰亡に努め又北方に於ては、為し得る限り戦備を強化して米ソ提携を封じ以て對ソ戦の生起を防止す

四、帝國本土、南西油田地帯、海上交通線の各防備を極力強化し戦争遂行に遺憾なからしむ

五、各方面に亘り深く敵中に挺進する破壊作戦に勉む

六、各種の手段を尽して陸海軍戦力就中航空戦力及海上輸送力の綜合發揮に勉む

〔新方針採用の理由〕

右大本營の新作戦方針採用の主なる理由は、從來多大の犠牲を払つてこれが保持に努力して来た東部ニューギニヤ、北部ソロモン群島、マーシャル群島を連ぬる要域は、今や南東方面において將に破綻に瀕せんとしている、又ラバウルを中心とする南西方面わが勢力の無力化傾向は、延いてはマーシャル、ギルバート方面の弱화를招来せんとしている、かくして南東方面における彼我戦勢の懸隔は、今後たとえ戦力を投入しても、長期に亘つてこれを確保し得る成算はない、との判断の下に、この際絶対国防

圏を一挙にパンダ海方面より東西カロリン群島及びマリアナ群島の線に後退せしめ、同線における防備を蔽にし、反撃戦力就中航空戦力を整備し以て来攻する敵を徹底的に撃破せんと企図によるものであった。

かくして、爾後における南東方面作戦の性格は全面的持久戦に転移し、ラバウルを中心とする同方面三十数万に上る我が占領部隊は、漸次敵中に孤立するの已むなき状況となつた。

3 九月二十五日の連絡会議

右大本營の作戦方針を基礎とし、今後大本營及び政府は如何に戦争を指導せんとするや、この問題に取り組むため検討が進められたが、先ず前提として、「世界情勢判断」「戦略方策」「対外方策」の三件について、九月二十五日の連絡會議に提議せられ、それぞれ次の如く決定を見た。

〔世界情勢判断〕

第一、各国の戦争指導

一、米國

米國の戦争目的は、自國を中心とする世界体制の確立を期し日独特に日の完全屈伏に在り 而して米は速に終戦を企図し、今明年中に戦勝の態勢を概成せんことを期し優越せる物的戦力を極度に發揮して英國と協力しソ及重慶を利用し、以て日独の打倒を図るべし

其の攻撃兵力の重点は、東亞に指向せらるべく又ソを対日戦に導入するに努むべし

戦争交綏し日独の完全屈伏至難なりと認むる場合に於ては、日独の勢力を努めて圧倒し与國並に敗戦國に自己勢力を扶植する程度に止め、戦局收拾を企図することなしとせざるべし

二、英國

英國の戦争目的は、概ね戦前に於ける勢力を維持する為日独特に独の完全屈伏に在り

而して英は、米との提携を愈々緊密にして其の重点を独に指向しソを利用して先づ独の屈伏を図り、他方米と協力して東亞戦線に於ける攻勢を加重し、戦後に於ける東亞處理に不動の地歩を確保せんとするならん 其の間英帝國の結束及近東、阿弗利加に於ける從來の地位の確保に努むべし

然れども、歐洲の勢力均衡を計り得る範圍に於て独の存在を許し、ソの歐洲赤化の防止に利用し自國の健在を策することあるべし 而して戦勝の爲には米に追隨すべしと雖も、独の脅威低減するに至らば米に對し自主的態度に復歸することなしとせず

三、重慶

重慶の抗戦建國の目的は、外國勢力を排除し其の領土及主權の完整を計るに在り 而して帝國に對しては、主として米英戦力に依る日本の屈伏を冀求し、少くとも支那事変前の態勢に復歸することを期しつつ自らは概ね防勢を持して戦力の消耗を回避し、此の間為し得る限り自力更生の策を講じて戦後に於ける自主的地位の確立を図るべし

四、ソ連

ソ連は依然世界赤化政策を遂行すべきも、現戦争目的は、差当り独の脅威を免除し独ノ開戦前の領土を恢復するに在り 更に為し得る限りスラブ民族の統一、バルカン、西亞方面に對する勢力の伸長を企図すべし

之が為ソは、自主的に世界戦争に對処し極力英米を利用しつつ先づ独の屈伏に専念すると共に、戦後處理に對する發言權を確保する為政略を活発化すべし

ソは、帝國に對しては当分靜謐保持を主旨とすべし

五、獨國

独の戦争目的は、ソ連の脅威を排除すると共に英国の旧支配勢力を打破し、大独逸民族国家を組織し其の生存の爲の歐洲広域生活圏を建設するに在り 而して独は、不敗態勢の確立を期し当分持久態勢を持続して国防力の充実特に航空戦力の増強に努め、其の間成し得る限りソ戦力を減殺し戦争主導権の回復を図り、且好機を捉へて米英の進攻特に第二戦線構成を撃破すると共に、交通破壊戦並に対英空襲を強化し、其の戦意喪失に努むべし
対英本土上陸及西亜方面進出は、当分見込なし

第二、各国戦争遂行能力

一、米 国

- 1 国民の団結力は依然鞏固にして、其の物的優越感にも鑑み継戦意志は動揺せざるべし 然れども其の志気は主として戦勢の振否に依り級数的に増減すべし
人的資源は、漸次困難を感じつつあり
- 2 「ル」の地位は鞏固にして、其の政治力は戦勢の有利なる限り動揺せざるべし
大統領の改選期の動向には注視を要す

- 3 工業生産力は、昭和十八年末頃略々頂点に達し爾後概ね其の水準を維持すべし
但し飛行機等の重点軍需工業は、其の後と雖も相当期間尚上昇するならん

食糧の国内自給は充分なるも、与国に対する補給は中南米の利用に俟たざるべからず

- 4 地上兵力一二六師団を基幹とする現陸軍拡張は昭和十九年中期に一応概成を見るべく、戦艦二三隻、航空母艦三七隻保有を目途とする現海軍拡張は昭和二十年頃迄に概ね完了するならん

二、英 国

- 1 国民の団結力は愈々鞏固にして、戦勢不利となり国民生活逼

迫するも、最後の勝利を信じ継戦意志は動揺せざるべし

本国の人口資源は、利用の最大限度に達しあり

- 2 「チ」の地位は鞏固にして、其の政治力は動揺せざるべし
本国の生産力は上昇の余地なきも、米国の援助に依り現状維持概ね可能なるべし

食糧は海外依存極めて大なるも、未だ其の需給に窮迫しあらず

- 4 陸海空軍は、米国の援助と自治領等の利用とに依り尚相当の増勢を見るべし

三、重 慶

- 1 継戦意志は、相當に鞏固なり
人的資源豊富なり
- 2 蔣の地位は尚鞏固にして、其の政治力未だ衰へず
軽兵器及食糧の自給可能なり
- 3 軍隊は裝備劣等なるも、現状程度の戦闘に支障なし
在支米空軍は、漸次増強の趨勢に在るを以て之が活動は輕視を許さざるべし

四、ソ 連

- 1 国民性の粘着力と「ス」の指導力とに依り、国民の継戦意志は尚鞏固にして動揺せざるべし
人的資源は概ね限度に達しつつあり
- 2 「ス」の地位は極めて鞏固にして、其の政治力は動揺せざるべし

- 3 生産力は、明年末基礎工業に於ては独ソ開戦前の約七―八割程度に回復すべし

但し、飛行機並に戦車の生産量は、本年末頃には戦前の生産量を凌駕すべきも爾後急速なる上昇は期待し得ざるべし
食糧は相当窮迫しあるも、未だ国内動揺を来す程度に至らず

4 年度の絶対損耗を概ね昨年度（約二五〇万）とするも、明年末に於て現有兵力（約九〇〇万）の保持は可能なるべし

五、独国

1 国民生活は相当逼迫しあるも、国民の志気は旺盛にして其の團結は鞏固なるのみならず、国民の愛国心と前大戦の苦き経験とにも鑑み戦争意志は動揺せざるべし

人的資源は概ね限度に達しあり

2 「ヒ」の地位は極めて鞏固にして、其の政治力は動揺せざるべし

3 生産力は向上の見込なきも、現戦力の維持は概ね可能なり

航空機生産の急速なる増加を企図しあるも、空襲並に労働力の状況に依りては予期の成果を収め得ざることあるべし

食糧は勢力圏内の需要を概ね充足し得べし

4 年度の絶対損耗を約六―七〇万（昨年度の絶対損耗約八〇万）以内に止むるにあらざれば、明年末に於て現有兵力（約一、〇〇〇万）保持は困難なるべし

六、各国戦争遂行上の主たる強弱点（筆者略）

第三、今明年に於ける主要なる情勢の推移

一、独ソ戦の見透

ソは英米の欧洲進攻と策応し、冬期に至るも依然自主的攻撃を続行すべく、独は守勢を執り極力敵側の人的物的資源の消耗を図るべきも、其の戦線は逐次西移し概ね「バ」地方及ドニエプル河に沿ふ要域に於て停頓するならん

而してドニエプル河に沿ふ要域の喪失は、独に取りて食糧石油等の資源の取得並に傘下諸国の掌握に及ぼす影響等極めて大なるべきを以て独は極力之が保持に努むべし

二、欧洲に於ける英米の第二戦線

英米は、先づ独傘下諸国の攪乱並に中立国の反枢軸陣営導入を

策し、ソを利用して極力独戦力の減殺を図り且独空爆を激化すべく、此の間主として地中海方面、一部を以て北欧方面等よりする独独包囲攻撃に努むべし

又独戦力の程度並に英米の大陸進攻作戦の準備進捗度を較量し、決戦的西欧進攻作戦を企図することあるべく、其の時機は明年春夏の候となる公算大なり

而して英米とソとの間に伏在する機微なる関係は右第二戦線構成の時期及方面の選定に相当の影響を与ふることあるべし

独は、既に対英米は勿論対ソ早期決戦の機を失し脆弱なる素因をも有する国防圏に立脚し大規模空爆下に防勢を採るの已むを得ざる状況に在るも、英米の独独包囲攻撃作戦に対しては極力遠く阻止するに努むると共に、其の西欧進攻作戦に対しては好機を求め可及的大なる戦力を集中して之が撃擢を企図するならん

其の西欧作戦の成敗は、独ソ戦の帰趨と共に独対英米戦の大勢を決すべし

三、東亜に於ける米英の反攻

米英は、帝国の不敗態勢確立に先立ち速かに之が破擢を企図し、欧洲戦局の推移如何に拘らず各方面より包囲攻撃を強化し来るべし

特に今秋冬を期し南東方面の攻勢を愈々熾烈化すると共に、ビルマ、アンダマン、スマトラ方面に対して大規模攻撃を敢行し戦局の急転を図るならん

又我が海上交通の破壊並に戦略要点及資源要地に対する空爆を激化すべく、特に洋上及支那本土よりする我が本土及交通線に対する空襲に対しては、大いに警戒を要す

英米は、武力攻勢に策応し政謀略を激化し、大東亜諸国家諸民族の対日離間を策すべし

四、ソの対日動向

ソは、差当り進んで又は英米の強制に依り、対日開戦は勿論基地供与の如き措置に出づること先づなるべきも、情勢の推移、當時に於ける帝国及びソの国力如何に依りては其の可能性絶無にあらざるべし

五、歐洲に於ける和平

差当り独、ソ、英米何れよりも和平を提議するの算殆どなかるべし

然れども、諸般の情勢特に人的資源の損耗枯渇、空爆の激化、政謀略の熾烈化等に依り厭戦求和の思想の抬頭を見るべく、戦局の推移に伴ひ独英米、独ソ、歐洲和平等各種和平問題の具体化を見る算無しとせざるべく、又予想すべからざる異変を直接動因として急激に和平の実現を見る可能性も亦絶無にあらざるべし

第四、綜合判斷

米英ソは、戦争の主動權を把握しある現状に乘じ、今や全力を傾倒し政戦兩略に亘る攻勢を連続的に強行せんとし、之に對し日独は、既得の戦果を活用し飽く迄之が阻止破摧に努めつつあるを以て、茲に世界戦争は明年春夏の候に最も熾烈化すべし
〔戦争様相の確認〕 日本は、右「世界情勢判斷」において、漸く今次戦争の戦争様相——戦争の推移と海洋作戰の様相——を確認するに至つた。

即ち、伊國の脱落によつて三国共同戦争遂行による対英先勝の希望は完全に消滅し、独逸もまた対ソ各個撃破の好機を逸して内線被圧迫の苦境に立たんとしている。日独の關係は、当初の積極的希望より今や互に相手の健在健闘を希念する消極的期待へと變化し、日本としては真に、独力による長期持久戦争遂行の肚を持つて対処すべき事態となつた。

南東太平洋方面における攻防戦の推移は、海洋作戰の様相を端的に示唆するものであつた。今や制海權の性格は完全に變化した。大

艦巨砲主義を中心とする主力艦隊の對戦による制海權爭奪の時代は完全に去つた。基地航空と機動部隊との巧みな運用による制空權の獲得、維持、推進下に行う水陸兩用作戰こそ海空作戰の真姿である。日本は、ソロモンの血の代償によつてこの真姿を確認し得るに至つたが、これに對決すべき成算を得るためには、時と処が必要であつた。

絶對国防圈の設定を繞る政戦略施策の展開は、かかる認識の中に生れ、且つ進められて行つた。

〔今後の戦略方策〕 右「世界情勢判斷」の審議採決に続いて、戦略方策の検討に入つた。

大本营としては、既に述べた如く九月十五日新作戦方針の決定を見ていたので、この方針決定の骨幹となるべき要素を、陸、海兩統帥部次長よりそれぞれ次の如く説明して政府側の諒解を得ることとなつた。

第一、今後の我作戦及兵備の見透如何

陸軍部

秦參謀次長説明

一、今後の我作戦見透に就、

(一) 中、西部太平洋方面

ソロモン東部、ニューギニア方面に於ては、敵の優勢なる航空勢力の爲遺憾乍ら制空權の大勢は敵の保有しある所にして、之が爲我軍の勇戦に拘らず同方面に於ける我が戦略態勢は逐次敵に蚕蝕せられつつありて、今後の戦局推移の見透としては樂觀を許さざるものあり

一面中部太平洋及西部ニューギニア方面の後方の要線は、帝国国防上絶対に確保を要する戦略要線にして若し之を失ふ時は我が国防態勢は重大なる事態に立至る虞大なるを以て、目下極めて不完全なる状況に在る同方面の防備を速急に強化し遅くも明年中期頃迄に之を整備すると共に我反撃戦力特に

航空勢力の増勢を図り有ゆる手段を尽して之が確保を期し敵の反攻を撃擯せざるべからず。

(一) 南西方面

連合軍側特に英国の印度洋正面に対する反攻企図は逐次明瞭となりつつあり 特に地中海方面の情勢に鑑み雨季明前後ビルマ、特にアキアブ方面及アンダマン、ニコバルに対する敵の反攻は必至にして、スマトラ方面に対する反攻の公算も著しく増大せるものと判断せらる

之に對し我方としては、洋上よりする敵の反攻撃砕の骨幹たるべき航空及海上勢力の劣勢、特にスマトラ油田地帯防衛の防空兵力の不足等の欠陥あるも、今後軍の企図しある航空兵力の増勢、防備強化等の対策を促進すること必要なり

特にスマトラ油田に對する敵の空襲に應ずる防衛に就ては、樂觀を許さざる情況なり

(二) 其他の正面

北東方面の防衛は目下急速に強化せられつつありて、本年入冬期前には一応概成し得べし

支那方面に於ては、敵空軍の跳梁あるも軍は適時之を封殺しつつあり

之を要するに、今後に於ける戦局の推移は愈々深刻なる決戦の様相を呈すべく真に帝国の存亡を賭する重大機局に直面せんとす 之れに對し國家総力を結集して極力航空勢力の増勢を図り、海上機動力を増強し、陸海一体となりて作戰指導の適切を期するに於ては、敵の反攻企図を徹底的に破摧し戦局を有利に進展せしめ得るの確算あり

二、今後の兵備に就て

陸海軍を綜合し、今後の作戰遂行上所要兵備に就き述べれば概ね左の如し

(一) 陸海航空兵力

大東亞戰爭完遂上、陸海軍として所要最少限度の航空兵力は、對日正面に展開すべき航空兵力に對抗し得、且機に應じ少なくも局所に於ては絶對優勢を以て敵に殲滅的打撃を与へ得るものなるを要す 而して右兵力量は、遅くも昭和二十年度初頭迄に之を完成する要あり

之が為昭和十九年度に於ける陸海軍所要機数は五五、〇〇〇機なり 而して右所要機の必成を期する為には、國家総力を挙げて今後格段の努力を必要とすべし

(二) 陸上兵力

大東亞四周よりする敵の反攻に對し、必勝不敗の戰略態勢を確立せんが為には、航空戦力を骨幹とし之に附随する陸上兵備特に海洋正面ビルマ方面の兵力並に本土及大東亞要域の防空兵力の増強を必要とするのみならず、對支、對ソ正面亦少くも現状程度の軍備を必要とす

然れども、国力全般の關係より對支、對ソ軍備に就ては、特に其の裝備に於て之が低下を忍び以て航空強化に優先徹底せんとす

(三) 海上兵力

本戦争完遂上帝國海軍としては、東西両正面に來攻を予想さるる米海上兵力に對抗可能の兵力を保有するを要する所、我が国力の現状に於ては現行計画以上に艦艇の増勢を行なふこと至難なるのみならず、航空兵力の画期的増強の為、勢ひ現行の艦艇建造計画を縮減せざるを得ざる狀況にあり

之が為海上兵力の整備は、海洋航空戦力の確保推進を主眼とする外、特色ある攻撃的兵力及對潛警戒兵力に集中し、爾他の兵力は一切充實を見合はし、其の欠は地の利及之を活用する航空兵力の活躍に依て補はんとするものなり

第二、帝国戦争目的達成上絶対確保を要する圏域如何

海軍部 伊藤軍令部次長

一、帝国戦争目的達成上、絶対確保を要する圏域は第二説明の趣旨に基き概ね左の如く概定せり

千島、小笠原、内海洋（中西部）及西部ニューギニア、スンダ、ビルマを含む圏域

二、説明要旨

(一) 選定の根拠

内戦屈敵の自由を保持しつつ、左記戰略上の要請を充足すべき最少限度の要域とす

(1) 本土及大東亜圈重要資源地域（米英對抗戦力の造出並に

国民生活最低限度維持に必要なもの）に対する侵襲阻止

(2) 国内海空陸輸送の安全確保

(3) 大東亜圈内重要諸民族の政略的把握

本国防衛圏縮小は、作戦遂行及国力培養上彼此関連して欠陥を深刻化し、長期戦遂行を不可能ならしむる虞大なり

(二) 確保の程度

右圏内に於て敵の大拠点を得せしめず、且圈内重要地点（政治、産業等の致命的中枢部）に対する敵の空襲を防止しその被害を少からしむ

(三) 確保上の着眼

(1) 敵の大反撃を封止し且之を撃擯すると共に、機を失せず反撃積極作戦に出る為適當なる地の利を活用す

(航空作戦及補給の見地を主眼とし、作戦遂行の根拠たらしむ)

(2) 敵の航空威力圏を本国防衛圈内に侵入せしめざる為、圏域の外郭には所要の前衛拠点を設くるものとす

(3) 圈内作戦交通を確保す

第三、船舶損耗減少方策に就て

海軍部 伊藤軍令部次長

一、船舶損耗減少方策に就いて

(一) 船舶損耗防止の成否は、一に懸て護衛艦艇、航空機等所望護衛兵力の急速整備にあり 而して海軍としては、従前より

航空戦力の増強と共に戦備の二大眼目として凡百の努力を払ひ之が急速整備に努めつつあるも未だ予期の兵力に達せず限られたる施設器材を以てしては、損耗の激化に即応する兵力の実現は至難なる実情に在り

船舶問題極めて重大なる現段階に於ては、国家として航空戦力に次ぎ之が充足に更に格段の努力を傾注するの要切なるものと雖、尚船舶保有量の現見透を基礎とし、潜水艦に因る損耗を月平均三万噸程度に抑止する為には、概ね護衛艦艇三六〇隻、対潜飛行機二、〇〇〇機程度を常時整備保有しおく要あり

(二) 護衛艦艇機の増強と相俟て各種対潜兵器の画期的進歩並に整備（船舶自衛兵機の強化普及を含む）は、損耗防止上極めて有効なる方策にして之が整備に努めつつあるところ、其の生産に關しては関係各部の海軍に対する全幅の協力を切望する次第なり

(三) 戦勢の変化、輸送に対する要望及護衛兵力整備の状況等を勘案し、適時適切に護衛方式を改訂して戦機に即応せしむる一面、護衛作戦の要求に應ずるが如き合理的輸送方式を確立の要あり

(四) 船舶損耗は、敵潜水艦によるものの外飛行機、海難に起因するもの毎月三万噸前後に達しつつある実状にして、特に将来飛行機による喪失増大の傾向ありと認めらるるところ、至急左の諸方策を採り之が局限を圓るの要ありと認む

(イ) 敵航空威力圏内に在る重要港湾及交通線の防空強化

(ロ) 護衛艦艇及船舶の対空兵装の強化

(ハ) 救難船の拡充及船舶応急施設の整備

(ニ) 船員の素質向上（待遇改善並に養成機関の内容充実）

(ホ) 船員の素質低下及員数不足に基く見張、警戒、応急、自衛兵器の使用法等に於ける欠陥が、船舶喪失の因として輕視し得ざるものあるに鑑み、至急之が対策を講ずる要ありと認む

(ヘ) 船舶損耗の減少に關しては、其の緊急性を痛感し既に海軍として凡百の努力を払ひつつあるも、更に格段の工夫を加えて其の減少に努力すべきも、之が為必要な戦備及輸送其の他の要望に關し国力の重点を指向せられ關係各部を挙げて密に協力せられんことを望んで止まず

二、船舶損耗の見透

(一) 既定計画の護衛兵力並に造船量を以て推移せば、戦勢に大なる変化なき限り保有船腹量が底をつくべき時機は、概ね本年末乃至明年初頭なるべく、明年四月以降逐次些少ながら保有量を増す見透なり

尚右の場合潜水艦による被害状況は、本年末頃十萬噸、明年中期には六萬噸程度と予想しあり

(二) 以上は潜水艦による被害を主体として予想したるものにして、飛行機による被害並に海難等が激増するに於ては自ら異なる経路を辿るべし

三、開戦以降船舶被害一覽表（昭和十八年、九、二〇現在）

原因	被害程度		沈没		損傷		合計	
	隻	噸	隻	噸	隻	噸	隻	噸
潜水艦	二五	一三三、〇	一六	九〇、七	四六	三三三、七		

備考	飛行機		海難		合計	
	隻	噸	隻	噸	隻	噸
總噸數五〇〇噸以上の船舶を計上す	三〇、七	七、七	一、五	一、五	三二、二	八、二
	一、五	一、五	一、五	一、五	三、〇	三、〇
	一、五	一、五	一、五	一、五	三、〇	三、〇
	一、五	一、五	一、五	一、五	三、〇	三、〇
	一、五	一、五	一、五	一、五	三、〇	三、〇
	一、五	一、五	一、五	一、五	三、〇	三、〇
	一、五	一、五	一、五	一、五	三、〇	三、〇
	一、五	一、五	一、五	一、五	三、〇	三、〇
	一、五	一、五	一、五	一、五	三、〇	三、〇

〔今後の対外方策〕 次いで、対外方策に關する外務省案を検討審議し、次の如く決定した。

第一、帝国の對ソ態度並に對ソ戦回避方策

一、帝国の對ソ態度

帝国は、飽迄日ソ戦を回避し、進んで両国国交の好転を図る

二、對ソ戦回避方策

1 對米英戦に専念し、其の戦果を發揚するを以て根本とす

2 両国關係を友好ならしむる如く積極的施策を為す

3 我方よりソ側を刺激することなく、特にソに對し対日態度硬化の口実を与へざる如く留意するも帝国の正当なる主張に關しては毅然たる態度を以て臨む

第二、独ソ和平斡旋に關する帝国の態度

一、帝国は情勢の推移に細心の注意を為し、好機を捉え両国の間に之が斡旋を為すの用意を有す 但し武力調停は之を為さず

二、之が為左の点考慮を要す

1 準備工作（第一及第三参照）

2 時期の判断（例へば独の對ソ又は對米英反撃の成果實現、帝国の對米英戦果の昂揚、重慶工作實現等）

3 無通告単独和平に對する警戒及其の場合の対策

第三、日独提携強化方策

一、相互の實力に對する正当なる認識を基礎とし、両国間の信頼

感を維持増進するを主眼とす

二、両国の戦争指導、其他両国の利害に関連する事実に関して、常に隔意なき意見交換を為し能ふ限り共同の措置を図る

三、帝国は、独との間に飛行機其の他の方法に依る頻繁なる人的交通を図る（重要人物の来往を考慮す）

四、独との間に、能ふ限り軍需物資及技術の交流を図る

五、大東亜経済開発に独の参加を認む

六、日独共同の政治目的を共同に宣明

七、独内各層に親善関係を増進す

第四、独が対ソ参戦を強要する場合帝国の採るべき最後の態度

帝国は、大東亜戦争完遂の為、対ソ関係の静謐を保持するを要し、右は結局に於て独の爲にも有利なりと確信す 此の見地より独の最終的要求あるも対ソ戦の回避の態度を堅持す

第五、予期せざる欧洲情勢の急変に対処すべき帝国の態度

一、独が英米と单独和平をなすが如き欧洲情勢の急変ある場合、帝国としては結局独力英米に当らざるべからざるを考慮し内外に亘り万全の対策を整ふるを要す

二、帝国は、右の如き情勢の急変が独の帝国に対する対ソ参戦要求とも関連して惹起する可能性をも考慮し、対独施策に充分留意するを要す

第六、帝国の採るべき対重慶政治工作の条件並に之が成功の見透一、重慶政治工作を開始するに先立ち、左の諸点を充分確認するを要す

- 1 汪主席の真意及具体的対策
- 2 重慶の偽装和平

二、我方の和平条件は、実質的には概ね日華同盟条約の内容たるべきも、更に左の諸点に関し我方の態度を決定し置くの要あるものとす

- 1 和平条件実施の為の保障事項

2 全面和平後に於ける中国と大東亜戦争との関係

3 満洲国の取扱

4 汪蔣関係の取扱

5 重慶側在米資金及資産

6 中国更生の為の対支経済援助

7 既成事項の具体的調整方法

8 我占領地域に対する支那側の参加

9 共産党の処理

三、蔣介石を中心とする重慶抗戦陣営の中核は反枢軸側の戦局有利なる現況に於ては、依然強固なる継戦意志を有するものと認めらる

1 強力なる日本の存在は、独立完整の為の最大脅威と認め居ること

2 戦争離脱による中国の利益は、日本戦時経済の対支依存の現況等より見て其の多きを期待し得ざること

3 戦局の推移に就ては、仮令米英の勝利に帰せずとも所詮米英は有力なる勢力として残るべしとの見透を有すること

4 米英は、戦後に於ける東亜処理に付重慶の大なる発言権を認むることを中核とする考案により、政謀略の実施を行ひ居ること

但しビルマ路の閉鎖の為米英よりの実質的援助は不可能にして且抗戦経済の困難は深刻なるものとあること、蔣として英米を利用するも之に利用せらるることに就ては相当警戒し居ること、新政策の実施に対し表面の黙殺に拘らず内部的には影響を与へ居ること、一般民衆の間に相当厭戦気分瀰漫し居ること等の事情もあり、今後ビルマの反攻撃砕せらるる等有利なる戦局の推移に依り米英の徹底的勝利困難なりとの見透を生ずるに至らば、条件の

如何により和平実現の可能性なしとせず

第七、敵側の大東亜に対する政略攻勢に対処すべき方策

敵側の大東亜に対する政略攻勢は、大東亜諸国家諸民族の対日信頼感を減殺し対日離間を図るに在り 之に対する我方方策としては

一、敵の反攻を破権し、戦果を發揚するを以て根本とす

二、大東亜諸国家諸民族に対し公正なる諸施策を實行し、以此等諸国家諸民族の自主的結集を図る。特に支那問題の解決に其の重点を指向す

三、大東亜諸国家諸民族に対し、米英の東亜に対する野望を認識せしむ

4 戦争指導大綱の御前會議決定

大本营及び政府は、右に述べた九月二十五日の連絡會議において政戦略の基本問題に関する意見の一致を見るに至つたので、今後戦争を如何に指導すべきやに關し、御前會議を奏請して議決することとなつた。

〔御前會議と議題〕 開戦後初めての西期的戦争指導方策を議する歴史的御前會議は、昭和十八年九月三十日午前十時開會、約五時間に亘る審議を経て午後三時三十分閉會となつた。會議出席者は、政府側より東條総理兼陸相以下企画院總裁、海軍、外務、大東亜、大蔵、商工、鉄道、通信、農林、厚生各大臣、大本营より陸海兩總長及び兩次官、秘密院より原議長であつた。

會議は、東條総理司會の下に進められ、先ず幹事をして世界情勢判斷（九月二十五日連絡會議決定）及び次の二議題を朗読させた。議題其の一、今後採るべき戦争指導大綱

方針

一 帝國は、明年内に戦局の大勢を決するを目的とし、敵米英

に対し、其の攻勢企図を破権しつつ速かに必勝の戦略態勢を確立すると共に、決勝戦力特に航空戦力を急速増強し、主動的に対米英戦を遂行す

二、帝國は、弥々独との提携を密にし、共同戦争の完遂に邁進すると共に、進んで對ソ關係の好転を図る

三、速に国内決戦態勢を確立すると共に、大東亜の結束を愈々強化す

要領

一、万難を排し概ね昭和十九年中期を目的とし、米英の進攻に対応すべき戦略態勢を確立しつつ、隨時敵の反攻戦力を捕捉破権す

帝國戦争遂行上太平洋及印度に於て絶対確保すべき要域を、千島、小笠原、内南洋（中、西部）及西部ニューギニア、スンダ、ビルマを含む圏域とす

戦争の終始を通じ、圏内海上交通を確保す

二、ソに対しては、極力日ソ戦の惹起を防止し進んで日ソ国交の好転を図ると共に、機を見て独ソ間の和平を斡旋するに努む

三、重慶に対しては、不断の強圧を継続し、特に支那大陸よりする我本土空襲並に海上交通の妨害を制扼しつつ、機を見て速かに支那問題の解決を図る

四、独に対しては、手段を尽して提携緊密化を図る 但し對ソ戦を惹起するが如きことなからしむ

五、大東亜の諸国家諸民族に対しては、民心を把握し帝國に対する戦争協力を確立増進する如く指導す

敵側の政略略に対しては、敵に警戒し機先を制して所要の措置を講ず

六、統帥と國務との連繫を益々緊密にし、戦争指導を愈々活発にす

七、速かに国内総力を結集發揮する為、決戦施策を断行して決戦戦力特に航空戦力を増強し、挙国赴難の士氣昂揚を図る

八、対敵宣傳謀略は、一貫せる方針の下に強力に之を行ひ、其の重点を枢軸道義の宣揚、我が大東亜政策の徹底、主敵米の戰意喪失、米英ソ支の離間及印度獨立に指向す

議題其の二、「今後採るべき戰爭指導大綱」に基く当面の緊急措置に関する件

一、陸、海船舶の徵備及補填に關し、左の通り定む

1 陸海軍は、十月上旬に於て計二五萬総噸（九月徵備分を含む）を増徴す

2 九月以降に於ける陸、海船舶の喪失に対しては、計三萬五千総噸以内に於て翌月初頭に補填す

二、航空戦力を根幹とする決戦力確保の為、昭和十九年に於て左の重要生産目標を概定し、之が必成を期す

1 普通鋼鋼材 五〇〇萬噸

2 特殊鋼鋼材 一〇〇萬噸

3 アルミニウム 二一萬噸以上

4 甲造船 一八〇萬総噸

三、前二項の要請に即応する為

1 戦力増強上必要なる凡有非常の方途を断行す

2 遅くも昭和十九年度初頭より船腹保有量を増加せしむる為

(イ) 船舶の喪失を極限す

(ロ) 甲乙造船の実行を促進す

尚陸、海、民船舶運航率の向上を期す

〔東條総理説明〕 右議題朗読後、先ず東條総理は、大本營政府を代表し議題の趣旨を次の如く説明した。

現下に於ける世界情勢に就きましては、只今幹事をして朗読せしめましたる通り判断せらるるものでありまして、敵米英は、其の

豊富なる物的戦力を以て、相携へて帝國を圧倒せんとして各方面より必死の反攻を企て、今後愈々其の熾烈化を予想せらるるのであります。

此の情勢に対処致しまして、帝國は今明年内に戦局の大勢を決するの異常なる決意の下に敵の反攻を撃破しつつ必勝の戰略態勢を確立し、好機進んで敵を撃破し、其の攻勢企図を挫折せしむると共に、此の間速に決戦戦力特に航空戦力を増強致しまして、主動的に対米英戦を遂行せんことを深く期して居る次第であります。

而して、必勝の戰略態勢確保の爲には敵の急激なる反攻状況にも鑑み、直ちに相當の船腹を必要と致しますと共に、決戦戦力の急速増強を図らなければならないのであります。然るに船腹の徵備は、直ちに爾後の決戦戦力に影響致しまして同時に兩者の要求を充足致しますことは極めて困難なる実情であります。此の必勝戰略態勢の確立、決戦戦力特に航空戦力の急速増強は何と致しましても実行しなければならぬのであります。

茲に於きまして帝國は、真に非常の決意を固め従来の行掛り等は之を一擲し、内に於きましては速に国内決戦態勢を強化して決戦施策を断行し、又外に對しましては大東亜の結束を更に強化して適時支那問題を解決し、進んで對ソ關係の好転を図ること特に緊要と存じます。此等の諸方策実行の爲には、統帥と國務との關係を益々緊密に致しまして今後の戰爭指導を愈々活発化しなければならぬのであります。

以上の見解に基きまして、一応昭和十九年末に至る迄の情勢を考慮して策案致しましたる「今後採るべき戰爭指導大綱」並に「（今後採るべき戰爭指導大綱）に基く当面の緊急措置に関する件」に付、御審議を御願ひ致します。

〔永野軍令部総長説明〕 次いで永野軍令部総長は、両統帥部を代表し、本方案中の戰略施策に關し、九月二十五日連絡會議決定の戦

略方策を基礎として次の如く説明した。

現下戦局の大勢を按じまするに、南東方面に於きましては彼我の間激闘を続けて居りますが、主として航空戦力の関係上逐次敵の進出を見つつある次第で御座るます。

又南西方面に於きましては雨期明け前後以降以降海陸正面よりする敵の大規模なる反攻が必至と判断せらるる情況で御座るまして、更に東部及北東正面並に支那大陸等より致しまする要地の空襲も予測せられますと共に、敵の海上交通破壊戦も益々激化致しますことと存する次第で御座るまして、今や各方面戦域に於て重大なる戦局に当面せるものと判断せらるるので御座るます。

以上の如き戦勢に対処致しまする為には、既得の戦果を基礎とし遅くも昭和十九年中期迄に所要の戦略態勢を強化致しますと共に、随時戦機に投じて敵の反撃戦力を捕捉撃破致しまして其の攻勢企図を粉碎し、更に好機攻勢に転移して敵の戦意を喪失せしむることが極めて肝要なりと存じます。

之が為には、先ず所要の地に更に兵力資材を急送して我反撃態勢強化の緊急措置を講じますと共に、速に特徴ある決戦戦力特に航空戦力を増強致しますことが是非必要で御座るます。

尚戦事遂行上本土及大東亜圏内重要資源地帯に対する敵の侵襲を阻止すると共に、所要の輸送路を確保し船舶損耗防止の方策を強化致しまして、対米英決戦戦力の造出と国民生活最低限度の維持を図り、更に大東亜諸民族の把握に資することが極めて肝要であると存じます。之が為には議題にありますが如き圏域を絶対に確保する必要があると存じます。

以上熟々今後の戦局の推移を大観致しまするに、其の前途は極めて重大でありまして之が打開の為には幾多の困難を予想致されるので御座るます。が、今年年内に戦局の大勢を決するを目的とし、速に必勝の戦略態勢を確立すると共に航空戦力を中核とする

特徴ある戦備の急速増強を得まして、陸海軍渾然一体となつて戦力の集中發揮を行ひまするに於ては、敵の攻勢企図を挫折して戦局を有利に進展せしめ以て主動的に対米英戦を遂行し得るものと信する次第で御座るまして、統帥部と致しましても、今回御審議を煩はします「今後執るべき戦争指導大綱」の趣旨に基き政戦一致戦争の完遂に邁進し度きものと存じます。

（重光外相説明）重光外務大臣は、本方策中対外施策について、九月二十五日連絡會議決定の対支施策に基き次の如く説明した。

一、対外政策一般に就て

戦時外交は、軍事と表裏して戦争を勝利に導くを第一義と致しますが、併せて戦勝後の国運伸張の基礎を築くを以てその使命とするのであります。

現下に於ける帝国戦時外交の基調は、次の五点に在ると存じます。

第一は、総ての与国の戦力を結集して敵に当ることでありまして、日独連繫の緊密化がその基礎をなすものであります。

第二は、ソ連との間に平和を維持することでありまして、之が為対ソ關係を調整し懸案の解決を試みる必要であります。独ソ和平の問題は右との関連に於て考慮するを要するのであります。

第三は、支那問題の処理でありまして、現戦局に於て帝国の戦勢を有利に転回する為には支那事変を解決に導くことが必要であります。蓋し目下戦争状態の終結を図り得る可能性あるものは支那（重慶）との関係のみでありまして、他の敵国との終戦は企図致し難い所であります。且支那問題が解決に向ひますならば帝国の立場は大に改善せられることとなりますが、若し之が更に紛糾致しますならば帝国に取り著しく不利を加うることに相成ります。是れ対支新政策を強力に推進する必要の存す

る所以でありまして、之に依つてのみ支那問題を解決に導く可能性が存在する次第であり、敵米英に對し重大なる打撃を加ふことを得る次第と考へます。

第四は、対支新政策を拡大致しまして大東亞地域に施し、大東亞諸国家諸民族に對する政策と致しまして之等国家民族の要望を充すに努め、一つは以て東亞に於ける各構成分子をして自發的に相協力提携するの實を擧ぐる様にし、他は以て東西の結集力を敵に對して利用するのみならず米英の戰爭目的を破壊して我世界的立場を有利に導くを適當と信ずるのであります。

第五は、此の大東亞政策を充分徹底せしめ、樞軸道義を宣揚して之を世界に向つて広く宣伝することでありまして、是は帝國の正義を明にし英米等の抗戰名目を覆滅する所以であります。

右の五大方策は、軍事と共に帝國の戰勝を確保する所以であるのみでなく、戰後に亘つて帝國將來の發展を期する為不可欠の政策であると信ずるのであります。

二、日独連繫の緊密化に就て

日独提携の強化は、帝國戰時外交の根幹でありまして帝國に於ては夙に之が為に努力し來つた所であります。共同戰爭の完遂は、共同戰爭目的に對する完全なる認識に立脚して始めて可能であります。同盟の關係にある日独兩國は、共に自衛の爲國運を賭して戰つて居るのでありまして、其の目的とする所は、歐亞に於て大國として自存し得るの途を確立せんとするに在るのであります。帝國自衛の爲の戰爭は、又東亞地域に於ける国家民族の解放、自衛を目的とし其の自主独立と共存共榮を志すものでありまして、此の崇高なる我が戰爭目的は移して以て歐洲に於ても独逸に依つて実行せらるべき次第でありまして、三国條約に所謂新秩序なるものは之に依つて初めて完しと謂ひ

得るのであります。日、独兩國は共に經濟的に開放互惠の主義を採用し得る立場にありまして、此点も共同の政治目的と共に日独兩國に於て宣揚するは單に兩國提携強化の有力なる方策たるに止まらず、兩國の戰爭目的を明確にして敵側に政策上重大なる打撃を与ふるものと信ぜられます。

日独兩國間の相互信頼の念を増進する為、常に戰爭指導其他兩國の利害に關連する事項に付きまして隔意なき意見交換を爲し能ふ限り共同措置を執ることが必要でありますので、兩國間に交通の不可能なる現狀に於きましては専ら東京及柏林に於ける現有の機關を以て、努めて密接に連絡して居る次第であります。

三、帝國の對ソ政策に就て

現下の戰局に就きましてソの對日戰爭參加を見るが如きことありましたならば、情勢は帝國に取つて決定的に不利となることは申す迄もないことであります。依て帝國と致しましては、極力日ソ關係の靜謐を保持致しましてソをして飽迄中立態度に終始せしめなければならぬ次第であります。

之が爲帝國と致しましては、對米英戰の戰果を發揚して帝國の威力を示します一方、我方よりソを刺戟すること、特に對日態度硬化、中立條約廢棄の口実を与うるが如きことを敵に差控へますと共に、進んで兩國關係改善の爲の積極的施策、例へば北樺太利權及漁業條約の如き問題に付きまして、從來の行き懸りに提はれることなく大乗的見地から適當に解決する等の方途を講じまして、以て日ソ全般の關係の根本的改善に努める必要があるであります。尤も帝國の正当なる主張に關しましては常に毅然たる態度を以て臨むべきことは申上る迄もない所であります。

尚戰爭情勢如何に依りましては、或は他より日ソ開戰の要請

せらるる場面の生ぜぬとは限りませぬが、帝国と致しましては、日ソ戦を極力防止せんとする対ソ態度は飽迄之を堅持しなければならぬと存するのであります。

四、独ソ和平に就て

帝国の対ソ方針は以上の如くでありますが、ソと致しましては西方に多事なる限り仮令英米側の要請の急なるものあるにせよ、帝国に対して俄に事を構へる様な事は先づ有るまいと存じます。帝国と致しましては、出来得るならばソをして西方に対して其の力を伸べしめる政策を執ることが時宜に適する所であります。伊太利政変後の今日独ソ和平実現するに至り、ソが地中海並に小亜細亞方面に進出するを得せしむるは、策の得たるものであると思ひます。然るに、独は猶武力戦に絶大たる自信を示して居りまして、ソ側の攻勢は遠からず挫折すべく且ソと米英との関係は容易に分離し得るものと觀察し、且歐洲を赤化より救ふは独逸の使命なりとして独ソ和平を排斥して居る有様であります。他方、ソは最近益々其国力に自信を高め、英米がソと呼応して速に第二戦線を構成するなら一挙に独を粉碎し得べしと考へて居りまして、更に進んで英米等其の与国の弱点に乗じて之と妥協しつつ着々歐洲赤化の布石を為し、今や海峡問題に付きましても英米の譲歩を強要せんとする態度であります。而已ならずソ連は、ナチ独逸との妥協は其の余地なしと称して居る有様であります。斯くの如く独ソは、思想的に對立して居るのみならず相反する自己の力に対する自信の對立をも示し、従て両者の間には差当り妥協の氣運は認められない状態であります。

然しながら、ソと英米との関係は結局異趣同舟でありまして、情勢の推移如何に依りましては独ソ間に和平の希望抬頭す

ること無しとも断言出来ませぬ。今日行はれ居る戦時及戦後に對する大規模な米英ソ三国の交渉は、關係国内に於て極めて慎重に取扱ひ居るに拘らず恐らく長期に亘り又海峡問題を繞つて相当大なる困難に遭遇するものと觀察せられ、其の成行に深甚の注意を払つて居る次第であります。

帝国と致しましては、好機あらば素より兩國間の和平実現に努力する方針で進むこと可然と存するのであります。日ソ關係の好転は之が準備手段たるものでありまして、此の見地からも帝国は日ソの關係に不斷の努力を為す必要があるのであります。

五、對敵宣伝の強化に就て

近代戦に於きまして、對敵宣伝の重要性は今更喋喋を要しませぬ。從來之が為不斷の努力を払つて参りましたが、今般更に之を一層効果あらしむる為強力なる宣伝工作を実施せんとする方針であります。之を強力に実施致しまする為には、政策方針の一貫せることと其の重点のある所を明確にすることの二点が重要であります。依て今後對敵宣伝方針は重要な政策の一部として之を決定し、之に基き当該機關をして一体となつて有効なる施策をなさしむることと致度き所存であります。而して其の重点は、樞軸道義の宣揚、我が大東亞政策の徹底、主敵米の戰意喪失、米英ソ支の離反及印度独立等に置くことと致し度いのであります。

我が盟邦諸國は、何れも其の自存自衛の為干戈を執るに至つたものでありまして、樞軸側にとつて今次戦争は世界正義の爲の戦争であり、特に帝國にとりましては大東亞を米英の桎梏より解放し東亞諸民族の自主的協力に依り大東亞の正義建設を行ひ、平等互恵の基礎の下に其の安定と繁栄を齎す為の戦争であることを益々徹底せしめ、以て樞軸道義の宣揚を努めんとする

ものであります。

我が大東亜政策を徹底し、此政策を支那を中心として強力に推進すればする程、而して又宣伝に於て之を高調すればする程、我が正当なる戦争目的は鮮明となりまして之に依つて敵の戦争目的は薄弱となり、延いて其の戦意喪失、支那と米英との背反、印度民衆に対する影響より其の独立気運の醸成等に資することを期して居る次第でありまして、大東亜政策の宣伝は敵に対する外交大攻勢となるものと信するのであります。

尚宣伝実行の具体的方策に付きましては、其の本質に鑑みまして機に臨み変に應じて遲滞なく遂行し得る様凡ゆる努力、措置を為す所存であります。

以上申述べました通り、此際我が外交の運用を統制し、宣伝工作を強化し、以て軍事と相表裏して戦時外交を敏活に施策し更に戦後に対する我が国力伸張の基礎を築くことに努めなければならぬと考へて居る次第であります。

〔青木大東亜大臣説明〕 青木大東亜大臣は、本方案中の大東亜政策に關し次の如く説明した。

一、大東亜戦争完遂の爲の帝国の対外方策の狙ひと致しまして、帝国を中心とする大東亜の結束が極めて重要なものなることは敢て贅言を俟たざる所であります。蓋し大東亜に於ける人的及物的資源を挙げて戦力化することが、今次戦争に於ける勝利確保の一大要諦でありまして、殊に大東亜の諸地域に賦存する資源の直接戦力化、就中石油、鉄、石炭、アルミニウム原料等重要資源の供給確保並に食糧自給体制の確立は、帝国の物的戦争遂行力の根源を為すものであります。而して右戦力源の発揚の爲には大東亜諸国家諸民族の結束協力を絶対に必要とすること申す迄もありません。

更に政治的の観点より見ますれば、大東亜諸国家諸民族が帝

国を中心として結束するに至りますことは、大東亜建設の必須的要件たるのみならず、帝国の戦争目的の公正なることを世界に向つて実証するものでありまして、右は夫れ自体米英の対日戦争名目の覆滅を意味するものであります。斯様な見地から致しまして帝国は従来より大東亜の結束の爲種々努力して参つたのであります。が、現下世界情勢の推移に鑑みまして、此の際大東亜の結束を更に強化して其の結実を図り、殊に成るべく速に支那問題の解決を図るの要愈々緊切なるものと存ぜられます。

二、支那問題の処理に付きましては、曩に御決定の「大東亜戦争完遂の爲の対支処理根本方針」に基きまして、国民政府の政治力の強化と共に重慶抗日の根拠名目の覆滅を図る爲新なる各般の方策を実施して参つて居るのであります。が、之が中国一般に与へたる政治的影響は相当見るべきものと存ぜられます。然るに前述の通り世界情勢の推移に鑑み、成るべく速に支那問題の解決を図るの要愈々緊切なるものと存ぜられます。之が爲戦略と策應し政略施策の上に於きまして、日華基本条約の改訂を實行し又国民政府をして対重慶政治工作を行はしむることが適當と存じます。基本条約改訂に付きましては「対支処理根本方針」の徹底具現を主旨として既に具体案を得て居りますので、好機を捉へ支那側との折衝に入ることと致し度いと存じます。対重慶政治工作に付きましては、国民政府をして之を行はしめ、我方は内面的に国民政府を指導する建前とし、而して右指導に當りては、所期の目的に反する結果を招来せざる様各般に亘り慎重なる考慮を加ふことが肝要と存じます。

三、一般に大東亜諸国家諸民族の指導に付きましては、従来とも人心の把握に重点を置き、自発的に帝国に対する戦争協力を促進せしむる方針の下に施策して参つて居るのであります。が、今

後益々此の方針を強化する必要があると存じます。緬甸及比島に対する独立許容、タイに対する新領土編入の承認、インドネシア民族の政治参与等孰れも帝国の崇高なる道義精神の顕現でありますが、之が成果をも活用して益々人心を把握し戦争協力を確保増進するに役立たしむる様最善の努力を払うことが必要であると存じます。

尚先程幹事朗読の「世界情勢判断」にもあります如く、米英は武力攻勢に策応し政謀略を激化し、大東亜諸国家諸民族の対日離間を策すること必定と認められますので、之に対しては敵に警戒し機先を制して前述の諸施策の外宣伝、啓発等に付ても所要の措置を講ずる必要があると存じます。

之を要するに、大東亜の結束は帝国戦勝の政略態勢の最も重要な一翼でありますので、之が積極的強化の為に一切の障碍を排除しつつ有ゆる努力を傾注致し度いと存じます。

〔鈴木企画院總裁説明〕 次いで鈴木企画院總裁は、本方策に関連する総動員関係事項について次の如く説明した。

愈々決戦の様相濃化して来ました現戦局を突破し、帝国の勝利を確実ならしむる為には、作戦の所要を基礎と致しまして明年度に於て物的戦力の最大の増強を期せねばなりません。之が為には、航空機年産約四万機を努力目標として、

甲 造 船	約 一八〇万総噸
アルミニウム	二一萬噸以上
普通鋼鋼材	五〇〇萬噸前後
特 殊 鋼	約 一〇〇萬噸
鍛 鑄 鋼	約 五五萬噸
鑄 物 用 鉄	一三〇萬噸前後
電 氣 銅	約 一五萬噸
セメント	五〇〇萬噸前後

木 材 (内地) 九、〇〇〇万石前後

を中心とする綜合生産の確保を期して居るのでありますが、未だ決勝戦力(航空機五五、〇〇〇機等)整備要求を充足し得ないのでありまして、将来尚一層の努力を要する次第であります。尚之に関連し戦時国民生活確保の為日満を通じ主要食糧自給を確保せねばなりません。

然るに今次の陸海軍船舶増徴に依りまして、生産の基底であります海上輸送力が戦力の造出に対し殆ど其最少限に達することと相成つたのであります(民貨物船舶腹量は開戦時一二三萬総噸、十七年九月一八七萬総噸、十七年十二月一三六萬総噸、十八年七月一二四萬総噸、同年十一月見込一〇六萬総噸)。茲に於きまして非常手段を講じ、其の生産基底を増強確保致しまして所期目標の達成に遺憾なきを期せねばなりません。即ち所期目標達成の為には、本年下期の輸送力に於て従前計画約一、四〇〇萬噸(微備を見越したるもの)に対し、新に約一二〇萬噸程度、更に明年度に於きましては既定見込二、八六〇萬噸に對しまして、約五三〇萬噸程度の輸送力を増強するの方途に出でねばなりません。

又明年度の生産目標の確保並輸送力確保の為に、茲に相当多量の鉄源と之に附随する各種資材の特別増配特に限定品種の増産並に調整を断行せねばなりませんと共に、輸送力、生産並に施設を確保するに必要な人員の大動員を実行するの要があります。

この資材の特別増配の給源と致しましては、

- 一、適正量を超える工場(軍管理工場を含む)在庫品の買上
- 二、軍作業場の在庫品の利用
- 三、非常回収の促進並別途供給源に依る第二次非常回収の断行
- 四、官業及軍管理工場屑鉄の追加供出
- 五、既決定転用物件再検討に依る供出

六、鋼管切符の整理

七、増産の強行

八、以上の各般の手段に依るも尚不足するときは、下期に於ける陸、海、民需の配当削減を行ふこと

九、製鉄業者及問屋在庫品の流動活発化に依る現物入手の促進

により、配当削減の影響を可及的に緩和するに努むること

次に綜合輸送力の強化に付きましては、五〇噸以上の木船の政府使用の断行、陸運転移の徹底的強化を致しますと共に、軍徴備船と一般汽船に依る物動物資輸送の綜合能率發揮の爲所要の措置を確立し又海陸綜合輸送力の実施を期しまして行政機構に刷新強化を加へる等の措置を採らねばなりません。

斯の如く、あらゆる分野に亘りまして非常対策を断行致しまして之が効果を収めんが爲には、軍官民が各分野に於て異常の決心を以て夫々の責任に立ち強力に之を展開実施することが肝要と存じます。

斯の如き非常手段を今より直ちに実行に移すことに依りまして、明年度に於て所期物的戦力を確保するに於きましては、概ね明年度に於ける戦局の需要に応じ得ますと共に、明後年以降物的戦力造出の爲確実なる根基を確立し得るものと思考せらるるのであります。

尚茲に一言申し上げたきことは、全戦局の現段階に処しまして今次陸海軍船舶の増徴と明年度に於ける物的戦力の増強確保の要請とを満足せしむる爲、国政運用大綱に基く諸政策の実施と相俟ちまして以上申述べました非常手段を強力に展開致しまする結果、凡そ未戦力のものは此際挙げて戦力化することとなりますので、茲に国内資源の利用、輸送力の陸上転移、国民動員、非常吸収転用し得る鉄源、沈船引上等各種の戦力源は殆ど其極限に達することに相成りまして、従つて昭和二十年度に於きましては、船

腹保有量の相当の増加を見ざる限り物的戦力に弾撥力を期待し得ることと相成ることであります。

換言致しますれば、昭和十九年度以降の物的戦力は、真に作戦との調和に依る海上輸送力の活用如何により直接著しき波動状態を示すに至るのであります。

只今申述べました如き次第でありまして、十九年度に於て克く所期の目的を達成し直接戦力就中航空戦力の異常なる増強を必成致しまして制空範囲の拡大強化を図りますれば、之に依り他の対策の強化と相俟ちまして船舶喪失量の軽減が促進せられまして、従つて二十年度に於ける物的戦力特に航空機生産は更に飛躍せしめ得ると共に船腹保有量も亦逐次増加致しまして、綜合的物的戦力の弾撥力が根本的に確保せらるるに至ることが期せらるるのであります。

〔岸商工大臣説明〕 右企画院総裁の説明に関連し、岸商工大臣は所管事項につき、次の発言要領に基いて説明を行つた。

今次の陸海軍船舶の増徴の下に於て、来年度に於ける大規模の生産目標を達成せんとすることは、極めて重大且困難なる問題なり。即ち昨昭和十七年十二月に於て陸海軍より相当量の船舶の増徴あり、同時に昭和十八年に於ける鉄鋼其他の主要物資の生産目標を決定せられたることあるも、其の当時に比し今次の場合に於ては、目標確保の見達の困難なることは到底其の比に非ず。何となれば前年の場合に於ては、船舶増徴後の生産目標は比較的可能性の大なる数字にして且其の後に於て各種の工夫手段を尽し以て略々初期の目的を達成し来れるものなり。然るに今次に於ては、更に多数の船舶を増徴し而も来年以降に於て画期的なる増産の目標を達成せんとするものなるを以て、既に過去一年間に於て各種の手段を尽し来れる今日に於ては、尋常一様的手段と決意を以てしては之が達成は到底不可能と謂はざるべからず。故に此際一大

決意の下に従来行懸り、考へ方等を一擲し、一切の必要なる手段を尽し此が実施に当るの外道なきものと考慮す。

過般政府に於ては、国政運営につき一大刷新をなし行政の機構運営に付、或は国民の総動員等に付真に決戦下に於ける態勢を考慮し、強き決意の下に果敢なる実施に入らんとする予定なる所、斯る眞の決戦意識に徹し万難を排し所要の目標に到達せんとする意味に於ける国家総力の集中結集の外、之が方途は無きものと考慮せらる。

現下の事態に鑑みるに、今次目標数量達成に必要な輸送力確保に関する一切の施策及増産目標達成の為に本年度内に於て必要とする資材の特別増配の実現等の事項につきても、単に生産担当官庁たる商工省のみを以て実施を確保し得ざる問題少からざるものとす。然れ共今般の目標数字の達成は国家絶対至上の要請にして、而して又前述輸送力確保の問題、資材増配の問題等は関係方面に於て強き決意の下に全力を挙げて協力するときは、其の実現は決して不可能には非ずと考ふ。又此等の条件が達せらるることにより今次の画期的増産目標の達成も可能となるものと信ず。

商工大臣は、結局如何なる困難をも突破し、此際必要なる国家要請の達成を期せんとする強き決意の下に軍官民の総力を結集し、あらゆる手段を尽し目標貫徹に邁進せんとする次第なり。

〔原樞府議長との質疑応答〕 以上を以て統帥部及び政府の議題内容に関する説明を終り、次いで質疑応答に入つた。質疑は、専ら原樞密院議長の発言に対し、統帥部及び政府より応答した。その応酬要領は次の如くである。

樞密院議長 英米ソの離間を図ると申さるるが、バルカン問題等に現れてゐるソの態度は、その伝統的政策なりや。

外務大臣 然り。

最近のケベック会談、地中海委員会、英米ソ三国外相会議等

に對するソの態度を説明す。

樞密院議長 英米ソのポーランド問題に對する態度如何。

外務大臣 最近の情報を詳細に説明し、ソとしてはポーランド国をつくらぬ考へであり、米英としては赤化勢力に對する緩衝地帯としてつくりたい考へである、と述べ。

樞密院議長 歐洲に於ける第二戦線の見解如何。

外務大臣 第二戦線の主体は西欧なるべし。若し米英がバルカソンにやるとせば英米ソ間に問題が起るべし。

樞密院議長 日ソ関係を好転せしむるには、樺太利権漁業問題は譲歩してでも解決を図つてもらひたい。交渉は実施しありや。

外務大臣 對ソ外交の根本問題は、帝國が對米英戦争間北方の安全感を獲得することである、とて交渉経過の概要を述べ。

樞密院議長 樺太利権については、小さな施設等について云為してゐるやうだが、つまらぬことだと思ふ。漁業問題に就ては、暫定協定を譲歩して早く本協定を締結して如何。

樞密院議長 日ソ間の関係に就ては、國民は非常に関心を持つてゐる。速かに日ソ関係を好転せしめ國民をして安心せしめ、國軍をして大東亞戦争に専念せしむる如く努力せられたい。

情勢判断に於ては米英の生産力は、本年度後期に於ては頂点に達するところがあるが、米英の陸海空軍兵力、特に在極東軍兵力については如何。

參謀総長 海軍軍務局長 詳細説明す。

樞密院議長 明年度飛行機四万機生産を目途とするところがあるが、現在の生産能力如何。

總理大臣 陸海軍計年産一万七—八千機程度なり。

樞密院議長 政府として四万機の努力目標を確実に引受けられらるか。

企画院総裁

非常なる決意でやつてゐる。

商工大臣

四万機以上つくる決意を以てやる。

枢密院議長

独、米の例もあり、国力生産力には限度があるから計画倒れにならぬやうにやつてもらひたい。

枢密院議長

絶対確保すべき圏域とは如何なる意か現在の線は捨てる気なのか。

参謀総長

詳細説明す。

枢密院議長

一体四万機あれば、絶対確保圏を確保する自信があるのか。

軍令部総長

絶対確保の決意あるも、勝敗は時の運である。独の対ソ戦の推移を見るも初期の通りには行つてゐない。今後どうなるか分らぬ戦局の前途を確言することは出来ぬ。(今後の作戦の見透しに関し海軍の自信のない悲觀的言辭を述べたるにより、議場俄に緊張す)

総理大臣

今次戦争は元来自存自衛の爲に已むに已まれず起つたものであり、御詔勅の御言葉の通りである。帝国は独の存在の有無に関せず最後迄戦ひ抜かねばならぬ。今後の戦局の如何に関せず日本の戦争目的完遂の決意には何等の変更はない。(軍令部総長の後を受けて強気に述べ)

参謀総長

作戦上の要求よりすれば五万五千機を要する。然し国力を賄しても出来ぬときは已むを得ないから機動力を利用して数の不足を補ひ目的達成に努力する考へなり。

枢密院議長

人間は神様にあらず、間違をなくすることは出来ぬ。但し統帥部が作戦の自信がなくては困る。然し以上の話を承り自信が十分あるやうにかへて結構である。

最近に於ける陸海軍の協力一致は、うまく出来てゐるが、出先はうまく行つてゐないと云ふことを聞く。例へばセレベス島でマリアヤが流行してゐるが、キニーネがなく陸軍が押へてゐて

海軍に出来ないこと云ふ不思議な現象がある。其他時々陸海軍の協力一致が出来ぬことは誠に困る。

軍需省の問題は、どうなつてゐるか。

総理大臣 軍需省については御前で申上げる程進んでゐないと閣議決定の概要を申述ぶ。

陸海軍の不一致は絶対ないやうに努力するが、数百万の軍隊のことだから、末梢にはそんなことが一二あることは已むを得ない。然し世の人が言ふほどのことはない。

海軍大臣 陸海軍の仲の悪いといふことは心外である。敵の離間工作か国内の離間工作であり、これに乗ぜられない様にせねばならぬ。

重要な地位の人がこんなことを採り上げて言ふことは心外にたへない。

セレベス島のことは昨年聞いたが、それは單なる噂に過ぎず、輕々に口にせられることは困る。

軍需省の発注の統一はむづかしい。海軍自体内でも艦政本部だけの発注統一が出来ない情況である。今のところ集めたら都合の良いものだけを集めるといふ程度でなければ出来ない。

枢密院議長 政府統帥部より国力と作戦に関する確乎たる自信を承り満足した。大いにやつてもらひたい。

〔東條首相発言——採択〕之を以て審議を終ります。

全員本案に付完全に意見の一致を見たものと認めます。

御決定の上は、各々其の職分に基きまして、全力を尽して直に実行具現し、以て此の重大戦局を突破し戦争を完遂致しまして、宸襟を安んじ奉らんことを深く期する次第であります。

かくして、必勝の戰略態勢確立——絶対国防圏の設定——を中心課題とする「戦争指導大綱」の採択を見るに至つた。

右により、曩に決定せられた大東亜政略態勢の整備強化の方策と相俟つて、ここに敵反攻の高潮に対処すべきわが政戦略態勢の整備は格段と強化せられ、この施策にして順調な進展を見るにおいては、日本としては今後対米英戦を主動的に遂行し得べしとの明るい希望が生ずべきものであつた。

5 その後の船舶問題

〔徴備と造船〕 船舶問題には、依然として幾多の困難を伴つた。累次に亘る陸海軍の増徴と造船量の引上げ、徴備船舶の損耗補填と船舶の損耗防止、タンカーの徴備と油運送の問題等、例によつて相矛盾する事態は次々と起つた。

昨年十二月十日にはガ島攻防を中心とする陸海軍約四〇万総噸の徴備により国力との調整に異常な苦慮を払つたことは既に述べたが、再び今回の絶対国防圏設定に伴い陸海軍二五万総噸の徴備を見た。この徴備は、尋常の対策を以てしては到底国力との節調を維持し得ないものであつたが、御前会議席上の企画院總裁及び商工大臣の説明にも明かな如く、非常措置を強行することによつて窮境を打開しようとした。否それのみならず、今回の徴備を転機として国力の飛躍増大を試みんとするに至つた。

徴備問題は、船舶の建造を刺激する。損耗補填は、その原因たる損耗防止対策の推進を要請する。戦局の重圧は、平時においては予想し得ない打開の方途を強行して行く。右に述べた相矛盾する要求を、大本營、政府一致の見解として共に達成しようとし決意するに至つたことは一つに來るべき国防圏周辺の決戦において、何とかして勝利を収めたいとの念願の然らしむる所であつた。

先ず今回の御前會議に至るまでの船舶問題の経緯及びその後の状況を一瞥する必要がある。

〔昭和十八年一月二五万総噸の建造増加〕 昨年十二月十日の御前

における連絡會議においては、昭和十八年度の甲造船量を七五万総噸と決定していたが、その後更に研究を進め、昭和十八年度約二五万総噸の改E型簡易船舶を追加建造すべきことを決定した。

〔キスカ撤退作戦と千島方面整備強化のための徴備〕 昭和十八年五月二十九日、アッツ島のおが守備部隊は、二旬に亘る抵抗の後玉碎するに至つた。大本營陸海軍部は、敵のアッツ反攻に伴いキスカ守備部隊を撤退せしめ、千島方面の戦備を急速に強化することを決意したがそのためには船舶の新たな徴備を必要とした。

右統帥部の要請に対し、政府としては既定の国力建造に影響するところ大であるから遽かに応じ得ない事情もあつたが、戦局の急需に應ずることは何と云つても先決問題である。よつて、大本營及び政府は二回に分つて徴備を実施することに意見が一致し、先ず六月九日陸海軍合計六万五千総噸を増徴し、次いで六月二十九日陸海軍は七月以降各々五万総噸（六月九日徴備分を含む）を徴備することを決定した。なお本徴備によつて生ずる生産の減少（鉄約二五万噸、アルミ約六千噸、石炭約六五万噸、其他の物資約三五萬噸の各減）については、陸、海、民において負担して急場を凌ぐこととなつた。

〔徴備油槽船の保有量決定と損耗補填〕 油槽船については昨年五月二十日の連絡會議決定を基礎として運用を律して來たが、その後海、陸、民用タンカーの保有量に変化を來し、南方石油の還送もまた兎角予定量に及ばない状況となつて來たので、七月三十日の連絡會議において改めて海、陸徴備タンカーの保有量を陸軍一万三千総噸、海軍三十万総噸とし、それ以上の徴備タンカーは八月末までに解備すべきことを決定し、且つ南方石油の輸送は陸海軍が担任することとなつた。

その後九月、十月には海軍徴備タンカーの損耗が計約四万総噸に上り、海軍作戦の遂行に支障を來す事態となつたので、この損耗量

を補填することとなつた。

〔再び昭和十八年度甲造船計画改訂〕 右に述べた如く徴備と損耗補填（以上の外、七月におけるA B船の損耗に対しては各一万総噸、八月における損耗に対してはA一万九千総噸、B一万七千総噸を補填した）の増加により、船舶の運用は著しく拘束される状況となつたので、九月十五日の連絡会議において重ねて一二万総噸の建造量を増加することを決定した。

〔昭和十九年度甲造船計画〕 九月三十日の御前會議において、昭和十九年度の甲造船は一八〇万総噸を目標とすることに決定せられたが、その後の研究過程として昭和十九年一月十一日の連絡會議において、一応貨物船一三〇万噸、油槽船五五万噸、その他五万噸、計一九〇万総噸で発足することを決定した。

なお右に要する所要鋼材は一三三万噸（昭和二十年一八〇万総噸建造の準備資材を含む）を計上された。

〔甲造船計画の圖期的増加改訂〕 その後行政査察の結果、各般の隘路を開すれば、昭和十九年度二五五万総噸の建造は可能であるとの結論を得るに至つたので、大本營及び政府は、三月三十日の連絡會議において貨物船一七一万噸、油槽船七七万噸、その他七万噸、合計二五五万総噸の建造を決定し、昨年九月三十日御前會議決定の戦争指導大綱の基盤を強力に推進することとなつた。

右建造に伴う所要鋼材は一応一七一万噸（昭和二十年度二五〇万総噸建造のための準備資材約五三万噸を含む）として計上された。

〔絶対国防圏戦備強化のため再び徴備〕 大本營陸海軍部は、御前會議決定により二五五万総噸の船腹増加により絶対国防圏設定に伴う戦備強化に鋭意努力を傾注して来たが、一方昭和十八年末頃より十九年初頭にかけて、ラバウル周辺に対する敵の圧力は益々増加し、更にマーシャル方面にも敵の反攻を見る等、南東太平洋及び外南洋方面の戦局は急迫して来た。同方面は、絶対国防圏の設定により、国

軍全般としては持久作戦的性格に転移せしめられたが、敵の反攻速度を遲滞せしめ国防圏設定に必要とする時を稼ぐため依然重要な意義をもつていた。従つて大本營陸海軍部としては、勢い国防圏に注ぐべき勢力を同方面に吸収せられざるを得なかつた。

かくして、絶対国防圏の戦備に確信を持ち得るためには、更に船舶を徴備して之が強化を図ることが必要となつた。しかも、マーシャル方面に対する敵の反攻様相は、次いでマリアナ方面への敵来攻が予想以上に早期に実現するとの見透しを得るに至つたので、大本營陸海軍部の船舶増徴に対する要請は益々強くなつて来た。然し船舶の徴備は、直ちに航空機を中核とする反撃戦力の造成に影響するところ甚大であるから、先ず端末輸送に充当するため機帆船を徴備すべしとの議が起つた。

両統帥部は機帆船の所要量を検討の結果、陸軍としては、千島方面に一〇〇隻、濠北方面（輝部隊―第二方面軍）に一一〇隻、計二一〇隻（約二、五万噸）、海軍としては、マーシャル方面に一〇〇隻（約一、六万噸）、陸海總計約四万噸を二月中に徴備したき希望を二月初頭政府に申出た。これに対し、政府としては、新造未就航船三万総噸の範囲に留むべしの意見強く、両者の主張は容易に妥結しなかつたが、二月八日に至り陸海軍計三万五千総噸の新造未就航船及び休航船を充当することで意見が一致した。

〔トラック空襲と大増徴〕 しかし広大なる絶対国防圏の戦備強化のためには、右機帆船の徴備量は九牛の一毛に過ぎなかつた。本格的船舶大増徴問題は、右連絡會議決定に引き続いて表面化して来た。両統帥部の要求量は次の如くであつた。

一、昭和十九年三月初頭より、陸軍は、大型船一〇万総噸、小型船八万総噸、海軍は、大型船一〇万総噸、小型船二万総噸を徴備す

二、右の外四月より三ヶ月間、陸軍は、大型船八万総噸、海軍は

大型船二万総噸を夫々一時的に増徴す

三、四月以降毎月、陸海軍の損耗に対し八万総噸宛を補填す

右統帥部の要求を実施すれば、船腹面より観て国力、戦力の破綻を来すことは明瞭であつたが、一方中部太平洋及び北東方面の防衛全からずして戦争遂行の確算はあり得なかつた。かくして早くも昨年九月三十日御前會議決定の基本方略——作戰と国力戦力を調和し戦争主動権を恢復する——は、一大危機に直面しようとしている。大本營及び政府は、旬日に亘つて慎重な研究討議を続けたが、容易に結論を得るに至らなかつた。

かかる情勢において、二月十七日、晴天の霹靂の如く敵機動部隊によるトラック大空襲が行われ、わが戦争指導首脳部の心胆を寒からしめた。この空襲は、後に述べる如く阿統帥部最高人事を左右すると共に、船舶問題の懸案を否応なく解決に導くものであつた。即ち、二月二十一日阿統帥部長更送の後、持ち廻りの連絡會議において、取りあえず所要の分として陸海軍は二月下旬計一〇万総噸を徴備すべきことを決定した。

右暫定措置の決定と共に、大本營、政府ともに再検討を続けたが、三月二日に至り、刻下の全般情勢上作戰即応の優位を認め、従来の阿統帥部の要量量を多少低下する線において妥結することとし、三月三日の連絡會議において陸海軍は三月及び四月においてそれぞれ大型船計一〇万総噸、三月以降機帆船計一〇万総噸を増徴することを決定した。この決定は前年九月三十日御前會議決定の物的国力の目標を低下せしめるものであるから、御前會議を奏請するか、或は御前における連絡會議を開催して戦争指導全般に亘り再検討すべしとの意見もあつたが、国力低下は今後各種の生産増強施策等により補うこととし、飽くまで前年御前會議の基本線を堅持すべしとの結論であつた。

6 国内施策の進展

国内における決戦態勢確立のための諸施策も、政治、産業経済、国民生活等の各分野において着々手が打たれて行つた。戦局の波動に伴い、物心両面に亘る国内の一切を挙げて、いやくも余力あらば悉く戦力増強のために活用すべき事態がひしひしと迫つて来た。

政府は、先ず昨昭和十七年において翼賛政治会の創立及び行政簡素化の断行を中心とする政治並びに行政面における戦争即応の基礎態勢確立の施策をとつて来たが、昭和十八年に入るや、主として戦力増強方策の具体化に重点を指向することとなつた。内閣に戦力増強の三機関の設置、企業整備、食糧増産、衣生活簡素化、学徒動員、地方行政の綜合運営、軍需省、農商省及び運輸通信省の創設等、一連の政策を次々に展開して行つた。これらの施策は、前に述べた九月三十日御前會議決定の基本国策推進の裏付となるべきものである。その努力の跡を瞥見すれば概要次の如くである。

〔内閣に戦力増強の三機関設置〕 政府は、戦時行政特例法に基づく戦時行政戰機特令の適切迅速な発動によつて五超重点産業の生産増強を期し、且つこれが運用の万全を確保するため内閣顧問を置き、戦時経済協議会を設け、行政監察制度を実施することに決し、昭和十八年三月十七日の閣議において、内閣顧問臨時設置制、戦時経済協議会規程及び行政監察規程を附議決定した。これらの勅令、規定は十八日公布即日施行されることとなつた。

内閣顧問は、総理大臣の行政指示権の行使を適正ならしむるための顧問である。顧問には民間の智能経験を動員し、三月十八日発令を見た。顧問の顔触れは、豊田貞次郎（日鉄社長）、大河内正敏（理研所長）、藤原銀次郎（産業設備管団総裁）、結城豊太郎（日銀総裁）、山下亀三郎（山下汽船会長）、郷古潔（三菱重工社長）、鈴木忠治（昭和電工社長）の七氏であつた。

戰時經濟協議会は、右顧問のほかに総理の指定する大臣を加え、総理が会長となつて、戰時非常法令の実施と戰時經濟の運営に関し官民双方の隔意なき意見の交換を遂げ、適切なる具体策の決定を行う機関であつた。

行政査察は、右二つの措置の円滑なる実行、殊に下部組織への浸透を監視、促進するために採用されたものである。これにより行政の実績を把握し、明日の行政を適切ならしめるという積極的、建設的使命を主眼とした。この目的を達するため、査察使は勅令をもつて、國務大臣、内閣顧問の内から適時適切な人が任命され、随員等にも広く民間人をも起用し、査察の範圍も行政一般は勿論、工場、鉱山等の現場に及ぶものであつた。

右三措置の運用によつて、戦力増強の諸施策は画期的に促進強化されることになつた。

〔企業整備の断行〕 政府は、昭和十八年六月一日閣議において、「戦力増強企業整備基本要綱」を附議決定した。

企業整備は、苛烈なる戦局を勝抜くため物的国力増強の裏打として已むなくとられた措置であるが、本要綱の規いとするところは主として次の如きものであつた。

一、戦争遂行上必要なる生産力を軍需その他の重点部門へ計画的に転活用しこれを挙げて戦力化する為、産業の各部門に於ける各種生産要素を集約すると共に、これが最大効率を發揮せしむる態勢を整備すること

二、戦争の進展に伴ひ愈々拡充を要する部門に於ては、特に企業系列の整備強化、生産機構の刷新向上等を図り、その生産性を最大限に昂揚せしむること

三、企業整備に當つては、本整備を通じて国民志気の昂揚を図ると共に、戦時財政經濟の全体的運営に支障を生ぜしめないことは勿論、進んでこれが活發強力なる運営を期すること

なお右措置と共に、六月四日、「企業整備資金措置法」を制定するための要綱を閣議において附議決定し、企業整備の決済には現金の授受を行わない等、浮動購買力の発生防圧、國民經濟の秩序維持に関する措置を併せ行うこととなつた。

〔食糧増産と衣生活の簡素化〕 政府は、六月四日の閣議において「食糧増産と衣生活の簡素化」を附議決定し、現下食糧事情の緊迫に対処することとした。

本要綱においては、國民生活確保の絶對的要請に応じ、非常な制扼下にも拘らず、速かに食糧自給態勢の確立を期するためあらゆる方途を講じて、米、麦、諸類等の主要食糧農産及び水産物の応急増産対策を実施せんとするものである。

食糧農産物の増産対策としては、不耕作地の解消及び雜穀等の増産、諸類の増産、労力の補給、肥料問題の解決等について、それぞれ対策を樹立した。

水産物の増産対策としては、増殖に関する措置と遭難漁船に関する措置とを併せ行うこととせられた。

又政府は、同日の閣議において、「戦時衣生活簡素化実施要綱」を附議決定して、國民衣生活の徹底的清新簡素化を図ることとなつた。

〔学徒動員〕 政府は、決戦現段階に対応して学徒の総力を戦力増強の国家要請に凝集せしめるため、教育的見地に立脚する検討を進めていたが、成案を得るに至つたので六月二十五日の閣議において、「学徒戦時動員体制確立要綱」を附議決定するに至つた。

右要綱の主眼とするところは概ね次の如くであつた。

一、学徒の国防訓練並に勤勞作業の実施方法を根本的に強化再編し、学徒の燃え上る忠誠心を遺憾なく發揮せしめんとしたこと
二、勤勞作業の重点を食糧増産、国防施設、緊要物資増産、輸送力増強等に置き、実施にあつては計画的、作業効率の向上を

図ること

三、訓練及び勤務を学校の種類程度に応じ、これに適應する如く計画すること

而して右運営に當つては、飽くまで学問研鑽が学徒の本領であることを意識し、單なる勞務提供に陥らぬよう関係者の留意を望むものであつた。

〔地方行政協議会及び東京都制発注〕 政府は、右諸施策実施に伴い、地方行政をこの際根本的に刷新強化して官民の接点たる第一線行政の綜合調整的運営を図り、重要政策の透徹に遺憾なきを期するため、昭和十八年六月二十八日の閣議において「地方行政刷新強化に関する件」を附議決定した。

右決定の主なる規いは次の如くであつた。

一、内地を九地方に分け、各地方に地方行政協議会を置き、協議会所在地の地方長官を会長とし、特殊地方行政官庁との綜合連絡調整に當ること

二、地方行政協議会長たる地方長官は、関係地域内の各種行政の綜合連絡調整上必要ある時は、関係地方長官に対し必要な指示をなし得ること

なお、政府は六月十五日の閣議において、東京都制採用を附議決定した。

東京都制採用の趣旨は、府市二重行政の弊を排して首都行政の能率化を図り、首都に国家的性格を附与して大東亜建設の本拠たるの威容を實現せんとするにあつた。

右地方行政協議会及び東京都制は、昭和十八年七月一日発足したが、当日発令したる協議会会長は次の九氏であつた。

北海道地方協議会長	北海道長官	坂	千秋
東北	宮城県知事	内	田 信 也
關東	東京都長官	大	達 茂 雄

東海	愛知県知事	吉	野 信 次
北陸	新潟県知事	前	田 多 門
近畿	大阪府知事	河	原 田 稼 吉
中国	広島県知事	横	山 助 成
四国	愛媛県知事	相	川 勝 六
九州	福岡県知事	吉	田 茂

〔軍需省創設〕 政府は、軍需生産の急速増強就中航空戦力の飛躍的拡充を図り、軍需生産を計画的且つ統一的に遂行確保するため、軍需省を創設することになり、九月二十九日の閣議においてこれを決定した。これに伴い、企画院及び商工省を廃止し、来る十一月一日開庁予定のもとに急速に準備を進めることになつた。

軍需省設置に関する閣議決定の要旨は次の如きものである。

一、国力を挙げて軍需生産の急速増強を図り、特に航空戦力の飛躍的拡充を図る為、軍需生産を計画的且統一的に遂行確保する目的を以て軍需省を設置す

右に伴ひ企画院及び商工省は之を廃止す

二、重要軍需の生産管理の徹底的簡易化、軍官発注の一元化を期する為、陸海軍の主要軍需生産管理に関する業務中必要なるものは、之を軍需省に移管す

三、軍需省の設置に伴ひ、国家総動員に関する事項、軍需生産に関する事項、その他企画院及び商工省所管事項の大部は、これを軍需省に移管す

軍需生産に関する事項中、他省の所管に属するものの中必要なるものは軍需省に移管す

四、企画院の廃止に伴ひ、物心両方面に於ける国政の綜合調整に関する事項は、内閣に於て簡素強力に之を行ふものとす

五、商工省の業務中軍需生産に関係薄き事項の処置は別途之を定む

六、所要の陸海軍現役武官（文官を含む）をして軍需省の職員たらしむるの途を講ず

七、軍需省の機構の案画に當りては、極力簡素ならしむるを本旨とす

第二章 新作戦方針に基く大本營の指導

1. 中南部太平洋方面作戰要領の発動

〔大本營の作戰要領〕 前記九月十五日における大本營の新作戦方針の採択は、主として中南部太平洋方面に対する作戰指導の変更を意味するものであつた。大本營はこの新作戦方針に基き、中南部太平洋方面の作戰要領を具体化した。それは即ち「中南部太平洋方面作戰陸海軍中央協定」であつて、その骨子は次の通りである。

第一、作戰方針

帝國陸海軍は密に協同し南東方面の要域に於て來攻する敵を擊破して極力持久を策し此間速に濠北方面より中部太平洋方面要域に亘り反擊作戰の支撐を完成し且反擊戰力を整へ來攻する敵に対し徹底的反擊を加へ勉めて事前に之を覆滅しその戰意を挫折せしむ

第二、作戰指導要領

一、東部ニューギニア以東ソロモン群島に亘り南東方面の要域に於て來攻する敵を擊破して極力持久を策す

二、概ね昭和十九年春頃を目途として濠北方面要域及カロリン、マリアナ各群島要域に亘り作戰基地整備及その防備強化、比律賓方面に於ける作戰根拠の造成並空、海、陸反擊戰力の整備等反擊態勢を速急に強化す

三、敵の來攻に方りてはその主攻正面に對し前項要域に於ける基地を支撐とし各種の戰力を集中して敵を反擊し勉めて事前に

右により予定の如く十一月一日より軍需省が誕生し、初代軍需大臣は、東條首相の兼任とし、次官には前岸商工大臣の國務相兼任となつた。なお遠藤三郎陸軍中將の航空兵器総局長官就任のほか、多数の陸海軍現役武官が軍需省入りをした。

之を覆滅しその反攻企圖を擊摧す

四、概ね昭和十九年中期以降に於て濠北方面より狀況之を許す限り積極作戰を実施するに勉む攻勢指向の方向等に関しては別途研究し所要の準備を進む

〔第八方面軍の持久任務〕 既に述べた如く新作戦方針の採択に伴う戰爭指導大綱が、九月三十日の御前會議において決定されるや、大本營は同日第八方面軍司令官及び南方軍總司令官に對し、大陸命第八五五号を以て次の如き要旨の命令を發令すると共に、前記の陸海軍中央協定を示達した。

一、中、南部太平洋方面に於ける大本營の企圖は南東方面要域に於て極力持久を策し此間速に濠北方面より中部太平洋方面要域に亘り反擊作戰の支撐を完成し敵反攻企圖の破摧を策するに在り

二、第八方面軍司令官は海軍と協同し南東方面の要域に於て來攻する敵を擊破して極力持久を策し以て爾後の作戰を有利ならしむべし

三、南方軍總司令官は海軍と協同し速に濠北方面に於ける反擊作戰準備を強化促進すべし

四、第八方面軍司令官は其隸下及指揮部隊を南方軍作戰地域及中部太平洋方面諸島に位置せしむることを得

五、南方軍總司令官は第八方面軍の兵站を援助すべし

六、參謀總長は其指揮下船舶部隊中所要の部隊を一時第八方面軍司令官の指揮下に入らしむることを得

七、細項に関しては參謀總長をして指示せしむ

〔新作戰方針と海軍〕 この作戰方針の変更は当然聯合艦隊にも示達せられた。しかるに既に前篇第三章において述べた如く、聯合艦隊は八月十五日「第三段作戰要綱」を発売したばかりであつた。それは南東方面を主作戰方面とし、飽くまで前方要域において決戦を行はんとするものであつて、九月十五日採択された新作戰方針とはその趣旨において根本的に背馳してゐたのである。

そこでこの新作戰方針の趣旨が、果してよく聯合艦隊によつて納得せられ、且つ実行に移されるか否かは、多分に疑問があつた。大本營海軍部は新作戰方針の趣旨の徹底とこれが実行とについて、明確且つ強力な指導を行わなかつた。否寧ろ大本營海軍部自身においても、前方要域重視の傾向があつたのである。それは既に述べた如き海軍の連続決戦思想のあらわれであり、且つ又太平洋における海洋作戰がトラック基地の確保活用によつてのみ成立するという従来からの考えに基くものであつた。トラック基地の確保活用のためには、南東方面及びマーシャル方面の前方要域を強力に確保する必要があつた。ここに新作戰方針の採択並びにこれに伴う戦争指導大綱の決定と日本海軍の考える海洋作戰構想との間には、大なる罅隙があつたのである。

2 南東方面

〔作戰指導要領〕 新作戰方針に基く南東方面の作戰指導に関しては、前記「中南部太平洋方面作戰陸海軍中央協定」の中に「南東方面作戰陸海軍中央協定」なる細部協定を含ましめ、現地陸海軍の作戰指導の準拠たらしめた。その骨子は次の通りである。

一、ラバウル附近を中核とするビスマルク諸島及びボーゲンビル

島方面要域の防備を強化し、極力永く之を保持するに勉める
又ダムピール海峡兩岸要域及北部ニューギニア方面要域に対し極力補給を確保しこれが保持に勉める

二、來攻する敵に対しては航空及海上兵力を以て敵をその上陸前に擊擄するに勉める

敵上陸する場合に於ても、その上陸初動に於てこれを擊破して敵の反攻企図を阻止するに勉める

三、前記要域に対し速に多量の軍需品を集積する 特にニューギニア方面に対しては急速に補給輸送の促進を期する

四、陸軍航空は東部ニューギニア（ダムピール海峡を含む）方面の航空擊滅戦に任じ、又同方面に於ける敵上陸船団の攻撃及海上輸送遮断に關し海軍に協力する

海軍航空はソロモン及ビスマルク諸島方面に於ける航空擊滅戦並に東部ニューギニア方面に於ける敵上陸船団の攻撃及海上輸送遮断に任じ、且東部ニューギニア方面の航空擊滅戦に關し陸軍に協力する

〔南東方面の戰略的變貌〕 新作戰方針の採択は、一年有半に亘つて決戦を續けて來た南東方面を戰略的前進陣地に變貌せしめるものであつたが、同方面の戰略的價值は些かも低下したものでなかつた。

元來南東方面は、米濠軍が対日反攻のため扇の要の如き戰略的地位にあつて、敵の作戰はこの附近から北方中部太平洋に向うものと、ニューギニア北岸沿いにフリッツピンに向うものとの二線が想定され、南東方面において極力持久を図ることは爾後の絶対國防圈における作戰を著しく容易にするものであつた。即ち大本營は所謂本防禦線を後方要線に後退させたが、南東方面はその戰略的前進陣地として依然これを重視したのであつた。

〔第八方面軍の持久方略——絶対の境地〕 かくして第八方面軍は

新作戦方針に基く持久作戰に移ることとなつたが、十月中旬以來敵の航空攻撃は熾烈を加え、陸海よりする敵の反攻は愈々激化しつゝあつた。又ソロモン群島、東部ニューギニア両方面ともに、後方連絡線の確保漸く困難に陥り、全軍苦難に満ちた専守防禦作戰を遂行しなければならぬ絶対の境地に置かれることとなつた。

方面軍司令官今村中將は、十月七日新作戦方針に基く作戰計畫を策定してこれが徹底を期した。その中において「各兵团各部隊の後退は絶対之を認めず、その占拠地に於て必死敢闘敵に打撃を与へ、その縦深的綜合戰果により全般的持久任務を達成せんとする」作戰思想を明示したことは、悲壯な作戰の実相を示すものであり、中央部をして感動せしめたところであつた。

3 濠北方面

濠北方面における戦備強化の措置は、既に述べたように昭和十七年末頃から開始されていたが、大本營は新作戦方針に基き、西部ニューギニアから濠北に亘る反撃作戰準備強化のため、更に画期的措置を採つた。

統帥組織の確立強化と兵力増加の断行がそれである。

〔第二方面軍の進出——兵力増加〕 従来濠北地区の防衛は陸軍にあつては南方軍總司令官がこれを担任し、その隷下の第十九軍（第五、第四十八師団基幹）が配備されていた。大本營は新作戦方針の採択に伴い、濠北方面を南方軍より切り離してこれを直轄することとなつた。それは濠北地区が米濠軍に対する大反攻支撐としての地位を有し、且つ中部太平洋方面の作戰とも密接な關係を持つようになつたからである。

即ち大本營は昭和十八年十月二十九日、在滿の第二方面軍司令部（方面軍司令官阿南惟幾大將）及び第二軍司令部（軍司令官豊島房太郎中將）を濠北に転用し、同方面の作戰に当らせることとした。

又その直前中国方面の第三十六師団及び内地の第四十六師団等を濠北方面に増派した。

第二方面軍司令部は十一月中旬現地に進出し、十二月一日その統帥を發動した。同方面軍は第二軍（差当り第三十六師団基幹）、第十九軍（第五、第四十六、第四十八師団基幹）と軍直轄部隊を以て編組せられ、第七飛行師団は濠北に位置したままその指揮下に入れた。

第二方面軍の任務は海軍と協同して速かに反撃作戰準備を強化し、來攻する敵を撃破して濠北方面の要域を確保するにあつた。その作戰担任地域は東經一四〇度以西、マカッサル、ロムボック海峡以東、北緯五度以南の区域であつた。確保すべき第一線として西部ニューギニアの要域、アル、タニンバル、チモール、小スンダ各諸島の要地が指示された。

第二方面軍に対する前進補給基地はフィリッピンに設定せられ、補給点としてハルマヘラ、マノクワリ、アンボンが指定された。

〔第四南遣艦隊の新設〕 陸軍の措置に併行して海軍統帥組織の強化も行われた。即ち大本營は十一月一日にはハルマヘラに第二十六特別根拠地隊を新設し、次いで十一月三十日には第四南遣艦隊（司令官山県正郷中將）を新設して濠北方面の防衛を担当せしむることとなつた。同艦隊は第二十六特別根拠地隊のほか、従来から配備せられていた第二十四、第二十五特別根拠地隊及び航空部隊を基幹とする兵力であつた。

〔實質的作戰準備進まず〕 このように統帥組織と部署の強化が措置せられたが、その機能を發揮するため、二つの大きな問題があつた。それは龐大なる飛行場群の建設と莫大な軍需品の輸送集積であつた。

飛行場の建設はこの方面防衛の根拠施策であつたので、西部ニューギニア、セレベス及びバンダ海地区を含んで一〇〇以上の飛行場

整備が計画せられ、これを完成するためには地上部隊の主力を飛行場構築に使用するものおよびない大作業を必要とした。

これにも増して困難な問題は莫大なる軍需品を集積するための船舶輸送であつた。第二方面軍が十一月中旬に中央に要請した兵力、軍需品輸送のための所要船腹は四カ月間に展開を完了するものとして毎月大中小型約四五万総噸、小型約一五万総噸に上るものであつたが、海空よりする敵の攻撃のほか、昭和十九年二、三月中部太平洋方面戦備優先強化のため、濠北方面に対する輸送の大部を中絶せられ、作戦準備の最も重要な時期に一頓挫を来し、方面軍の首脳を大いに焦慮せしめた。

4 中部太平洋方面

〔陸軍部隊進出の経緯〕 昭和十八年春ギルバート諸島、マーシャル群島、ウェーキ島及び南鳥島等中部太平洋方面に対する敵米攻の算が濃化するに伴い、陸軍部隊を同方面に派遣して海軍指揮官の指揮下に入らしめたことは、既に述べた通りである。

翻つて開戦初期における太平洋方面の作戦に対しては、陸軍は南海支隊をして協力せしめただけで、大部の作戦は海軍単独で遂行せられ、その後の戦況上南東方面のみは、逐次陸軍部隊を増加して遂には一方面軍を配置するに至つた。フィリッピン以西の作戦地の防衛担任については、陸海軍中央協定により、各地区毎に細部に亘り陸海軍の分担が判然としていたが、中部太平洋方面においてはそれが明かにせられていなかった。しかし従来の経緯上不文律ながら海軍の主担任として取扱われ、陸軍はこれへの介入を遠慮していたのである。

昭和十八年夏に至り、中部太平洋方面における爾後の情勢推移を憂慮した大本営陸軍部は、海軍部を誘い、幕僚団を中部太平洋に派遣して陸軍兵力の増派計画を研究せしめると共に、防備強化のため

陸軍築城本部長秋山徳三郎少将を団長とする築城団を同方面に派遣せしめた。これらはいずれも新戦方方針への転換と関連する措置であつた。当時カロリン、マリアナ群島方面は、殆ど無防備に近い状態に放置せられていた。

昭和十八年八月ギルバート諸島南東方に連接するエリス諸島を占領した敵は、九月に入るやペーカール島に地歩を拡大し、十月には早くもマキン、タラワ、ナウル、オニシャン等の我が航空基地に対し空襲を開始するに至つた。又敵機動部隊は、八月三十日ウェーキ島、九月一日南鳥島、十九日ギルバート諸島及びナウル島方面に來襲し、中部太平洋方面の戦局は頓に緊迫を加へ來つた。

〔本格的戦備強化〕 以上の如き情勢に即応し、九月六日大本営は差当り内地にある第五十二師団の歩兵第七聯隊基幹の兵力を以て甲支隊を編成し、これをボナペ島に急派すると共に、第五十二師団主力のトラック島派遣の準備を発令し、新戦方方針の採択と相俟つて、陸軍兵力の大量派遣により中部太平洋方面の戦備を速急強化することとなつた。前記「中南部太平洋方面作戦陸海軍中央協定」においては、中部太平洋方面の戦備強化について左の如く協定示達された。

海軍は昭和十九年春頃を目途としてカロリン、マリアナ群島方面に於ける作戦準備を速急に強化す

陸軍は所要の陸軍部隊及一部の兵站機関を中部太平洋方面に派遣し海軍指揮官の指揮下に入らしむる等之が作戦準備強化に関し海軍に協力す

右協定に基き大本営は、陸軍兵力を内地、朝鮮、満洲、中国等の各方面から転用又は新設派遣することとなり、その総兵力は歩兵約四〇箇大隊を基幹とし、所要の戦車、砲兵、対戦車砲及び工兵等が属していた。而してこれらの兵力は、新戦方方針の趣旨に鑑み、カロリン、マリアナ群島に重点配備せらるべきであつたが、マーシャ

ル群島及びマーンシャル、カロリン群島間の連絡諸島嶼の防備も極めて薄弱であつたので、勢いこれら前方島嶼にもかんりの兵力を配備するの已むなきに至つたのである。

〔輸送の困難とその実績〕 大本営は、十月二十二日第五十二師団主力、十一月十六日南洋第二乃至第六支隊及び海上機動第一旅団の中部太平洋方面派遣を発令した。しかるに敵潜水艦の妨害逐次顕著

となり、昭和十八年十二月には約三〇万総噸、翌年一月には約四六万総噸と開戦以来最高の船舶損耗（大破を含む）を生じ、非常な困難の下に輸送を遂行せねばならなかつた。かくして昭和十八年九月以降翌年一月までの間における中部太平洋方面陸軍兵力派遣の実績は左表の如くであつた。

地 点	部 隊		到 着 時 期
ク エ ゼ リ ン	海上機動第一旅団の歩兵第二大隊（二箇中隊欠）及工兵隊	昭和十九年一月	
	南洋第一支隊の一部	昭和十八年九月乃至十一月	
ウ オ ッ ジ エ	海上機動第一旅団の歩兵一箇中隊	昭和十九年一月	
	南洋第一支隊の歩兵一箇中隊、機関銃一箇中隊	昭和十八年九月乃至十一月	
マ ロ エ ラ ッ プ	海上機動第一旅団の歩兵一箇中隊	昭和十九年一月	
	南洋第一支隊の歩兵一箇中隊	昭和十八年九月乃至十一月	
ミ レ	南洋第一支隊（歩兵第二大隊欠） 甲支隊の歩兵第三大隊、山砲兵一箇大隊（一箇中隊欠）、工兵一箇中隊（一小隊欠）	同右	
	南洋第一支隊の歩兵第二大隊（二中隊欠）	同右	
ヤ ル ー ト	海上機動第一旅団（第二大隊、工兵隊欠）	昭和十九年一月	
	南洋第二支隊	同右	
ク サ イ	甲支隊（第二、第三大隊、戦車中隊、機関砲中隊欠）	昭和十八年十一月	
	南洋第三支隊	昭和十九年一月	
ボ ナ ベ	甲支隊の第二大隊、戦車中隊、機関砲中隊	昭和十八年九月及 昭和十九年一月	

モートロック	南洋第四支隊		昭和十九年一月
トラック	第五十	師団司令部	昭和十八年十二月
	二師団	歩兵第六十九聯隊(第二大隊欠)	昭和十九年一月
		歩兵第五十聯隊第三大隊	同右

備考 一、南洋第一支隊は第六十五旅団の歩兵第二百二十二聯隊を改編したものである。

二、第五十二師団の残余は昭和十九年一月内地を出発して追及中である。

第三章 国防圏前衛線の逐次崩壊

1 国防圏前衛線に対する連合軍の急進

〔連合軍のフィンシュハーフェン上陸〕 大本営において、九月十五日、新作戦方針が決定されている頃、南東方面部隊の主力は、来るべき敵の来攻に備えて、ダムビル海峡西岸のフィンシュハーフェン及び北部ソロモン就中ボーゲンビル島の守備の強化に邁進中であつた。しかしながら、連合軍は我が現地部隊に対して十分な時間の余裕を与えなかつた。大本営の九月三十日の命令が発せられる以前、即ち九月二十二日マッカーサー軍は我が国防圏前衛線右翼の要衝フィンシュハーフェンに対して、怒濤の攻撃を加えてきた。

〔国防圏前衛線——挑むマ、二両米將〕 大本営の新作戦による所謂国防圏前衛線なるものは、南東方面においては、西は東部ニューギニアのマダン地区よりダムビル海峡地区及びラバウルを経てボーゲンビル島に連なる蜿蜒約一千料に亘る長大な線であり、又中部太平洋方面においてはギルバート及びマーシャル群島の形成する線であつた。

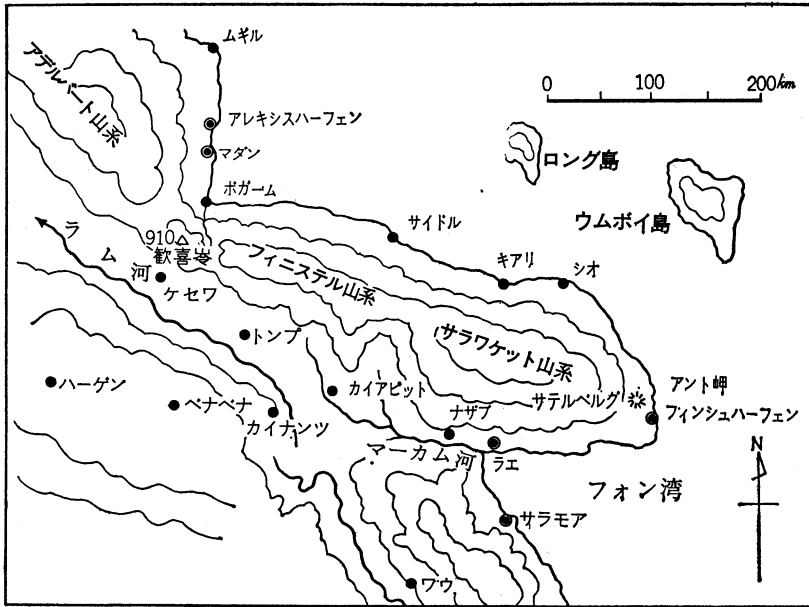
この二つの前衛線のうち、中部太平洋方面のものは、我がカロリン方面絶対国防圏の先端にあるトラックの前衛線を構成するものであつたが、南東方面のものはトラックの前衛線たるのほか、連合軍

の西部ニューギニア方面国防圏に対する進攻を阻止する使命をも持っていた。

我が前衛線に対する連合軍の陣容は、ニューギニア東北岸沿いの正面に対してはマッカーサー大将の指揮する米濠連合の陸海軍、ソロモン及び中部太平洋方面に対しては、ニミッツ大将麾下の米太平洋艦隊の主力(中部太平洋艦隊)及び一部の陸軍部隊であつた。

〔ダムビル西岸の防備〕 当時第十八軍は既述の如く八月初頭、ベナベナ、ハーゲン作戦の延期とフィンシュハーフェン地区の防備強化とを決心して第二十師団の一部を同地区に急派し、又次いで敵がラエ東側に上陸してラエ、サラモアの失陥不可避となるや、機を失せず第二十師団主力のフィンシュハーフェン転用を処置し、フィンシュハーフェン地区における遡撃態勢の速かなる完成を鶴首して待つていたのであつた。しかし敵の飛行機及び船を使用する機動力に対して、我が徒步行軍の速度を以てしては如何にするも初期のリードを以て逃げ切ることが出来なかつた。

連合軍の矢継ぎ早の攻勢の最初の兆候は九月十九日、マーカー河の上流のカイアビットにおいて現われた。第五十一師団及びその他の部隊のラエからの撤退を容易にするため、マダン南方のフィニステル山系線より長駆マーカー河谷に向つて急進中の中井支隊(第二十



歩兵団長中井増太郎少将の指揮する歩兵第七十八聯隊基幹）の先頭部隊と濠洲第七師団との遭遇戦がこれであつた。この敵は九月五日ナザブに降下してラエを占領した後、反転して空中補給によりながら、嘗て我が第二十師団がマダンからラエへ自動車道構築による陸路進出を図つた経路を逆にマダンに向つて進撃中であつたのである。

カイアビットの戦闘に引続いて起きたのが、九月二十二日に行われた濠洲第九師団のフィンシュハーフェン北方アント岬に対する上陸であつた。この二つの攻勢は両両相俟つて南東方面我が国防圏前衛線の右翼を、その根底より覆滅せんとするものであるかに見えた。

マダンは国防圏前衛線の最右翼なるのみならず第十八軍の主要作戦基地でもあつた。而してフィンシュハーフェンはマダンより約四〇〇キロの遠距離にあり、当時の殆ど絶望的な彼我航空勢力の懸隔をも併せ考える時、フィンシュハーフェン地区における作戦は補給上の大問題を包蔵していた。更に条件を悪くしていたのは、我が第四航空軍が八月における損害を恢復し得ず、二師団の編成を有しながら実動六、七〇機を出でなかつたことである。

〔初期の反撃——西岸激闘の序曲〕 フィンシュハーフェンはラエ、サラモア作戦時期においては後方補給のための舟艇基地として重要な地位にあり、五月以来第一船舶団司令部が位置していた。敵の上陸時、フィンシュハーフェン地区にあつた兵力はラエに前進中敵のホボイ上陸により停止せしめられた第四十一師団歩兵二百三十八聯隊の一大隊弱、漸くマダン地区より到着せる第二十師団歩兵第八十聯隊（二大隊欠）及び砲兵一大隊並びに海軍第八十一警備隊（約四〇〇）その他合計約四、〇〇〇で、これら部隊は第一船舶団長山田栄三少将の指揮下にあつた。

山田少将は敵のアント岬上陸に会し、主としてフィンシュハーフ

エン及びその南方地区に配置していたところの主力を急遽敵上陸点西方のサテルベルグ高地に集結し、軍命令に基き二十七日から反撃を開始した。しかしながら敵もこの間兵力を増強し、我が反撃は十月上旬に至るも奏功しなかつた。フィンシュハーフェンそのものを守備していた我が海軍警備隊は、その善戦にも拘らず十月一日遂にこれを放棄するの已むなきに至つた。一方敵は九月二十二日から上陸点附近に飛行場の整備を開始し、十月四日には早くも飛行機の離着陸が認められた。

この間我が第四航空軍はその劣勢に拘らず敵の上陸軍に対して攻撃を敢行したが、大なる貢献をなし得なかつた。ラバウルに基地を有する海軍航空部隊は九月二十二日から出撃を敢行し、敵船団の帰途を捉えて相当な損害を与えた。海軍航空の反撃は爾後十月二十七日の北部ソロモン、モノ島上陸まで数次に亘り継続されたが、大勢を制するに至らず、敵は引続き上陸兵力を増強しつつあつた。

〔第二十師団の前進促進〕 右の如くにしてフィンシュハーフェンの初期作戦は終つたが、これはダムピール西岸における彼我激闘の序曲に過ぎなかつた。即ち九月上旬マダン地区を出発した我が精銳第二十師団主力は一意フィンシュハーフェンを目指して徒歩急進中であつた。同師団は敵のフィンシュハーフェン上陸時、その最先頭を以てシオ（フィンシュハーフェン北方約一〇〇軒）に進出し、十月中旬初めの頃には戦場に到着し得る見込みであつた。ここにおいて第十八軍司令官は第二十師団の前進促進の処置を講ずると共に、九月三十日第一船舶団長の指揮する部隊を第二十師団長片桐茂中将の指揮下に入れ、同師団長に対しフィンシュハーフェン地区作戦遂行の任務を附与した。

〔マダン地区強化〕 一方第十八軍司令官は九月二十二日敵上陸の後、中井支隊をマダン南方約五〇軒の西部フィニステル山系線（歡喜峯、九一〇高地の線）に退却せしめる如く処置した。この処

置は、主として連合軍の次の新企図に対して兵力使用の自由を獲得する目的を以て行われたものであつた。

事実、九月下旬頃マダン地区には兵站部隊のみで、地上戦闘兵力皆無であつた。よつて軍司令官は更にウェーク地区より第四十一師団の歩兵二大隊及び砲兵一大隊を招致するに決し、十月末までにマダン地区において掌握する如く処置した。

2 現地軍の持久作戦計画

〔現地部隊の立場——陸海一様ならず〕 大本營の新作戦方針に關する命令は電報を以て現地部隊に達せられた。トラックにおいては聯合艦隊司令長官古賀大将、ラバウルにおいては第八方面軍司令官今村中将及び南東方面艦隊司令長官草鹿中将が受領した。しかし、大本營の新作戦に対する現地部隊司令官たちの受取り方は必ずしも一様ではなかつた。第八方面軍首脳部は昭和十八年初頭以来の必死の作戦努力が現実において実を結び得ずして、このままでは攻勢に出どころか寧ろじり貧に陥り、頽勢挽回の機会を失うであろうことをかねて秘かに憂えていた。従つて大本營が後方に決戦地帯を設け新しく出直す決心を採つたことを全局作戦の見地より十分に諒とした。一方現地海軍部隊としては、その境境上、遽かに大本營と其所見を一になし得ない事情があつた。従来日本海軍は南東方面を主作戦方面とし、陸軍よりも多くの努力を傾注してきたのである。現に八月十五日には古賀聯合艦隊司令長官は、その第三段作戦方針において、南東方面を主作戦方面とし、将来この方面から攻勢に転ずる方針を再確認したばかりであつた。事実また南東方面は、日本海軍多年の前進根拠地であり、且つ新作戦方針においても国防圏の一角であるトラックの直接的防衛線である。従つて現地海軍部隊の南東方面に対する考慮は陸軍のそれよりも遙かに大であつた。

又海軍作戦の見地から云つて、一度敵を広大な中部太平洋に進入

せしむればこれが捕捉は至難であるので南東方面の比較的狭い海域で決戦を求めるのが有利であるという思想のほか、南東方面作戦を強力に遂行しなければ国防圏の設定に先だつて南東方面が破れるであらうという憂慮もあつた。ともあれ、大本營の新作戦方針は額面通りには現地海軍部隊には受取られなかつた。而してこの現象は前述せる絶対国防圏なるものの持つ不明確性及び不徹底性の一つの現われでもあつた。

〔現地部隊の敵情判断〕 持久作戦のための新作戦計画立案當時における現地部隊の敵情判断は次の通りであつた。

一、敵兵力に関する判断

1 敵地上兵力は、ソロモン方面に於ては第一線に直ちに使用し得るもの陸軍三箇師団、海兵一乃至二師団、その後方に陸軍約八箇師団、ニューギニア方面に於ては現に交戦中のものを含めて第一線三箇師団、その後方に二乃至五箇師団

2 航空兵力は後方兵力を併せて総計三、〇〇〇機、内第一線機はソロモン方面五五〇乃至六〇〇機、ニューギニア方面約七〇〇機

二、敵の企図判断

敵の南東方面に対する反攻は愈々熾烈の度を加え、昭和十八年末以降十九年春季の候に於て最高潮に達するであらう。この間敵が政戦略上の要地たるラバウルの攻略を企図することは必至である。敵のラバウル攻略の為に先づダムビル海峡地帯及びボーゲンビル島の攻略を企図することは必至であらう。

次いで直路ラバウルを攻略するか、或は更にアドミラルティ及ニューアイルランドを攻略してラバウルの完全孤立化を図つた後攻略を企図するかは不明であるが、諸般の情勢上前者の公算が大である。而してその時機は十九年の二、三月の候と判断される。

右のラバウル攻略必至の判断は我が方として純戦術的になされたものであるが、真意が欺騙か、敵もまた頻りにラバウル攻略を放送していた。

〔第八方面軍の持久作戦計画〕 前述の敵情判断と新任務に基く第八方面軍の作戦計画は、兵力の運用においても又作戦態勢においても従来の指導に大転換を加えるものではなかつたが、特にダムビル海峡地帯及びボーゲンビル島の確保に先ず作戦の重点を指向することを明示した。又戦闘指導に当つては、既往の戦訓に稽え空陸海の綜合戦力を適時要点に集中發揮して敵を海上又は水際に撃破し、已むを得ざるも敵の上陸初動においてこれを撃砕するを根本とした。しかし各般の手段を講ずるも尚且つ右目的を達成し得ない場合においても各部隊の後退は絶対にこれを認めず、その占拠地域において必死敢闘敵になし得る限りの打撃を与え、その縦深的綜合戦果により全般的持久任務を達成せんとする強烈な方針を明示した。

なお大本營が第八方面軍に対する最後の増援として転用した第十七師団（師団長酒井康中将）の運用に関しては、最初補給至難な西部ニューブリテンに作戦せしむるは危険大なりとして北部ボーゲンビル島に使用することに一応の決定を見ていたが、その後南東方面艦隊において補給の確保を確約したのでダムビル海峡東岸地帯強化のため西部ニューブリテン方面にその主力を使用することとした。

決定した作戦計画は十月七日発令されたが、その主なる点は次の通りであつた。

一、作戦指導要領

1 作戦の重点を先づダムビル海峡地帯及びボーゲンビル島の確保に指向する

2 ラバウル周辺及マダン以西の東部ニューギニア要域確保の施策を強化する

3 速に航空戦力の強化を図る

4 軍需品の事前集積及之が保全を図ると共になし得る限り現地自活施策を強化する

5 後方部隊の武装及非常訓練を強化する

二 兵力運用

1 第四航空軍（第六、第七飛行師団基幹）は東部ニューギニア方面に於ける敵航空勢力の撃滅に勉めつつ我海上輸送を確保すると共に第十八軍及第十七師団の作戦に協力する 又約一飛行団の兵力を以てバンダ海方面の南方軍（第十九軍）の作戦に協力する

2 第十八軍（第二十、第四十一、第五十一師団基幹）はフィニステル山系以北以西の要域を確保して持久を策する

特に主力を以てフィンシュハーフェン附近ダムビル海峡西岸の要域を占領し、来攻する敵を撃破して之を確保する 又マダン附近以西の要域の防備を強化すると共に第四航空軍に協力し或は自ら担任して航空基地の整備を促進強化する

3 第十七軍（第六師団、南海第四守備隊、第十七師団の歩兵四大隊及砲兵一大隊基幹）はボーゲンビル島の要地を確保して持久を策する 之が為主力を以て同島南部の要域を、一部を以て北部特にブカ附近の要地を占領する

海軍航空部隊は主として第十七軍の作戦に協力する

4 第十七師団（歩兵四大隊及砲兵一大隊欠）は現に中西部ニューブリテンに配置せられあるガスマタ守備隊及松田支隊を併せ指揮し、主力を以てマールカス岬以西のニューブリテン島の要地一部を以てガスマタを確保し来攻する敵を撃破して持久を策する

5 ラバウル防衛隊（師団長影佐禎昭中将の指揮する第三十八師団基幹）はラバウル及東部ニューアイルランド島の要地を

南東方面の最後の複郭として確保する

6 輜重兵第五十一聯隊はアドミラルティの要地特にロスネグロス島を確保する

〔現地海軍部隊の作戦構想〕 現地海軍部隊の作戦構想は前述の環境上必然的に陸軍作戦のそれよりも積極的であつた。即ち聯合艦隊が十月以後の南東方面作戦指導の基本とした事項は次の通りであつた。

一、後方防衛線の戦備成るまで南東方面より主反攻に出でつつある敵を扼止する

二、極力南東方面の制限海域に行動中の敵就中海上兵力の捕捉撃滅を図る

三、南東方面長期持久に必要な物量輸送を強力に支援する

四、前三項実施の爲情勢之を要する場合は決戦兵力の投入も辞せない

即ち聯合艦隊は依然南東方面に重点を保持し強力に前衛線の作戦を遂行する腹であつた。そして前衛線の東方の翼即ちマーシャル及びギルバート方面の作戦は引き続き第四艦隊をして当らしめることとした。若し敵がこの方面に来攻した場合は、ラバウル方面より潜水部隊及び要すれば水雷戦隊を転用し、又第二艦隊（水上部隊）及び機動部隊飛行機隊もこの作戦に使用する如く計画した。

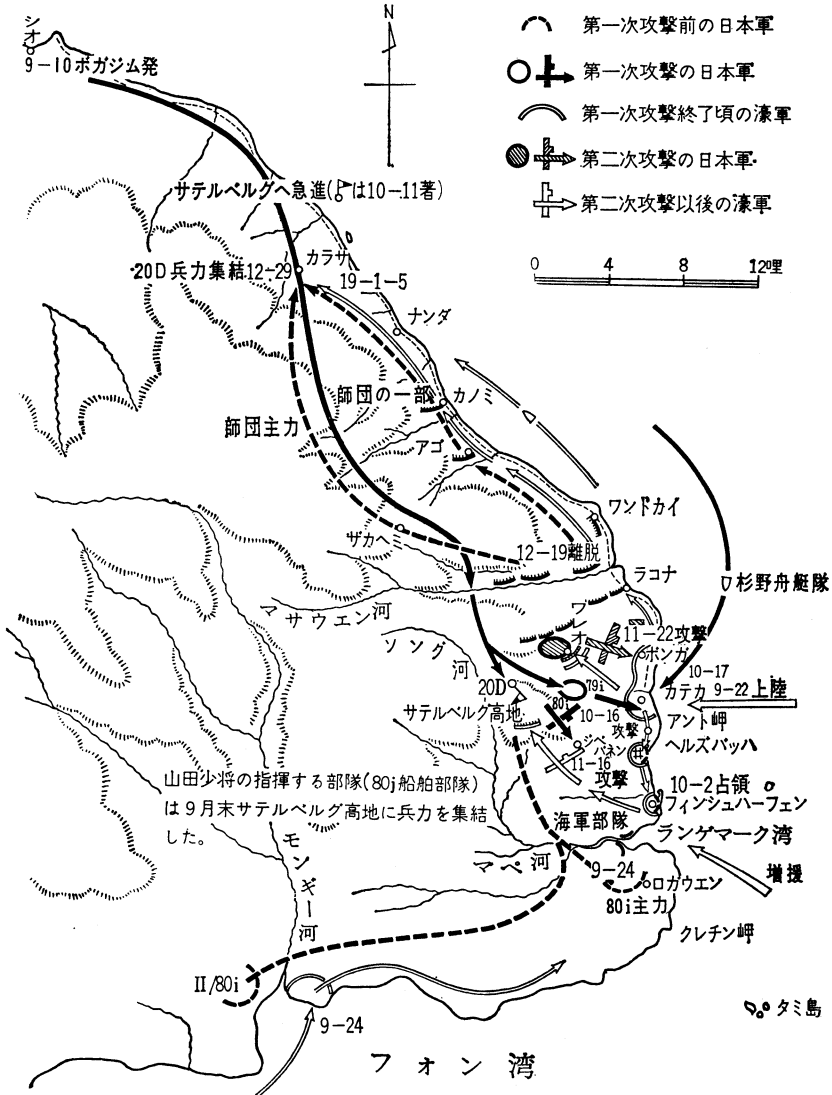
又聯合艦隊の意図に基く南東方面艦隊の作戦方針は主要次の如きものであつた。

一、ラバウルを最後の複郭として防衛態勢を確立する之が為ラバウルの前哨地区中防備薄弱なるニューアイルランド島及アドミラルティ島の要域を強化する

二、ダムビル海峡地帯は敵の対比島作戦阻止の戦略要点として極力永く保持するに勉める 之が為更に物糧の前送に努め持久力の増強を図る

フィンシュハーフェン附近の作戦経過図

(昭和18年9月より12月迄)



三 ボーゲンビル島はラバウルの最有力なる前哨地点たるのみならず中部太平洋に対する敵の進攻を阻止する戦略要点なるを以て来攻する敵を撃破し極力保持するに努める

3 ダムビル西岸の激闘と ボーゲンビル島の無力化

前述の作戦計画がラバウルから発せられて間もなく、即ち十月十二日昼間、連合軍航空機は大挙ラバウルを空襲した。敵の大挙昼間空襲は南東方面作戦開始以来初めてのものであり、我が前衛線に対する敵の本格的挑戦の宣言にも等しいものであつた。

果せる哉、敵は九月二十二日のフィンシュハーフェン上陸に引き続き、十一月一日ボーゲンビル島のタロキナに、又同月二十一日にはギルバートのマキン、タラワに上陸する等、一連の熾烈な攻撃を加えて来たり、これから以後翌昭和十九年三月に至るまで、南東及び中部太平洋の広大な戦線の各処において彼我必死の激戦が展開されたのであつた。

〔中井支隊の善戦〕 これより先、マーカーカム河谷を西進中であつた濠洲第七師団は我が中井支隊の後退に追尾して前進し、中井支隊が未だ歓喜寄、九一〇高地の線に十分なる態勢を整え得ないに乘じ十月四日頃より攻撃を開始した。戦闘は紛糾に陥り、マダンの南方防衛線たるフィニステル西端の守りも一時危いかに見えたが中井支隊の善戦により、十五日頃までには全線に亘つて敵の急襲を撃退し、かくてマダンの危機は救われた。敵は相当な損害を受けたものの如く爾後約二カ月間、敢えて大規模な攻撃に出でなかつた。

〔第二十師団の第一次攻撃〕 その頃、遙か東方のフィンシュハーフェン附近においては全軍の期待を集めた第二十師団主力の攻撃が開始されんとしつゝあつた。シオより急進して十月十一日サテルベルグ高地に到着した第二十師団長は山田部隊を掌握すると共に師団主

力（歩兵第七十九聯隊及び砲兵隊基幹）の到着を待つて十月十六日当面の敵に対する攻撃を開始した。第一線たる歩兵第七十九聯隊及び八十聯隊の攻撃は当初若干の錯誤もあつたが、十七日の夜までにはカテカ附近海岸の敵拠点を奪取し、敵陣地を南北に分断した。

この間、十六日夜には歩兵第七十九聯隊の杉野中隊は船舶工兵第五聯隊の舟艇隊によりアント岬附近敵陣地の背後に逆上陸して大戦果を収め主力の攻撃を容易ならしめた。この逆上陸は小規模のものながら日本軍としては最初の試みであつた。十八日には第一線兩聯隊は戦果の拡張に勉めた。北方の敵は狼狽して南方に潰走し、攻撃は成功したかに見えた。

しかるに敵は二十日より舟艇及び陸路により反撃に転じ来たり、密林地帯内において紛戦を惹起するに至つた。時日の経過と共に敵の兵力は増加し、全戦線に亘つて戦勢は逆転を始めた。ここにおいて師団長は態勢整理の必要を認めて二十五日攻撃の中止を命じ、各部隊は再びサテルベルグ高地附近に集結して次の攻撃を準備した。

〔サラワケット越え転進——血涙の任務附与〕 第二十師団の戦闘の背後においてはこの頃、先きにラエを撤退した第五十一師団その他の部隊がキアリ（シオ西方）地区に到着しつゝあつた。久しく連絡を絶つていたこれら部隊は十月八日、その先頭を以てキアリに到着し、十月中旬末までに大部の転進を終つたが、この機動は約一カ月に亘る苦難に満ちたものであつた。

図上直距離は一〇〇〇程度のものであるが、途中に標高四、〇〇〇米を越えるサラワケット山系の天嶮を克服しなければならなかつた。あるか無きかの土人道を、僅かに磁針を頼みとしながら、木の根、岩角を伝つての前進であつた。山系中の急流の渡河には幾度か途方に暮れざるを得なかつた。ラエ出発時携行した十日分の糧食は転進の中途にして尽き、爾後は極めて乏しい雑草や芋に頼らなければならなかつた。更に將兵を苦しめたものは山系中の寒氣であつ

た。常夏の地とは云え、標高四、〇〇〇米ともなれば夜は霜が降り、焚火をしても熱帯被服の將兵の安眠を妨げた。

この至難な撤退の結果、ラエ出発時の総人員約八、六五〇（陸軍約六、六〇〇、海軍約二、〇五〇）はキアリ到着時総計約六、四五〇（陸軍約四、九〇〇、海軍約一、五五〇）に減じた。実に約二、二〇〇の生命をサラワケットの山中に失つたのである。到着した將兵といえども体力著しく衰え、勤務に堪え得るものは約三分の程度であつた。

ラエから転進した部隊の状況はかくの如く、又第八方面軍の作戰計画によればこれら部隊をマダン以西地区に後退せしめて戦力の再建を図ることになつてはいたが、第十八軍としては、これら將兵に直ちに安息と良好な給養とを与えられる状況にはなかつた。即ち第十八軍は、長遠な後方に対する敵の新企図に関する危険を全く無視して、第二十師団をしてフィンシユハーフエン奪回作戰に専念せしめつつあつた。軍司令官はフィンシユハーフエン奪回作戰強化のため、情を忍び涙を吞んで、疲れ切つた第五十一師団に第二十師団の後方シオ、キアリ、ガリ地区の警備の任務を附与した。

〔軍司令官の現地指導〕 軍司令官安達中將は十月中旬マダン出発、途中キアリ附近において第五十一師団の状況を視察しつつ、十一月初頭サテルベルグ高地に進出して第二十師団爾後の攻撃を指導した。

当時第二十師団の戦力は第一次攻撃の結果概ね半減し、補給また極めて困難な状況であつた。補給品はラバウルよりの海軍潜水艦と、マダンよりの大発によつてシオまでは相当量を輸送していた。しかし爾後は敵魚雷艇の荒れ狂う海面における大発輸送と五日以上の行程の担送を必要とした。補給品の前送は困難を極めた。当時ニューギニア方面敵魚雷艇の数は著しく増加し、マダン、フィンシユハーフエン間の我が沿岸輸送を妨害していた。我は大発を武装して

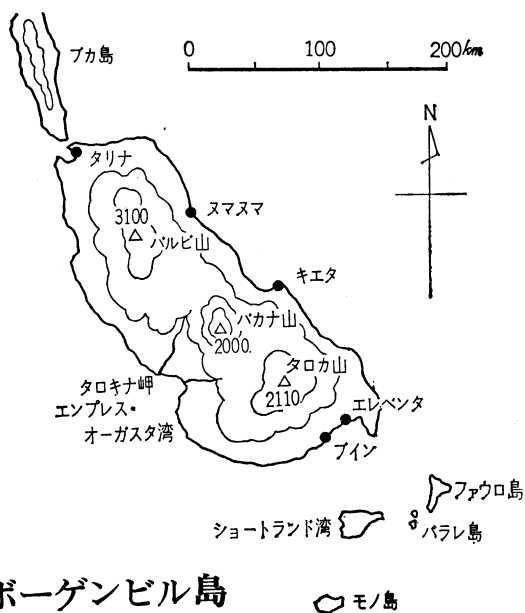
輸送を強行し、九月以降において合計約一〇隻の敵魚雷艇を撃沈したが我が大発の損害もこれを上廻つた。

状況以上の如く、第一線の將兵は既に約一カ月に亘り四分の一乃至三分の一定量の糧食を以て戦闘を強行してきていたのであつた。これ以上の作戰続行は人間として堪え得る限度を越すかに見えたが、軍司令官は任務に基き断乎攻撃の続行を指示した。かくして第二十師団は第二次攻撃の開始を十一月二十四日と定め、準備に着手した。

〔連合軍のタロキナ上陸〕 第二十師団がダムビル西岸において第一次攻撃の鋒を取めた直後、即ち十月二十七日、連合軍の新たな上陸が北部ソロモンのモノ島に対して行われた。モノ島はボーゲンビル島の南端より約七〇軒の距離にある小島で、我が一小部隊が警戒のために配置されていた。

南東方面艦隊司令長官はモノ島上陸の報に接するや、直ちに遼撃作戰の重点をニューギニア方面よりソロモン方面に轉換する旨発令し、航空及び艦艇部隊に出動を命じた。しかるところ、爾後ソロモン方面の敵情は比較的閑散になり、敵が矢継ぎ早に次期進攻を実施するとも判断されなかつたので方面艦隊司令長官は再び作戰の重点をニューギニアに指向する如く処置した。しかるに三十一日に至るや敵の大輸送船団が出現し、十一月一日、ボーゲンビル島西海岸中部のタロキナ岬（エムプレス・オーガスタ湾北部）に上陸を開始するに至つた。

〔海軍の反撃——水上部隊集中使用終焉〕 ここにおいて南東方面艦隊司令長官は直ちに遼撃作戰重点のソロモン復帰を令した。聯合艦隊司令長官また、この機会こそは米海上兵力に精撃を与え得る最後の好機なりとの判断の下に、その可動兵力の全部を以て反撃するに決し、トラックにあつた第二艦隊を南東方面艦隊の指揮下に入れ、又在千島第十二航空艦隊航空兵力の南東方面転進準備を発令した。



ボーゲンビル島

モノ島

聯合艦隊はこれより先、ニューギニア方面敵船舶の掃蕩を企図し、第三艦隊（空母艦隊）の母艦隊機（第一航空戦隊）のラバウル進出を命じていたが、この部隊は端なくも敵のタロキナ上陸の日にラバウル進出を完了した。聯合艦隊は直ちに同部隊をもタロキナ反撃に参加せしむる如く処置した。

かくして第一航空戦隊約一七〇機の増勢を得た南東方面海軍航空は全機数七三機内実働約三七〇機となり、敵の上陸破獲を目指して一日早朝より攻撃を開始した。攻撃は更に五日、八日、十一日、十三日及び十七日と数次に亘つて反復され、総合戦果、撃沈、戦艦四、航空母艦五、巡洋艦一〇、駆逐艦九、輸送船八隻、撃破戦艦二、航空母艦三、巡洋艦五、駆逐艦一、輸送船四隻と報ぜられた。

註 米側正式報告による十一月一日乃至十七日の間における航空戦による損害は輸送駆逐艦一隻沈没のみとなつてゐる。

水上部隊もまた一日夜ボーゲンビル島沖に進攻し、敵の上陸掩護部隊と激戦を交えた。かくしてタロキナに対する反撃は成功しつつあるやに見えたが、この間において、我が南東方面海軍作戦の終末を告げる状況が発生した。それは、第二艦隊のラバウル撤退であった。同艦隊はトラックから南航し、五日早朝ラバウルに入泊したが同日午前敵機約二〇〇の攻撃を受けて被害艦八隻を生じ、作戦に何等の貢献をすることなく即日ラバウルを撤退するの已むなきに至つた。これは南東方面に対する我が水上部隊集中使用の終焉を意味した。

〔陸軍の反撃——逆上陸併用も空し〕 一方ボーゲンビル島にお

ては、当時第十七軍及び第八艦隊（陸海軍総計約四一、〇〇〇）は主力を以て同島南部を、又一部を以て西北部の防備を固めつつあった。ボーゲンビル島に増加予定の第十七師団の歩兵四大隊基幹の部隊は、敵の上陸時、そのうち約二大隊が北部のブカ島地区に到着したばかりであった。

敵のモノ島上陸より判断して、ボーゲンビル島に対する来攻も遠からずと判断していたが、タロキナ附近は地形低湿なるため敵上陸の算は少いものと一般に考えられていた。従つて第十七軍の作戦計画には敵のタロキナ上陸を予想する反撃計画は含まれていなかった。

しかし第八方面軍司令官は、予期しない敵の上陸に対しても進んでこれを撃破するに非ざれば結局第十七軍のボーゲンビル島存在の意義を失うに至るであらうことを慮れ、第十七軍に対し断乎敵の上陸初動においてこれを撃滅する如く改めて命令すると共に、西部ニューブリテンに使用予定の第十七師団主力より歩兵一大隊を抽出して機動決戦隊となし、海軍艦艇によりタロキナの敵上陸地点に逆上陸せしめ、第十七軍の攻撃に策応せしめることとした。この逆上陸は十一月一日夜行われる予定であつたが敵の空海よりする妨害のため決行は六日夜となつた。

第十七軍は方面軍命令に基き歩兵第二十三聯隊（一大隊欠）を以てラバウルよりの逆上陸に呼応し、七日より攻撃を開始した。戦況は当初有利に進展したが翌八日に至るや、敵迫撃砲の集中火を蒙つて攻撃頓挫し、歩兵第二十三聯隊長は独断後方要線に退却してしまつた。逆上陸部隊は上陸には成功したが、上陸点が敵より離隔していたため成果の見るべきものがなかつた。

そこで第十七軍司令官は第六師団長神田正種中將の指揮する歩兵四大隊基幹の兵力を以て二十二日より攻撃再興を図るに決し、準備を開始したが、第八方面軍司令官は敵上陸初動の好機を逸した以上、十分な準備を整えた後でなくては奏功の算少しと判断し、且ボーゲンビル島の他の方面に対する敵の新たな上陸の可能性をも考慮し第十七軍をしてタロキナの敵に対し爾後の大規模なる攻撃を準備せしめる如く指導した。

〔ボーゲンビル島無力化す〕 航空反撃の方にもこれが続行を困難

ならしめる状況が発生しつつあつた。第一航空戦隊は相繼ぐ戦闘により被害累積したので聯合艦隊司令長官は十二日発令してこれをトラックに引き上げしめた。更に反撃作戦に決定的な影響をもたらしたものは、十一月十九日より行われた敵のマキン、タラワに対する攻撃であつた。

この新攻撃に伴い、聯合艦隊は主作戦をギルバート方面に指向するに決し、千島方面より転用中の中攻隊（第二十四航空戦隊）のラバウル投入を取止め、これを内南洋に転用した。状況かくの如く、今後航空兵力の増勢を期待出来ない南東方面艦隊としては従来の如く積極果敢な航空作戦の継続は困難となつたので極力兵力の損耗を避け、しかも比較的效果のある夜戦を採らざるを得なくなつた。

かくしてタロキナに対する大規模な航空反撃も十一月十七日を以て終つた。タロキナに上陸した敵は逐次地歩を拡大して八乃至一〇軒の橋頭堡を占拠し、十一月末までには二飛行場を完成してラバウル空襲の前進基地を獲得整備した。その上陸兵力は陸軍及び海兵隊各約一師団と判断された。現実の戦況はボーゲンビル島孤立の機近きを思わしめたのである。

第八方面軍司令官はボーゲンビル島の戦力強化のため、先に発令した第十七師団よりの増援部隊の残部等の部隊を、十一月上旬から下旬に亘り海軍艦艇によつてブカ島及び北部ボーゲンビル島に送つた。十二月に入るや、ギルバート作戦を終了した敵機動部隊が再びソロモン方面に出現したので海軍航空部隊は直ちに主力を以てこれを攻撃し、相当な戦果を収めたが大勢を制するに至らなかつた。この頃以後ボーゲンビル島に対する艦艇輸送も不可能となつた。

4 ギルバート失陥とフィンシュハーフェン

奪回企図の放棄

〔マキン、タラワの防備〕 マキン、タラワ両島は我が国防圏前衛

線東端のギルバート諸島中の要衝であつた。タラワには陸上航空基地があり、第四艦隊麾下の第三根拠地隊（指揮官柴崎少将）の主力約四、七〇〇名が守備に當つてゐた。又マキン島には水上機基地があり、第三根拠地隊の一部約七〇〇が守備してゐた。又この方面の航空作戦は主としてマーシャル群島に基地を有する第二十二航空戦隊約一〇〇機がこれに當ることになつてゐた。

〔敵の上陸と我が玉砕〕 ギルバート諸島に対する敵の攻略企図は八月頃から既に顕著となつてゐた。即ち敵は八月ギルバート南方のエリス諸島を占領し、九月には東方のペイカー島を占領し十月に入つてからはこれら諸島を基地として空襲を開始した。又敵機動部隊の中部太平洋における活動も積極化し、九月以後数次に亘りギルバート諸島ウェーキ及び鳥島（マカス）に來襲し、敵の中部太平洋における攻撃開始の機近きを思はしめるものがあつた。しかしながら十一月月上旬のタロキナ沖の航空戦における大戦果を相当程度信じてゐた聯合艦隊は、この航空戦の損害により中部太平洋方面に対する敵の新企図も相当遅延するであらうと判断してゐた。

しかるに、敵は十一月十九日早朝、大規模な空襲を、マキン、タラワ及びナウルに対して開始した。第四艦隊司令長官は直ちに第二十二航空戦隊に反撃を命じた。聯合艦隊もまた千島方面よりラバウルに転進中の航空兵力及び南西方面部隊所屬陸攻隊のトラック集結を命ずると共に、潜水部隊を所定邀撃配置に就かしめた。

敵は二十日空襲を反復し、二十一日早朝、マキン及びタラワ島に上陸を開始した。マキン島との無線連絡は一時間半後には早くも杜絶した。

聯合艦隊は機動部隊の作戦参加を命ずると共にボナベに待機中の歩兵第七聯隊を以て敵の上陸地点に逆上陸を敢行し、且つ聯合艦隊主力を以て二十三日トラック発、好機を捉えて敵艦隊と決戦を行うことを定め、それぞれ処置するところがあつた。

一方タラワ及びマキン両島の我が守備隊は敵の上陸以來勇戦奮闘し、特にタラワにおいては一時敵を上陸地点に圧迫して大いに戦果も収めた。しかしながら衆寡敵せず、又地形上陣地構築至難な事情もあり、地上戦闘は急速に終局に近づいた。二十二日午後一時には遂にタラワとの無線連絡も杜絶した。敵側の放送により、マキン守備隊は二十三日、タラワ守備隊は二十五日それぞれ玉砕したものと認められるに至つた。この間我が航空部隊及び潜水部隊の反撃も予期の成果を挙げ得なかつた。

ここにおいて聯合艦隊司令長官は当初の計画を断念し、所在の陸海軍部隊を以てマーシャル群島の防備を強化する如く処置した。

〔ダムヒール西岸の攻防——第二十師団〕 ギルバートにおいてマキン、タラワが失われつつある頃、遙か西岸のダンピール西岸においては約二十日に亘る戦闘交綏状況を破つて再び激闘が展開されつつあつた。即ち増援を受けていたフィンシュハーフェンの敵は十一月十六日から、我が第二十師団の第二次攻撃の機先を制して攻撃を開始してきた。就中サテルベルグ高原に対する攻撃は激烈を極めた。日日の銃爆撃は数百機を算し、砲撃また熾烈で山形ために改まつた。この度は敵は重戦車をも参加せしめた。この三十噸以上の戦車に対しては我が対戦車砲は弾丸は命中しても弾き返されるばかりであつた。第二十師団は右状況に鑑みて予定を二日早め二十二日早朝より攻撃を開始し、歩兵第八十聯隊をしてサテルベルグ高地を死守せしめつつ歩兵第七十九聯隊をして敵の右翼を攻撃せしめた。第四航空軍また敢然この攻撃に協力し、二十三日三五機、二十六日四七機を以て敵陣地を攻撃した。しかしながら当時の我が航空勢力は、当初大本営において企図した第四航空軍総計約三五〇機には到底及ぶべくもなく、加うるに十一月中旬に亘り第七飛行師団が濠北第二方面軍方面に転用されるなどの経緯もあり、実働兵力は概ね一〇〇機程度に過ぎなかつた。これに対しニューギニア方面敵航空は十一月末

頃既に第一線機約九〇〇を数えていたので第四航空軍の攻撃は長続きし得ない状況にあつた。

かかる状況にも拘らず第二十師団は奮闘これ努めた。しかし戦力の懸隔に如何ともなし難く、二十六日にはサテルベルグ高地を敵手に委するの已むなきに至つた。二十七日には歩兵第七十九聯隊も態勢整理を要する状況であつたので、師団長は翌二十八日、更に北方のワレオ、ノンガカコの線において次期攻撃を準備するに決した。

〔フィンシュ奪回企図を放棄す〕 サテルベルグ高地こそはフィンシュハイフェン奪回のための最後の拠点であつた。これが喪失は事実上フィンシュハイフェン奪回の可能性を消滅せしめるものであつたのであるが、フィンシュハイフェン地区の戦闘は十二月に入るもお熾烈に継続された。敵はサテルベルグ高地の奪取を以て満足せず尚も熾烈に攻撃を続行した。第二十師団またワレオ、ノンガカコの線を拠点として攻撃の反復に最後の血みどろの努力を払つた。

かくする間に、十二月十五日敵は遂にニューブリテン西南岸のマールカス岬(アラウエ)に新たな上陸を行なうに至つた。又西部ニューブリテンにおいては第十七師団の諸隊は漸くにしてその展開を完了しつつあつた。よつて第八方面軍は、十二月十七日第十八軍に對し「ダムビル海峽方面に於ては概ね現在兵力を以て概してラコナ附近以北シオ附近に亘る要域に於て極力持久を策す」べきを命じた。

ここにおいて第十八軍は改めて第二十師団に對しダムビル海峽西岸最後の拠点としてシオ地区確保の新任務を与えた。第二十師団は十九日夜敵と離脱し北進を開始した。フィンシュハイフェン地区作戦参加総兵力約一二、五〇〇の内約五、五〇〇を失ひ師団の戦力は著しく減じたが、長期に亘り概ね四分の一乃至三分の一量の補給を以て奮戦し、九月以来約三カ月の久しきに亘つて敵をしてダムビル沿岸の他地区に對する新行動の余地なからしめたことは精銳

第二十師団して始めて能くなし得たところであつた。

〔マダン地区防衛強化——第九艦隊編成〕 十月上旬マダン南方フィニステル山系線の強襲に失敗した濠洲第七師団はその後戦力の恢復に努めたるものの如く十二月初頭より活氣を呈しつつあつた。中井支隊はこの敵の機先を制して一撃を与うべく企図し、第四十一師団の歩兵第二百三十九聯隊主力を併せ指揮して十二月八日ケセワ方向に攻勢に転じた。この攻勢は全く敵の意表を衝き大成功を収めた。敵の行動は爾後長く消極的となつた。

又第十八軍は将来に備えてマダン地区防備強化促進の必要を認め、十二月上旬にウェワク第四十一師団主力のマダン地区前進を処置した。この処置を以て第十八軍の戦闘兵力は尽くセビツク河以東に移り、ウェワク以西は戦闘兵力皆無となることとなつた。

なお第十八軍は第二十師団のフィンシュハイフェン作戦終了に伴い第五十一師団主力をして戦力再建のためハンサ地区に転進せしむる如く処置するところがあつた。

一方海軍においても東部ニューギニア海軍部隊の指揮組織強化のため第九艦隊を編成した。同司令部は十一月末ウェワクに進出して当時シオ地区にあつた第七根拠地隊及びウェワクにあつた第二特別根拠地隊を併せ指揮したが艦艇及び航空部隊については大なる増強なく、ニューギニア作戦の大勢には変化がなかつた。

5 西部ニューブリテンの激闘と

ダムビールの崩壊

〔ダムビル東岸の防備〕 十二月十五日敵のマールカス岬上陸當時西部ニューブリテンの防衛は主として第十七師団がこれに當つてゐた。第十七師団兵力は十一月上旬の間海軍艦艇及び大発等によりラバウルより西部ニューブリテンに前進し、十二月十五日概ね次の

如き配置予定を以て展開を概成せんとしつつあつた。

敵の上陸したマーカス岬には第五十一師団の追及人員を以て臨時に編成した部隊が配置されており、同地に増加予定の歩兵第八十一聯隊の約一大隊はニューブリテン北岸イボキ附近から同島を横断して將にマーカス岬に到着せんとしつつあつた。

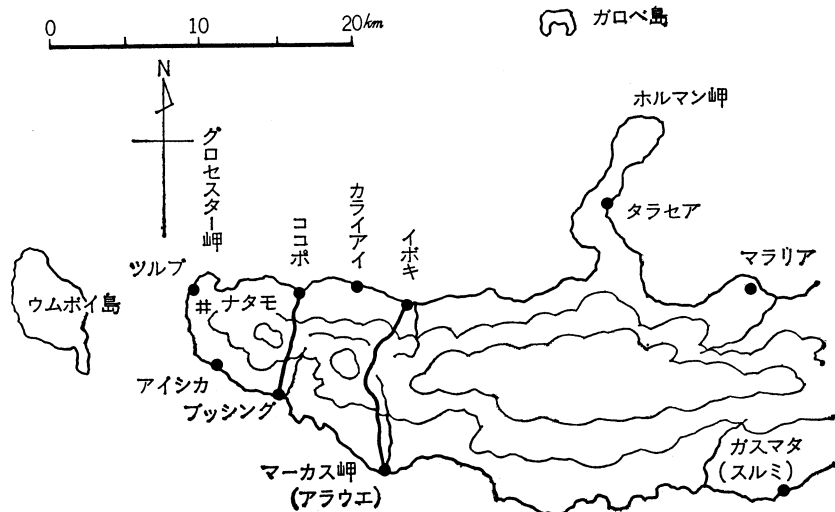
ニューブリテン西岸の防備は松田巖支隊長の指揮する第六十五旅団（歩兵第四百四十一聯隊基幹）、歩兵第五百十三聯隊主力、砲兵一大隊、搜索第五十一聯隊等がツルブ（グロセスター岬附近）、ブッシング及びウムボイ島を防備していた。ツルブには飛行場があり、防備の重点は同地に指向された。

第十七師団の今一つの歩兵聯隊である第五十四聯隊の聯隊長は部下一大隊のほか第三十八師団の歩兵一大隊及び砲兵一大隊を指揮してガスマタの守備に當つていた。

〔マーカス反撃——空陸の猛攻続かず〕 敵のマーカス上陸当時、敵はボーゲンビル島北方のブカ島の空襲を激化し同方面にも新企図を有するやに判断されたが幸いマーカス岬方面の上陸兵力は比較的小数であつたので、第八方面軍及び南東方面艦隊は先ず速かにこの敵を撃滅する方針を樹て、航空攻撃の火蓋を切つた。聯合艦隊もまた、トラックに進出待機中の約六〇機を南東方面に増加した。

トラックよりの増援を得て戦闘機百数十機、艦爆約五〇機となつた海軍航空部隊は十五日早朝より反撃を開始し、十六日、十七日及び二十一日と五回に亘り攻撃を加えた。第四航空軍もまた十五日より三回に亘つて出撃し海軍の反撃に策応した。これらの攻撃は多大の戦果を収め、敵は上陸兵力約一師団の二分の一を失つたことが敵側の放送によつて明かにされた。

一方地上部隊の奮戦も目覚ましいものがあつた。第八方面軍は松田支隊の一大隊をブッシングより海上機動によつてこの攻撃に参加せしめた。これら兵力は総計約二大隊の弱勢ながら、小森少佐の指揮



の下に、敵を圧迫してその地歩拡大を阻止した。

かくしてマールカス岬附近の敵撃滅の希望は実現するかに見えたが、敵は我が航空反撃を封ずるにラバウルの連日空襲と機動部隊によるニューアイルランド島方面陽動とを以てした。我が海軍航空は二十二日以後ラバウルにおける邀撃戦に忙殺せられ、マールカスに対する攻撃は夜間少数機を以てするの已むなきに至つた。地上においても小森支隊は逐次敵の圧迫を受けるにつつあつた。

〔ツルブの失陥—松田支隊後退〕 かくするうちに、敵は十二月二十六日ツルブ（グロセスター岬）に対して矢継ぎ早の上陸を開始した。陸海軍航空部隊は同日反撃を行なつたが、二十七日以後は攻撃の続行不可能となつた。即ち同日より敵のラバウル空襲は愈々激化し、我が海軍航空は完全にラバウルに釘付けされた。又第四航空軍は十五日以来の攻撃により爆撃機の殆ど全部を失ひ二機を余すのみとなつていた。

今や、ツルブ地区の戦闘は地上部隊にその望みが懸けられることとなつた。松田支隊は敵の上陸を知るや直ちに水際に遡撃したが、敵は遂に水際附近にその地歩を獲得した。ここにおいて松田支隊はその全力をツルブ地区に集結し、先ずナタモ附近の敵を撃滅したる後飛行場を奮回する方針の下に攻撃するに決した。攻撃はブッシングより招致せる歩兵第四百一聯隊主力の到着を待つて、一月三日黎明三角山に重点を指向して開始された。各部隊の敢闘により同日一度は三角山の奪取に成功したが、敵の猛反撃のため同高地の保持は困難となつた。爾後三角山の争奪が地上戦闘の焦点となり、松田支隊は極力これが奪取を図つたが形勢は逐次我に不利となつた。一月中旬末頃には致命的な弾薬糧食の欠乏が訪れた。

第八方面軍はツルブ方面に対する今後の補給確保の手段がない状況に鑑み、一月二十日西部ニューリテンの確保作戦を断念し、第十七師団に対し、ツルブ附近兵力を中部ニューブリテン方面に撤

収し、且つ爾今概ねタラセア及びガスマタ附近の要域において来攻する敵を撃破して極力持久を策すべきを命じた。かくして松田支隊は一月二十三日東方に向つて後退を開始し、西部ニューブリテンは完全に敵手に落ちた。

〔ダムビル西岸の崩壊—シオ地区失陥〕 昭和十九年正月はダムビル西岸においても極めて陰惨なものであつた。敵はツルブ上陸一週間後即ち正月二日、ダムビル西岸の奥深く、グンビ岬（サイドール）に対して新上陸を行つた。グンビ岬は、当時第十八軍がダムビル西岸最後の要衝として確保せんとしつゝあつたシオ地区とマダン地区との概ね中間にあたつており、この地点に対する敵の上陸はシオ地区確保作戦をその根底から崩壊せしめるものであつた。

この状況は、第十八軍は固より第八方面軍としてもかねてから憂慮していたところのものであるが、当時ダムビル地区作戦に徹底的努力を払わなければならなかつた南東方面全般作戦の必要上この危険を甘受していたのであつた。さるにても、この上陸により第十八軍戦闘力の約半部が約三〇〇軒の東方において、その基地たるマダンから遮断されてしまつたのである。当時第二十師団はフィッシュハーフェン地区よりシオ地区に退却中であり、第五十一師団主力は未だキアリ地区においてマダン方面に対する撤退を準備中であつた。又軍司令官は作戦指導のためシオ地区にあつた。

この新たな敵に対し我が陸海軍航空は有利な攻撃を為し得る戦力を有しなかつた。又西方のマダン地区には直ちに地上攻撃を行い得る兵力の余裕もなかつた。東方に孤立した第二十師団及び第五十一師団に対しては先ず何よりも補給を維持することが必要であるが、到底確算はなかつた。ここにおいて第八方面軍司令官は即日発令して第十八軍のシオ方面ダムビル西岸要域の確保任務を解き、その兵力をマダン附近に転進せしめる如く処置した。

又第十八軍司令官は両兵団をして、グンビ附近の敵を迂回し、フ

イニステル山系北斜面の密林地帯を通過してマダン地区に転進せしめた。サラワケット越え転進及びフィンシュハーフェン作戦によつて疲労その極に達していた陸海軍將兵約一三、〇〇〇は患者約二、〇〇〇を離しつつ一月中旬末、約三〇〇〇の苦難の転進の途に就いた。これに対して、南東方面艦隊はラバウルから潜水艦により危険を冒して糧食を輸送して転進を援助した。第四航空軍まだ糧食を空中投下して餓とした。これらにより転進將兵はガリ出発時平均約三立の米の補給を受けた。しかし行程約三〇〇〇の転進には少なくとも一カ月を要する見込みであつた。

〔マダン地区第一線となる〕 シオ地区の失陥により、第十八軍にとつては、今やマダン地区が第一線となつた。十二月以来マダン地区に対する空襲は激化し、敵魚雷艇の活動も活発となつてゐた。グンビ上陸以後、敵海軍はマダンに対し艦砲射撃さえ行い上陸企圖もあるやに判断された。よつて第十八軍は第四十一師団（師団長真野五郎中将）のウェワクよりの前進を促進しマダン地区の防備を速急に固めしめた。

一方マダン地区は他の二つの使命を果さなければならなかつた。それはマダン南方フィニステル山系の守りとシオ地区から転進する第二十及び第五十一師団等の収容とであつた。しかしこの両目的のために使用可能なのは中井支隊のみであつた。そこで第十八軍は当事フィニステルにおいて濠洲第七師団と対戦中の中井支隊長をしてその兵力の約半部を指揮して急遽ビリアウ方面に転進し、シオ方面よりの転進部隊の収容に任せしめた。中井支隊は直ちに急進して一月中旬グンビ附近の敵に接触し、同月下旬より二月下旬の間数次に亘つて敵と激戦を交えたが悉くこれを破り、敵をしてグンビ附近の橋頭堡内に蟄伏せしめた。

この間フィニステル方面においては濠洲第七師団は一月十九日以来果然攻勢に出て、歡喜岑陣地は遂に敵手に委するの已むなきに至

つたが、歩兵第七十八聯隊長の指揮する同聯隊の約半部の敢闘により後方陣地線を死守して軍全般の作戦を容易ならしめた。ともあれ、昭和十八年九月二十二日フィンシュハーフェン地区に始まつたダムビールの激闘は約四カ月の後シオ及びツルプの失陥を以てその終止符を打ち、一月下旬にはダムビル海峡は完全に敵手に落ちた。

6 マーシャルの失陥とトラツクの無力化

〔マーシャルの防備——空地とも薄弱〕 先にボーゲンビル島の無力化あり、今又ダムビールの失陥あり、国防圏前衛線相次いで崩壊しつつあつた昭和十九年一月末頃、米中部太平洋艦隊はガルバート占領以來約二カ月の沈黙を破つてその猛襲を国防圏前衛線の東翼たるマーシャル群島に加えて来た。

この方面の防備は第四艦隊麾下の第六根拠地隊、第二十二及び第二十四航空戦隊並びに第九五三航空隊がこれに當つてゐた。第二十四航空戦隊及び第九五三航空隊はガルバート作戦に際し、それぞれ千島及び南西方面から転用せられた部隊であるが、その後引き続きマーシャル方面に止まつてゐたのである。第四艦隊はこれら航空部隊の戦力強化を図つたが、前年の十二月五日の空襲によつて一挙に約六五機の被害を受ける等、戦力強化は進んでゐなかつた。一方聯合艦隊としても、敵の主反攻は依然ラバウル方面であるとの判断の下に、敵のマーシャル上陸直前の一月下旬に、とつて置ききの母艦航空部隊の最精鋭約一〇〇機を南東方面に投入したばかりであつた。かくして敵のマーシャル來襲時、早速反撃に使用し得る航空機数は約一〇〇機に過ぎなかつた。

地上防備もまた不十分であつた。第六根拠地隊麾下の警備隊が、クエゼリン、タロア、ウォッジエ、ミレ、エニウエタツク（ブラウン）に各一隊宛配置されていたがこれらの島はガルバートと同様に

地質狭く且つ平低で防禦施設の構築に適しなかつた。昭和十八年十月下旬発令の陸軍の海上機動旅団及び南洋第一乃至第三支隊もこれら諸島に分散配置されたが、その多くは十九年一月中、下旬の間に進出したばかりで地上防備は未だ固まつていなかった。

〔敵の奇襲——時機、地点ともに意外〕 かかる状況のうちに、敵機動部隊は一月三十日早朝突如マーシャル群島に來襲してクエゼリン、ルオット、ウォッジュの我が航空主要基地を攻撃した。ギルバート方面の基地航空部隊もまたこれに呼応して攻撃を強化した。敵の攻撃は三十一日及び二月一日も同様に続けられた。我が航空部隊は全く奇襲を受けて反撃の余裕すらなく、航空機の殆ど全部が地上において破壊され九機のみが辛うじてトラックに退避するに止まつた。敵の主反攻は南東方面であると判断していた聯合艦隊は勿論哨戒不十分の現地部隊も敵の奇襲を受けた恰好となつた。

しかも敵の奇襲は時機についてのみでなかつた。敵のマーシャル上陸は先ず南部マーシャルに対して行われるであろうというのが従来の一致した判断であつたが、敵は上陸地点によつても私の意表を衝き、二月一日朝より猛烈な艦砲射撃の掩護の下に、マーシャルにおける我が心臓部たる北部のクエゼリン及びルオットの両島に対して臆面もなく上陸を開始した。

〔クエゼリン島及びルオットの失陥〕 ルオット島には第二十四航空機隊の司令部があつた。総兵力は約二、九〇〇を算したが、大部は航空隊の人員で地上戦闘兵力としては第六十一警備隊の約四〇〇名がいるに過ぎなかつた。しかし地上戦闘は我が戦闘兵力の如何に関係なく急速に進行し、三十日よりの敵の砲爆撃によつて敵の上陸前既に大部の人員が死傷し防禦施設は破壊され、二月二日敵は易々と同島を占領した。

クエゼリン島には第六根拠地隊司令部及び第六十一警備隊主力その他合計二、七〇〇名の海軍部隊と、陸軍の第一海上機動旅団の一部

及び南洋第一支隊の一部計約一、二〇〇名がおり秋山海軍少将が全般的指揮に當つてゐた。これら守備隊は勇戦して敵の二月一日の上陸は撃退したが、二日の強行上陸は遂に制し切れず爾後は壮烈な地上戦となつた。戦闘は四日まで続いたが同日夕刻頃までには守兵の大部は戦死し、守備戦闘も終りを告げた。

かくして、開戦前から「日本軍の海上決戦の契機は敵のマーシャル來攻時に」として長く研究準備されてきた焦点の要地も大なる抵抗を行ひ得ずして敵手に委してしまつた。

〔トラック空襲——聯合艦隊主力のバラオ退却〕 我がマーシャルの前衛線を殆ど瞬間的に崩壊せしめた敵機動部隊の猛威は矢継ぎ早に絶対国防圏上の要衝たるトラックに加えられた。

トラックは南東方面敵反攻開始以来既に長く聯合艦隊司令部及び水上部隊主力の所在地であつたが、マーシャルの失陥に伴い聯合艦隊司令長官は敵の空襲を予期して、二月十日水上部隊を内地及びパラオ方面に撤退せしめ、自らもまた將旗をバラオに移した。従つて同地区における最高指揮官は自動的に第四艦隊司令長官小林仁中將となつた。

當時トラックには小林中將指揮下の第四艦隊、南西方面艦隊所属の航空兵力及び陸軍第五十二師団主力のほかに、トラックにおいて訓練中の南東方面艦隊所属の航空兵力があり、指揮系統は複雑であつた。而して第四艦隊司令長官が未だ新遷警備署を發令しないうちに、二月十七日早朝敵機動部隊の來襲となつたのである。更に事態を悪くしたのは哨戒不備のために我が方は戦術的奇襲をも受けた結果となり、飛行隊員は当日外出を許されていたことである。

指揮系統の不明確と各部隊の出動準備の不備とは必然的に防衛戦闘に著しい混乱を惹起した。その日トラックには各飛行隊所属の飛行機約一三五機があり、そのうち七〇乃至八〇機は出動可能な状況にあつたのであるが、遑急ははかばかしいかなかつた。十七日の

空襲により我が方の実働可能な飛行機は戦闘機一、艦攻五を残すのみとなった。

敵は翌十八日も空襲を反復するのは艦砲射撃をも実施するに至り、トラック在泊の艦船並びに陸上施設は甚大な損害を被つたが、兩日損害の累計は次の通りであつた。

艦 艇 沈没九隻(約二、四万噸)、損傷九隻(約二、六万噸)

特殊艦船 沈没三隻(約二、二万噸)

輸送船 沈没三一隻(約一九、一万噸)

飛行機 二七〇機(飛行隊所属以外の二三五機の補充機を含む)

死 傷 約六〇〇

右のほか第五十二師団の第二次輸送隊はトラック西方洋上において攻撃を受け、輸送船二隻沈没、人員一、一〇〇の戦死を生じた。

「ラバウル戦略価値を失う——一機もなし」

トラックの惨害をこの数量的にのみ見ても莫大なものであり、一挙にかくの如き損害を生じたことは従来の数数の戦例にもないことであつたが、それ以上に深刻であつたのはトラックの無力化が他方面に与えた影響である。絶対国防圏上の要衝トラックが今や敵の蹂躪するところとなつたのを知るや、聯合艦隊司令長官は直ちに在ラバウル航空兵力のトラック転用を命じた。かくして南東方面には二十日以後一機の海軍航空機も存在しなくなり、ラバウルはその戦略的威力の大部を喪失した。

〔東條・嶋田両大将の統帥部長親補〕

トラック空襲は又東京にも大きい影響を与えずにはおかなかつた。即ち二月二十一日には東條大将が陸相のまま参謀総長に、又嶋田大将が海軍大臣のまま軍令部総長に親補された。陸軍大臣が同時に参謀総長になつたのは明治十一年参謀本部独立以来最初のことであり、海軍においても同様であつた。

これは今や船舶問題を始めとして政戦略の機微なる節調はあらゆる

先例と議論を超越して軍部大臣と統帥部長との職を同一人を以て行うことが、この非常重大事における最も適当な処置であるとの東條大将自身の固い信念に発したものであつた。

尚これに伴い参謀本部及び軍令部の二次長制がとられた。参謀本部においては従来の次長秦彦三郎中将のほかに新たに後宮淳大将が次長に補せられ、軍令部においては従来の伊藤整一中将のほかに新たに塚原二四三中将が次長に補せられた。

〔ブラウンの失陥〕

トラック空襲の惨害及び影響は前述の通りであるが、この空襲の真の目的はブラウン環礁に対する上陸の準備であつたようである。即ちブラウンは一月三十一日以来殆ど連日敵空母機りの空襲を受けていたが、二月十八日早朝からは敵の艦砲射撃が始まり、約一昼夜の猛砲撃の後、敵は翌十九日エニウエタツク及びメリレンの両島に上陸を開始した。

当時ブラウン環礁には第六十八警備隊を基幹とする海軍約二、〇〇〇及び陸軍海上機動第一旅団主力約二、〇〇〇の兵力が配置されており、全般の指揮には西田陸軍少将が當つていた。但し両部隊とも一月末に漸く現地に到着したばかりで防禦施設の見るべきものなく、両島の運命もまた自ら明かであつた。かくして両島は二十四日完全に敵手に歸した。

〔マリアナ空襲——国防圏の要衝危し〕

二月初頭以来マーシャルの占領、トラックの空襲と、次々と成功の勢に乗じた敵機動部隊は更に北上して二月二十三日我が国防圏の要衝マリアナを襲つた。當時マリアナには日本海軍が昭和十八年七月以来各種の不利を忍びながら決戦兵力として整備中の第一航空艦隊(機動基地航空部隊にして司令長官は角田寛治中将)が進出中であつた。即ち当艦隊は整備訓練に約一年を予定されていたが全般の戦況に鑑み二月中旬以降逐次マリアナ方面基地に進出せしめられつつあつたのである。

敵の来襲に対し我が艦隊は八三機を以て反撃を試みたが戦果の見

るべきものなく、却つて空中及び地上において九四機を失つた。整備途上にあつた第一航空艦隊がその緒戦において相当な損害を受けたことは、その不幸なる前途を暗示するかの如くであつた。しかしながら、それにもまして重大であつたのは、中部太平洋方面において、二月下旬早くも敵の触手が我が絶対国防圈上の要衝にまで伸びたという事実であつた。

7 ラバウルの孤立

〔前衛線確保の最後の努力〕 トラック、マリアナが次々に敵機動部隊の猛威に曝されている頃、南東方面においては前衛線の最後線としてラバウル、アドミラルティ諸島及びマダンを結ぶ線の確保のために最後の努力が傾けられつつあつた。

トラック空襲により在ラバウル海軍航空兵力皆無となるや、第八方面軍司令官は、当時西部ニューブリテンより中部ニューブリテンに転進中であつた第十七師団をして一挙にラバウルに向つて転進を続行せしめ、第三十八師団と共にラバウル防衛に当らしめる如く処置した。

前衛線の西翼たる東部ニューギニア方面の指導については、第八方面軍司令官は、第十八軍をして依然ラバウル方面と密接なる有機的関連を保持せしめる主義により、概ねマダン附近以西東部ニューギニアの要域において来攻する敵を撃破して持久せしめる如く二月十七日発令した。

東部ニューギニアの現地においては、一月中旬キアリ地区を発した第二十及び第五十一師団並びに第七根拠地隊は約一カ月に亘る難行軍の後、二月中旬頃中井支隊の収容線内に到着しつつあつた。これら転進部隊の大部分は二月末までに機動を終り、到着人員約九、三〇〇を算したが、出発時の人員約一三、〇〇〇に対して三、七〇〇の損耗であつた。この損耗はサラワケット越え転進の損耗と共にニ

ューギニアにおける長途の機動が如何に高価な代償を要するものであるかの顕著な例であつた。

しかもこれら転進部隊を迎えたマダン地区は既に敵上陸の脅威に曝されていた。第十八軍司令官はこれら転進部隊をしてマダンを越えて引続き更に西方に機動せしめ第五十一師団をしてウェワクにおいて、又第二十師団をしてハンサにおいて、それぞれ戦力の恢復を図らしめつつマダン地区防衛の後方拠点を形成せしめる計画の下に逐次処置するところがあつた。又第十八軍司令官は転進部隊の収容に伴い中井支隊長をして再びフィニステル嶺喜岑方面の作戦を併せ指揮し同方面の急を救わしめると共に第四十一師団をしてマダン及びその西北方の海岸線の防備を固めさせ、ハンサ地区強化と相俟つて着々マダン地区防衛態勢を強化した。

一方第四航空軍はツルブ作戦協力以後戦力著しく低下し、二月初頭よりホルランヂヤ以西地区において戦力の恢復中であつたが、大本営においては東部ニューギニア方面における敵の次期進攻はマダン附近に対して行われる算少からずと判断し、且つ敵を洋上において撃滅するためには航空戦力を集中發揮すること絶対必要なりと認め、一月下旬、南方軍及び第十四軍所属の飛行四箇隊を一時第二方面軍の指揮下に入れ、これを南東方面に推進してマダン地区の作戦に協力せしめる等の処置を採つた。

〔アドミラルティの防備と失陥〕 アドミラルティ群島は早くから良好な艦隊泊地として知られていた、又群島の東端のロスネグロス島の飛行場はラバウルと東部ニューギニア間の中継基地として使用されていたが、今や前衛線の最後線たるラバウルとマダンを繋ぐ重要な線上に立つこととなつた。

第八方面軍は昭和十八年十一月頃以来、これが防備強化の要を認め、十二月に第十八軍の第五十一師団の一部をバラオにおいて再建して派遣する如く処置したが再建用の補充員が海没の悲運にあい、

所期のアドミラルティ強化は実現しなかった。第八方面軍は更にパヲに滞留中の第六師団及び第十七師団の補充員を以て歩砲各一大隊を編成して急送する如く処置したが、これまた敵潜水艦の妨害のため実現せず、ここにおいて已むを得ずニューアイルランド及びラバウルより各約歩兵一大隊を割いて一月末より二月上旬に亘り海軍艦艇によつてロスネグロス島に急送し、昭和十八年四月以来同島にあつた輕重兵第五十一聯隊長江崎中佐の指揮下に入らしめた。南方面艦隊もまた十二月に第八十八警備隊を送り主としてマヌス島ロレンガウ附近の防備に当らしめた。

一方航空協力については、マダン附近の作戦に協力する予定の第二方面軍指揮下の五箇戦隊がアドミラルティの作戦にも協力することと両方面軍間の協定を見、二月下旬頃アドミラルティの防備は不十分ながらも逐次その形を整えつつあつた。

しかるに敵は、この度は大爆撃等の前触れもなく騎兵第一師団の一部を艦艇に搭乗せしめて二月二十九日ロスネグロス島に対して威力搜索の上陸を行わしめた。次いで、我が反撃の微弱なるを知るや、主力を以て船団上陸を開始した。第二方面軍より協力の航空部隊は反撃のため出撃したが、天候の関係で戦果を挙げ得なかつた。

ロスネグロス島の守備に任じていた陸軍守備部隊の全力及び海軍の一部は邀撃に勉めたが力及ばずして遂に敵の上陸を許し、ハイン飛行場はその日のうちに敵手に落ちた。守備部隊は爾後とも再三敵を夜襲したが、いずれも失敗し、三月五日の夜襲を最後として攻撃の力を失ひ、間もなく外部との連絡を絶つた。同島の地上防禦戦闘は三月二十五日頃まで続けられたようであるが、大勢を左右することは出来なかつた。

〔ラバウル孤立す——前衛線完全崩壊〕 アドミラルティの失陥がもたらしたものは南東方面における国防圏前衛線の完全崩壊であり、ラバウルの孤立であつた。

先にトラツクの無力化により同方面よりの支援を絶たれていたラバウルは、今又アドミラルティの失陥によつてニューギニアとの連鎖をも絶たれた。反面敵はアドミラルティの攻略によつてダムピール海峡突破を結実させ、今やニューギニア北岸の如何なる地点にも跳躍的作戦を行い得る立場に立つた。

ここにおいて大本営はニューギニアの第十八軍及び第四航空軍を西部ニューギニア方面に転用して同方面の作戦に参加せしめるに決し、三月十四日発令して、両軍を三月二十五日以後第二方面軍の隷下に入らしめる如く処置した。この命令と共に発令された第八方面軍の新任務は、海軍と協同し、所在戦力を以てラバウル方面要域を確保し以て濠北より中部太平洋に亘る作戦を容易ならしめるにあつた。

かくしてラバウル地区においては連日の空襲下終戦に至るまでの現地自活と地下要塞化とによる長期持久戦の準備が始まつた。ラバウル及びニューアイルランド島地区に孤立した兵力は陸軍（第十七軍及び第三十八師団基幹）約七万五千（労務者を含む）海軍約四万であつた。

想えば南東方面作戦は先ず海軍によつて開始され、次いで陸軍これに参加し、昭和十八年八月頃までは日米の主戦場として、又爾後は絶対国防圏の前衛線として、政府及び大本営の戦争努力の大部が傾注されまつたところである。

即ち海軍は聯合艦隊の主力をこの作戦に使用した。艦艇の大部がこの方面の戦闘に従事し、使用航空機は約六、〇〇〇機以上、作戦参加総人員約一〇万を算した。陸軍においても、作戦指導の重点はこの方面に指向せられ、現実の使用兵力も約二七万、飛行機約二、〇〇〇機を算した。これらの航空機は陸海軍とも生産機の大部を次々に注入されたものであつた。又船舶においても、民需用の船舶を削限しつつこの方面の作戦のために軍用船舶の大部が使用された。かくの如き努力に拘らずこの方面作戦は、人員約一三万（陸軍約

九万、海軍約四万、但し昭和十九年二月頃まで）艦艇約七〇隻（二万噸）、船舶一二五隻（約三万噸）、飛行機約八、〇〇〇機（陸海軍とも投入機の殆ど全部）の喪失を以て我が敗北裡に終りを告げたのであつた。

〔第十七軍のタロキナ攻撃——最後の一戦〕 昭和十九年三月下旬、南東方面作戦はラバウルの完全孤立と共に終りを告げ、主戦場は後方の絶対国防圏に移りつゝあつた。しかるに国防圏前衛線の作戦が將に終らんとするにあたり、あたかも消えんとする燈火の最後の光の如くこの方面作戦に光明を点じたものは第十七軍主力を以てするタロキナ攻撃であつた。

この攻撃は、よし大勢挽回は不可能なりとも敵に一撃を加えて全局作戦に寄与しなければならぬ、坐して餓死せんよりは戦つて最後を全くするに如かずという第八方面軍司令官の強烈な意志によつて行われたものであつた。即ち当時ボーゲンビル島に対する補給は既に杜絶し所在部隊の現地自活は蓄積糧食不足のため確算がないと認められていた。これより先昭和十八年十一月中旬、第八方面軍が第十七軍をして十分なる準備の後必成を期して攻撃を再行せしむるため上陸初動の攻撃を中止せしめたことは前述の通りである。第十七軍の攻撃準備は、海軍の協力の下に十二月より開始された。攻撃準備の主なるものはタロキナへの兵站線の推進、就中道路の構築及び部隊の訓練であつた。

昭和十九年一月中旬となるやダムビルは既に失陥し、中部太平洋マーシャル方面に対する敵の新攻勢も遠からずと判断されるに至つた。

よつて第八方面軍司令官は、なるべく早期にタロキナ反撃を開始

第四章 絶対国防圏の縦深的強化

し、以て敵をこの方面に吸引するの必要を認め、一月二十一日自らボーゲンビル島に進出して第十七軍に攻撃実施を命じた。

その後二月十五日敵のグリーン島上陸によりボーゲンビル島とラバウル間の大発輪送すら絶たれ攻撃準備に多大の支障があつたのみならず、二月十七日トラック空襲の結果、第十七軍は航空の協力を全く期待し得ないこととなつた。その上二月初頭にはマーシャル失陥し、敵牽制の目的は既に失われたのであるが、第十七軍は敵撃滅の一途に希望を托して鋭意攻撃準備の完成に勉め、三月八日より愈々主力（第六師団全力及び第十七師団の歩兵二大隊基幹）の攻撃を開始した。

第一線部隊は同日黎明重点を中央に保持して一挙に敵陣地に突入し戦況は有利に進展した。しかしながら時日の経過と共に敵は態勢を整えて組織的抵抗を開始するのみならず、戦車及び熾烈な追撃砲火を伴つて逆襲に転ずるに至り、三月十五日攻撃は頓挫した。第十七軍は重点を右翼に変換して力攻これ努めたが戦況毫も進展せず、この間我が損害累加して約七千に達した。二十日頃以後は全く形勢逆転し、かえつて敵のために圧迫される状況となり、攻撃成功の希望は去つた。

三月二十五日、第八方面軍司令官は第十七軍に対し軍主力を以てする攻撃中止の自由を与えた。かくして第十七軍が勝利か然らずんば死かを賭したところのタロキナ攻撃は今一步のところで成功を見ずに終つた。第十七軍は爾後、主力を以てボーゲンビル島南部、東部及び北部を防衛し、自活態勢を整えつつ次期作戦を準備するの態勢に移つた。当時の在ボーゲンビル島兵力は第十七軍約三万二千、第八艦隊約二万であつた。

1 虎号 兵 棋

苦闘に苦闘を重ねた昭和十八年も将に暮れんとする十二月末、大本営陸軍部においては、約一週間に亘り作戦課長服部大佐統裁の下に作戦課の職員を主体とし、省部の関係職員及び大本営海軍部の一部職員を参加せしめ、参謀総長以下臨席の下に兵棋演習を実施した。

それは既に述べたように曩に九月十五日大本営は新作戦方針を採用し、同月末国策として絶対国防圏を決定し、これに基く処置は逐次とられたつたが、爾後長期に亘る作戦指導並びにこれに関する諸施策については、陸軍部の作戦部長及び作戦課長更迭の機会において兵棋により改めて深刻に検討せんとしたものであつた。この兵棋は「虎号兵棋」と呼称された。演習の目的は、主として情勢判断の検討であつて、特に大本営は爾後太平洋方面において如何に作戦を指導すべきか、又中国方面大陸打通作戦を実施するを可とするや否や、及びそれらに関連する諸施策を検討するにあつた。

その結果概ね以下述べるような結論が得られた。

〔敵の反攻作戦線の判断〕 先ず第一に敵情判断は次の如きものであつた。

即ち元来大本営は敵の反攻激化に伴いその反攻作戦線として、次の五つを予想して防衛態勢を整えてきた。

- 一、アリューシャンより千島方面に向ふもの
- 二、中部太平洋より本土又は台湾、フィリッピン方面に向ふもの
- 三、ニューギニア方面より濠北を経てフィリッピンに向ふもの
- 四、海洋方面よりジャワ、スマトラに向ふもの
- 五、ビルマよりマレー、タイ方面に向ふもの

しかるに昭和十八年中期以後の戦局から判断するに、右のうち太平洋よりする米軍の海洋攻勢とビルマ方面よりする英米支連合の大

洋攻勢は十七年夏以来米軍の連続不斷的の進攻によつて、南東方面において敵は既にその初期の戦略的成功を収めた。この方面当初の作戦方式は基地の推進による逐次攻略によるもの即ち概ね基地航空の戦闘機の掩護下にその行動半径の圏内に躍進するものであつたが、昭和十八年十一月のギルバート諸島に対する攻撃以後既に機動艦隊を以てする跳躍による攻勢方式に変化したように思われ、この条件の下において物質力を持つ敵の威力は絶対輕視を許さない。

即ちその躍進距離は我が航空威力が敵機動部隊を制せざる限り、無制限に延伸し得ることとなるので、今後太平洋方面の攻勢は一挙本土に向うか、又は先ずフィリッピン、台湾方面を攻略した後本土方面に向うか、遽かに断定し得ないこととなつた。しかしフィリッピンの戦略的価値の大きいことと本土に対する一挙躍進の困難性により、敵は先ずフィリッピンを恢復して日本と南方とを遮断した

後本土に向う公算が多いであらう。この際千島方面に対しては支作戦若しくは牽制作戦を実施することを当然予期するを要する。

又フィリッピン攻略のため攻勢の主線をマリアナ方面から直路フィリッピン方面に推進するか、ニューギニア、濠北方面から南部フィリッピンに指向するかは不明であるが、作戦の堅実性を求める見地から後者の企図に出る算が大であらう。

ビルマ方面の作戦に関しては、泰国及び仏印が、政略的に我が防衛圏内の弱点を形成しているのと、又この方面の作戦の進捗が直接に重慶軍の反攻力を増大せしめる効果が顯著である等のため、敵としてはビルマに攻勢をとることは極めて有利な策案であると判断せられた。

いづれにするも米軍としては最早欧洲情勢の推移如何に拘らず対日攻勢を強行するものと觀察せられ、決戦的様相を呈する時期は切迫しているものと思われる。

〔我の採るべき方策〕 第二に我が方の採るべき方策として、太平

洋方面の我が作戦指導に關しては次のように結論せられた。

即ち日本軍は防勢のみに終始することなく、いずれかの時期に攻勢に転じなければならない。現状よりすればこの時期の決定は至難であるが、遅くも昭和二十一年には万難を排してこれを可能ならしむる如く、今日よりあらゆる努力を傾注せねばならない。又右の攻勢開始までは、概ね現国防圏を確保するを要し、太平洋の防衛を速かに強化するため、(1)航空要塞の構築と航空兵力の増強 (2)中部太平洋諸島に対する地上兵力の増加と築城の実施 (3)海洋方面に散在する部隊に対する海上補給を完うするための海上護衛の強化と、尖端基地に対する補給要領の改善並びに一般造船量の増加は、特に喫緊の事項とせられた。

しかし大本営としては、この絶対国防圏の破綻を来たす場合をも考慮し、遠からず、陸、海、空の総力を結集してフィリピン方面において決戦を行い、敵の企図を挫折する準備を進めなければならない。その場合には陸海軍航空主力の内線機動の利点を發揮して、強力な航空攻勢をとることが必要である。

而してこの作戦は全局の帰趨を決するが如き決戦となるので南方軍総司令官をしてこれを主宰せしむるを要とし、南東方面以外の全南方地域を同総司令官の作戦地域に包含せしめてその指揮組織を一元化するを適當と認める。即ち南方軍総司令官はフィリピンに転移し速かに全比島の戦備を強化して決戦態勢を整える要がある。又これを併行して大本営は南西諸島、台湾方面、次いで日本本土の戦備を強化することを必要とし、これらは絶大なる努力を以て速かに完遂するを要するものとした。

第三に中国方面大陸打通作戦はこれを發動する必要を認め、処置を進めるための要綱を決定した。

【作戦関連の国内施策——五万機目標】 第四に以上の諸作戦に關連する国内施策としては航空兵力の拡充方策、特に航空機の増産及

び航空要員の急速養成、海上輸送の損害防止対策、電波兵器の技術的解決並びに科学的斬新兵器の考案生産等を以て喫緊を要する重大問題なりとした。しかして飛行機の生産に關しては年産三万五千機のレベルを、五万機目標に改めることとした。

以上が大体虎号兵棋実施の結果に基く綜合判断であつたが、これが具現の方法に關しては爾後各主務機關において至急検討を加えた上これを実行に移し、具体的処置をとることとした。

2 中部太平洋に対する兵力増強

昭和十八年秋南東ラバウル方面における彼我航空兵力の差が次第に大きくなつて來たので、我が海軍は母艦航空兵力をも同方面に増加して戦勢の挽回を図つたが、敵の進攻速度を若干遅延せしめ得たに過ぎなかつた。他方敵はマーシャル方面及びニューギニア方面の反攻を強化し、昭和十九年二月一日マーシャル諸島の中樞基地クエゼリン島に來攻して同島を占領すると共に、二月十七日には初めてトラック諸島に機動部隊を以てする空襲を実施し、我が南東方面作戦の背後を脅威するに至つた。更に二月二十三日にはサイパン、テニアン島方面の初空襲を実施すると共に、三月初頭アドミラルティ諸島をも占領するに至り、敵の進攻速度は次第に増加し、我が絶対国防圏上の要域たる内南洋に対する敵の攻撃は時日の問題となつていたことは既に述べたところである。

【第三十一軍、中部太平洋方面艦隊の新設】 以上の状況に対処するため、昭和十九年初頭、大本営は中部太平洋方面の防衛を更に速かに強化するに決し、逐次処置をとつた。

即ち二月上旬聯合艦隊司令部はパラオに進出して作戦指揮をとるため、昭和十九年七月以來大本営直轄部隊として編成訓練中の第一航空艦隊主力を内南洋及びフィリピン方面に進出待機して聯合艦隊の作戦に協力せしめた。因みに聯合艦隊は、二月上旬その水上

部隊主力の前進根拠地をトラックからパラオに移した。

この航空部隊は三月十五日には聯合艦隊に編入せられ、又ラバウル方面から後退せしめた基地航空部隊を改編して内南洋方面に配置した。

陸軍においては二月十日満洲にある第二十九師団を、二月二十一日新たに編成した第一乃至第八派遣隊をこの方面に派遣して聯合艦隊司令長官の指揮下に入らしめると共に要塞歩兵一二箇及び要塞砲兵、要塞工兵隊各一隊を父島要塞司令官（司令官立花芳夫少将）の隷下に入らしめ、又二月二十五日には以上の中部太平洋方面の全陸軍部隊を統率する第三十一軍が編成せられ、同日同軍の戦闘序列を令し、これまた聯合艦隊司令長官の指揮下に入らしめた。

第三十一軍は軍司令官に陸軍中将小畑英良、軍参謀長に陸軍少将井桁敬治補職せられ、既に派遣せられ又は派遣途中の第二十九、第五十二師団、海上機動第一旅団、南洋第一乃至第五支隊、第一乃至第八派遣隊及び父島要塞部隊等のほか新たに増加された第三十五師団（四月上旬第二軍に転属せられた）及び軍直部隊を以て編組された。その後三月下旬在満の第十四師団を、四月上旬内地にある第四十三師団を同軍の編組に入らしめられた。

大本営は三月四日聯合艦隊司令長官古賀峯一海軍大将の作戦指揮下に中部太平洋方面艦隊（司令長官南雲忠一中将）を編成し中部太平洋方面の防備を担任せしめられたこととなった。方面艦隊は従来同方面において作戦中の第四艦隊と、新たに編成された第十四航空艦隊を基幹とし、又同方面に配置されている陸軍部隊第三十一軍をその指揮下に入らしめられた。第十四航空艦隊は、従来内南洋方面にあつた第十一航空艦隊の航空部隊の大部を基幹として、三月四日編成された部隊であつた。

〔松輪送〕と第三十一軍基幹兵力 昭和十九年三月大本営は「松輪送」と呼ばれる輸送作戦を実施し、海上輸送力の大部をあげて中

部太平洋方面に対する優先輸送を実施し、迅速なる兵力展開を実行した。輸送は敵潜水艦の攻撃により少なからざる損害を蒙つたが、軍の兵力は着々増強され五月下旬における第三十一軍の基幹兵力は左の如くであつた。この兵力中第百九師団は小笠原所在の兵力を改編したものであつた。

第三十一軍司令官

中将 小畑 英良

第三十一軍司令部（サイパン）
トラック地区集団

集団司令官

第五十二師団長 中将 麦倉俊三郎

第五十二師団（トラック）、独立混成第五十一旅団

北部マリアナ地区集団

集団司令官

第四十三師団長 中将 齊藤 義次

第四十三師団（サイパン）、独立混成第四十七旅団

南部マリアナ地区集団

第二十九師団長 中将 高品 彪

第二十九師団（グワム）、独立混成第四十八旅団

小笠原地区集団

第百九師団長 中将 栗林 忠道

第百九師団（硫黄島）
パラオ地区集団

集団司令官

第十四師団長 中将 井上 貞衛

第十四師団（パラオ）、独立混成第四十九旅団、独立混成第五十三旅団

直轄部隊

独立混成第五十旅団、海上機動第一旅団

註 旅団以下の部隊省略

〔陸海軍中央協定〕 昭和十九年三月二十五日、大本営は中部太平

備は陸軍の担任とす

又陸軍部隊に対する陸上補給及小笠原地区集団に対する補給は陸軍の担任とす

3 陸軍部隊の為消費せる軍需品等の陸海軍間に於ける調整に關しては中央部に於て之を行ふものとす

4 中部太平洋方面陸軍部隊に対する補給系統前図の如し

〔第三十一軍の防備強化〕 第三十一軍司令官小畑中将は何時敵の來攻があつても直ちに應じ得る如く諸部隊を神速に展開し、先ず小笠原、マリアナ及びトラック（ポナペを含む以西、メレオンを含む以東）の各地区、次いでパラオ（ヤップ周辺及びアンガウルを含む）地区の防備基礎態勢を速急に確立する方針を以て部署を決定した。

地上防衛の主眼を航空基地群の確保に置き諸隊が逐次展開せば防備築城を拡充して先ず敵上陸部隊を水際において撃滅する態勢を整え、しかる後逐次これを要塞化する。これがため諸隊到着後遅くも一カ月以内に野戦陣地を完成し、爾後なるべく速かに要部を永久築城化し概ね三カ月以内に特火点を骨幹とする堅固なる野戦陣地を完成することとした。

各部隊は軍の方針に従つて築城施設に着手し、軍司令官は自ら各集団の陣地を視察して直接築城の指導に任じ、すべてが概ね計画通り順調なる進捗を見つゝあつた。

3 北東方面の戦備強化

既述の如く昭和十八年八月初頭アリュンシャン所在の全陸海軍を撤退し、北東防衛の第一線は千島に転移した。八月十七日大本営は北方軍司令官隷下の千島方面部隊を増強改編して北千島に千島第一守備隊（歩兵九箇大隊基幹）中千島に同第二守備隊（歩兵一箇大隊基幹）南千島に同第三守備隊（歩兵一箇大隊基幹）を配置し、九月

下旬これを完了した。米空軍は八月下旬既にアッツ基地を概成したものの如く占守島幌筵に対する空襲を開始した。

大本営は同年九月末の新作戦方針の採用に關連して速かに北東方面の戦備を強化するに決定し、昭和十九年一月以降千島方面に対する兵力、軍需品の応急輸送を実施した。即ち北千島南部地区に千島第一集団（歩兵二箇大隊基幹）を、中千島に第四十二師団（師団長寺倉正三中将）を、又南千島に独立守備歩兵大隊その他を合せ歩兵四箇大隊基幹の部隊を推進した。三月には第三十警備隊を樺太に、第三十一、第三十二警備隊を北海道東部地区に配置し、又第七師団を動員してこれまた東部北海道に推進せしめられた。

〔新統帥組織と新作戦任務〕 大本営は北東方面防衛強化に關する統帥組織を検討の結果、北方軍を第五方面軍に改め、東部軍との防衛担任地境を概ね津軽海峡とすることに變更し、又千島方面防衛のため第二十七軍司令部を新設し、第一飛行師団と共に第五方面軍司令官の隷下に入らしめることとし、三月十六日第五方面軍、第二十七軍の戦闘序列を下令した。同日第五方面軍司令官に下達せられた大本営命令の要旨は次の如くであつた。

一、北東方面に対する大本営の企図は敵の侵攻企図を破摧して帝國本土の防衛を完うし且ソ國に対しては極力戦争の発生を防止するに在り

二、第五方面軍司令官は海軍と協同し速に作戦準備を強化し敵の侵攻企図を破摧して北東方面帝國本土の防衛に任ずべし

三、第五方面軍司令官はソ國に對し所要の作戦準備を実施すべし
四、第五方面軍の作戦地域と防衛総司令官の防衛担任地域との境界は津軽海峡と同海峽及青森県に於ける津軽要塞地帯は第五方面軍に屬す

五、第五方面軍司令官は其の隷下及指揮下部隊を所要に應じ防衛総司令官の防衛担任地域内に位置せしむることを得

六、細項に関しては參謀総長をして指示せしむ

〔第五方面軍の兵力及び配備〕その後留守第七師団を第七十七師団に、北千島の部隊を第九十一師団に、南千島の部隊を独立混成第四十三旅団及び独立混成第八聯隊にそれぞれ改編し、千島に海上機動第三、第四旅団を新設した。五月下旬の配備の概要は左の如くであつた。

第五方面軍司令官

陸軍中将 樋口季一郎

第五方面軍司令官（札幌）

第二十七軍（司令部択捉）

第二十七軍司令官

陸軍中将 寺倉 正三

第四十二師団（中千島）

（師団長佐野虎太中将）

第九十一師団（北千島）

（師団長堤不來貫中将）

独立混成第四十三旅団（南千島）

海上機動第三旅団（北千島）

海上機動第四旅団（南千島）

第七師団（北海道東部）

（師団長鯉登行一中将）

第七十七師団（北海道西部）

（師団長落合忠吉中将）

樺太混成旅団

第一飛行師団（全域）（師団長原田宇一郎中将）

註 聯隊以下の部隊省略

五月下旬第一飛行師団は戦闘約五〇機、偵察二四機、軽爆約二〇機、重爆約五〇機、襲撃三五機計約一八〇機の兵力を以て北海道、千島、樺太に展開し、基地約一六箇所の設定を完了し、更に約二四箇所の基地を設定中であつた。

〔北海道決戦思想〕その後七月上旬サイパンの失陥（後述）によつて本土決戦の可能性増大すると共に大本営は更に防衛力の増強を図り、七月十二日には留守第七師団を新設し、且つこれを留守部隊としてよりは寧ろ作戰部隊として使用し得る如く準備せしめ、又南

千島の部隊を改編して独立混成第六十九旅団を新設した。

この頃北東方面防衛に関する中央及び方面軍の思想は北海道本島の防衛を主眼とすることに變化し、千島、樺太は現在兵力を以て要域を確保せしめ本島において決戦を行うことを予期するに至つた。北海道本島において使用可能な兵力としては第七、第七十七師団、留守第七師団、第一飛行師団とし樺太兵団の主力及び南千島の兵力の一部をも北海道に抽出転用することを予定し、弘前にある第四十七師団の作戰参加をも大本営の内連絡によつて胸算していた。

4 台湾及び南西諸島の戦備強化

昭和十八年末頃から十九年初頭に亘る太平洋方面の情勢によつて我が本土及び南方地域は東方から敵の脅威を受けることになつた。大本営は本土と南方との連絡拠点の地位にある台湾及び南西諸島を速かに強化する必要を認め、昭和十九年三月二十二日台湾軍（軍司令官安藤利吉中将）の戦闘序列を下令して作戰軍的性格を附与し、南西諸島に大本営直轄の第三十二軍（軍司令官渡辺正夫中将）を新設した。当時台湾軍の兵力は第四十八師団の各補充隊と澎湖島、基隆及び高雄の各要塞部隊とを主体とするに過ぎないもので又新設第三十二軍の兵力は奄美大島、中城湾及び船浮の各要塞部隊に過ぎなかつた。

〔十号作戰準備——航空作戰の基盤造成〕同日大本営は台湾軍及び第三十二軍に作戰任務を与へ応急作戰準備を実施せしめることとした。この作戰準備を「十号作戰準備」と呼称した。三月二十二日大本営が下達した命令においては「台湾軍及第三十二軍は海軍と協同し速に作戰準備を強化して台湾及南西諸島の防衛に任ず」べき任務を与へ、各軍の作戰地域の境界を左の如く示した。

防衛総司令官の防衛担任地域と第三十二軍間 北緯三〇度一〇分
第三十二軍、台湾軍間 東經一二二度三〇分

台湾軍、第十四軍團 北緯二〇度一〇分
 大本營は右命令に關して「十号作戰準備要綱」を指示した。その
 要旨は次のようであつた。

第一方 針

台湾及第三十二軍の実施する作戰準備は防衛と本土、南方圈間の
 交通確保とを目的とし先づ敵の奇襲に備うると共に情勢の変化に
 方り敵の攻略企圖を破摧し得るの態勢を整ふ

本作戰準備は航空作戰準備を最重要点とし爾他の事項は之に従属す
 るものとし敵の奇襲対応の処置は速かに之を整へ全般的作戰準備
 は昭和十九年七月を目途として之を概成す

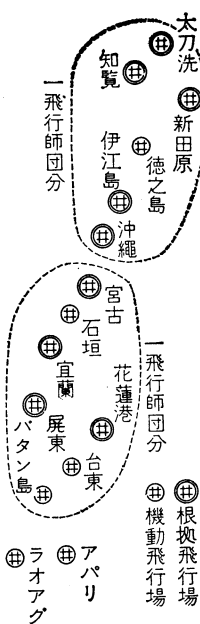
第二 要 領

一、航空作戰準備

1 台湾東岸地区より南西諸島に亘り數箇の航空基地（一基地
 は極力集約せる數箇の飛行場を以て編成す）を造成配置し之
 を基盤とする航空作戰の遂行を容易ならしむるものとし作戰
 準備の規模は南西諸島、台湾東部（八重山列島地区を含む）
 各々約一飛行師団の展開及作戰を可能ならしむるを目的とす

2 航空基地配置の一案左図の如し

（備考）



3 航空基地の設定は南西諸島に在りては第三十二軍、台湾に
 ありては台湾軍之に任ずるを本則とす

4 航空基地設定に方りては各基地毎に先づ核心飛行場を急速

完成す尚各基地中一飛行場は勉めて滑空機の集結使用を可能
 ならしむる如く施設す

5 航空資材の集積は七月迄に約二飛行師団月分次で約一飛行
 師団月分と予定す

二、地上兵力の運用

1 地上兵力は航空基地の防衛を主とし併せて主要なる艦船泊
 地を掩護する如く配置す

2 使用兵力を左の如く予定す

南西諸島方面に混成旅団三箇、高射砲聯隊一箇 台湾方面に
 師団、混成旅団各一箇

3 速かに大東島地区に一部の兵力を派遣し海軍の防衛及飛行
 場整備に協力すると共に適時、バタン島に一部の兵力を派遣し
 之を防衛す

〔圖期的戦備強化——敵の攻略目標？〕 台湾及び第三十二軍は右
 要綱に基き戦備強化を発足した。従来無防備に近い状態にあつたこ
 の地域としては、辛うじて敵の奇襲に対応し得る措置をとり得るこ
 ととなつたが、本要綱の主眼とする航空基地の強化が主となり地上
 作戰準備には多くを期待し得ない状況であつた。

六月に至りサイパンに敵来攻し、次いで聯合艦隊の「あ」号作戦
 失敗（後述）に帰し、南西諸島及び台湾方面が遽かに敵の次期攻略
 目標たるの公算が大となつてきた。ここにおいて大本營は更に画期
 的にこの方面の兵力を増強し、現地軍は一意作戰準備の促進に邁進
 した。

旅団以上の兵力増強の状況は次の如く、七月下旬には著しく強化
 せられることとなつた。

なお第三十二軍は、五月五日西部軍司令官の隷下に入らしめら
 れ、次いで七月十日台湾軍の戦闘序列に編入せられた。

一、第三十二軍

独立混成第四十四旅団（沖繩）（五月三日）
独立混成第四十五旅団（先島）（五月三日）

註 右の混成旅団二箇は、六月末奄美大島附近にて海没し、これを再編して更めて派遣されたものである。

第九師団（沖繩）（師団長原守中将）（六月廿六日）
第二十八師団（宮古島、一部大東島）（師団長榎淵巖一中将）（六月三十日）

第二十四師団（沖繩）（師団長雨宮巽中将）（七月十八日）
第六十二師団（沖繩）（師団長本郷義夫中将）（七月廿四日）

独立混成第六十四旅団（徳之島）（七月二十日）
独立混成第五十九旅団（宮古）（七月廿四日）

独立混成第六十旅団（宮古）（七月廿四日）

二、台湾軍

第五十師団（第四十八師団補充隊の改編）（西海岸）（師団長石本貞直中将）（五月三日）

独立混成第四十六旅団（花蓮港台東地区）（五月三日）
第六十八旅団（新竹附近）（六月廿六日）

第六十六師団（独混第四十六旅団の改編）（東海岸）（師団長北川一夫中将）（七月二十日）

第八飛行師団（師団長山本建児中将）（六月十日）
第二十五飛行団（飛行第三、第二十、第六十七戦隊）

飛行第十四、第二十九戦隊、第八飛行師団の編合に入る（六月二十六日）

5 南方軍の新態勢

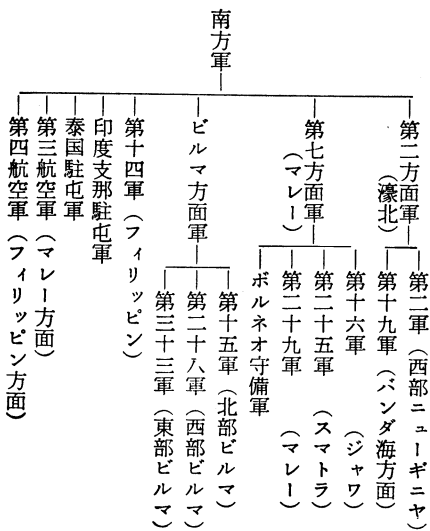
前述した虎号兵棋の結果に基き、南方軍に対し先ず具体化したものは昭和十九年三月二十七日大陸命第九七七号の戦闘序列の下令即ち南方統帥組織の一元化と同日大陸命第九七八号を以て発令せられ

た南方軍総司令官の基本任務の更改であつた。

〔南方軍の一元化〕 南方統帥一元化に関しては、南方軍は新たに第二方面軍（方面軍司令官阿南惟幾大将、新設の第七方面軍、第十四軍（軍司令官黒田重徳中将）及び第四航空軍（軍司令官寺本熊市中将）をその戦闘序列に編入せしめられた。これと同時に飯村穰中将が総参謀長に補職せられ、南方軍参謀部の陣容は一新された。

新設の第七方面軍司令部はシンガポールに位置して、マレー、スマトラ、ジャワ及びボルネオを統轄することとなり、第二十九軍、第二十五軍、第十六軍及びボルネオ守備軍がその戦闘序列に編入され、方面軍司令官には土肥原賢二大将、同参謀長に清水規矩中将（六月以降綾部橋樹中将）が補職された。

かくて南方軍は南東方面以外の南方全域を統轄することとなつた。その統帥組織の概要左表の通りである。



〔南方軍基本任務の更改〕 又南方軍の基本任務更改に関する大陸命第九七八号の要旨は次の如くであつた。

一、大本營の企図は大東亜戦争完遂の爲敵の反攻に對し南方要域及中北部太平洋方面要域を確保すると共に極力敵戦力を撃破し以て其繼戦企図を破擯するに在り

又各種の手段を尽して重慶政權の破擯衰亡を期す

二、南方軍總司令官は海軍と協同し速に戦備を増強し左記に準拠して南方要域の安定確保に任ずべし

1 来攻する敵を撃破してアンダマン、ニコバル諸島、マレー、スマトラ、ジャワ、ボルネオ及婆羅洲方面要域を又ビルマ、泰、印度支那及びフィリッピンに協力して之等を安定確保す

2 印度、支那、婆羅洲及ニューギニア方面に對し適時航空進攻作戰を実施し敵を撃破す

奥地に對する地上進攻作戰に關しては別命に依る

3 情勢の推移に即應する爲各般に亘る現地自活の態勢を強化す

4 重要資源要域の防衛態勢を強化す

5 軍政の迅速なる滲透を図る

6 海上交通保護に關し爲し得る限り海軍と協力す

三、南方軍と第八方面軍との作戰地境はニューギニア及びビスマルク群島方面に於ける東經一四七度の線（アドミラルティ群島は第八方面軍に含む）南方軍と台灣軍との作戰地境は北緯二〇度一〇分の線とす 又パラオ諸島は第三十一軍作戰地域に、セントアデレウ諸島は南方軍作戰地域に之を含む

四、南方軍總司令官は大陸命第九百二十一号に基く現任務（筆者註、支那派遣軍總司令官の行ふ湘桂作戰に協力する任務）を又大陸命第九百六十四号に基く第二方面軍司令官の現任務（筆者

註、第二方面軍司令官の基本任務）を統行（繼承）すべし

五、南方軍總司令官は所要に應じ第八方面軍の兵站を援助すべし

六、南方軍總司令官は其隸下及指揮下部隊を所要に應じ支那派遣軍及台灣軍作戰地域に位置せしむることを得

七、細項に關しては參謀總長をして指示せしむ

〔決戦構想——尚武の佳節に会同開示〕 ここにおいて南方軍は四月十五日所命の如く新統帥を發動し、各軍及び直轄兵团等に對し作戰企図の準拠を示して基本任務を附与し、その他現任務の統行を命令した。

次いで南方軍は新作戦計畫を完成し、五月五日尚武の佳日をとし方面軍司令官及び直轄軍司令官をシンガポールに会同し、總司令官寺内元帥は毅然として「國家存亡の懸る所愈々軍の真姿顯現、威徳の發揚に邁進すべき」旨を訓示すると共に、決戦企図の徹底を期するところがあつた。當時開示せる南方軍作戰計畫大綱の要旨は次の通りである。

第一方 針

南方軍は海軍と協同し敵を撃破して南方要域を安定確保し以て敵の繼戦企図を破擯す

之が爲特に速かに戦備を増強し決勝態勢を整へ全域に亘る航空機動及集結運用の態勢を整備す

第二方 略

一、緬甸要域、アンダマン、ニコバル、スマトラ、ジャワ、婆羅洲、比島を以て本防禦線となし此等諸地域並に印度支那、泰を確保しつつ四角要塞及比島、緬甸及びベンガル灣正面並にパレンバン地区に於て反撃決戦を指導す

航空戦力の充実を待ち一般攻勢作戰に轉移す（第三期）其の時機は明年と予定し之が策案に關しては追て定む

二、主作戰正面は太平洋正面、緬甸及ベンガル灣正面とし主決戦

正面は比島地域となす又バレンバン地区の防塞は絶対とす
 之が為四角要塞及緬甸要域並にバレンバン地区に決戦支撐を構
 成し且比島地域を主決戦地帯として編成す何れも航空の運用就
 中空地一体綜合戦力の發揮並に海軍との協同を重視す

三、作戦の指導は常に主動の地位に立ち自主積極特に先制意表の
 方策に出で奇正の機略を併せ行ふ

四、速かに緬甸作戦を終結し先づ年内に亘り太平洋正面反撃決戦
 を指導し（第一期）概ね年末以降東西両正面の反撃決戦を指導
 す（第二期）此の間一部を以て支那及濠洲方面に備ふると共に
 泰、印度支那及び比島地域の安定を確保す

戦備の強化促進は情勢の進展就中右反撃決戦指導の緩急に即応
 せしむ

五、各方面軍及第十四軍は夫々來攻する敵を自ら擊破するものと
 し総軍は航空兵力の集結運用並に總予備兵力の戰略機動に依り
 決戦正面に戦力の重点を形成す

泰及印度支那駐屯軍は該地域の安定を確保するものとし情勢に
 依り所要の兵力を此に増加運用することあり

六、航空兵力は戦力の充實増強を図りつつ重点を反撃決戦に集結
 運用す而して之が運用の緩急順位は、太平洋正面、ベンガル湾
 及緬甸正面の順序とし又バレンバン地区防衛のためには一部の
 兵力を常置し随時所要の兵力を集結す

特に右に應ずる航空機動及集結運用の態勢を急速に整備す
 七、決戦手段として左の諸件を強化促進す

イ 航空戦力の充備並に航空機動及集結運用の態勢整備

ロ 空輸戰略機動力の整備

ハ 海上戰略機動力の整備

ニ 戰略幹線鐵道の強化整備

ホ 各軍のため所要機動力の附与整備

へ 泊地攻撃兵団の整備

ト 決戦資材の重点運用の準備

八、帝国所要の物動物資の取得及運送を確保すると共に自ら後方
 断絶に備へ極力各地域の自活能力を向上し速かに南方要域を一
 環とする自活態勢を整へ補給及其の輸送力並に交通幹線を確保
 し長期克く独立を以て作戦を遂行す

特に現地自活の徹底並に船舶の保安培養及戰略鐵道の強化を重
 視す

以上はフィリッピンを以て最終絶対なる総決戦地域とし陸海同時
 同正面作戦、及び航空の徹底的集結運用による空地綜合決戦の指導
 を以てその根本思想となすものであつた。

作戦計画大綱においては、このほかに要域の戰略的編成及び第一
 期作戦指導に關し、それぞれ明示するところがあつた。就中フィリ
 ッピンに關しては「絶対国防圈背後の鎖鑰たると共に、主決戦地域
 となし、絶対擊滅の戦備を完成す 特に海軍との協同を重視す 基
 本兵力は七師団（内混成旅団の改編四箇）と予定し、航空基地整備
 の基準は南部中部及び北部比島各二飛行師団とす 軍需集積の基準
 は地上一會戰半、常統六ヶ月分 航空燃彈六師団二ヶ月分を目標と
 す」と規定したが、右基本兵力は従來における大本營企画の範圍に
 準拠したものであり、上述の如きフィリッピンの絶対的なる総決戦
 の企画に対しては甚だ不十分なものであつた。

そこで南方軍は當時本會同に参加した秦參謀次長に對し、基本兵
 力を正規一五箇師団に増強すると共に航空を全面的に充實せられる
 か、然らずんば一箇師団同時輸送の船舶と可能最大限の空輸能力と
 を南方軍に与え、以て南方軍の前記決戦戰略の遂行を容易ならしめ
 られたき旨要望するところがあつたが、大本營は全般の情勢上南方
 軍をして満足せしめ得るが如き措置をとることが出来なかつた。

〔總司令部のマニラ進出〕 南方軍總司令部はその主体を挙げて、

五月上、中旬、戦闘司令所をマニラに推進し、東面して決戦準備を整えるの態勢に移った。

大本営は総司令部移駐の必要を認めたが、当初総司令官は総司令部の位置は依然昭南に置くを可とし三月中旬参謀総長に意見を具申した。その後この点に関し若干の経緯はあつたが、新統帥の発動と共に渋滞なく実現することとなつた。

6 十一号作戦準備

昭和十九年三月南方統帥一元化にあたり、フィリピン方面又はフィリピン、濠北方面に予期する次期決戦においては航空運用を特に重視し、南方軍総司令部自ら航空統轄司令部たるの性格を以てこれが運用に当ることとなつた。航空兵力としてはマレー方面の第三航空軍（第五、第九飛行師団基幹）とフィリピン方面の第四航空軍（第七飛行師団基幹）とであつた。

大本営はフィリピン方面に航空兵力の徹底的増強を企図し、五月中旬在満の第二、第四飛行師団を転用し、第二飛行師団を南方軍直轄とし第四飛行師団を第四航空軍の編合に入らしめた。この兩飛行師団を転用するにあつてはフィリピン方面決戦を重視して満洲より徹底して航空兵力を抽出するの主義を採り、又同時に兩師団の編合を改め、第二飛行師団に骨幹飛行部隊の大部を編合して南方軍の戦略打撃兵団となし、第四飛行師団を以てフィリピンにおける基地整備主担任兵団とした。

〔大本営の指示——比島大航空要塞化〕 即ちフィリピンにおけるこの頃の作戦準備においてはかかる航空作戦準備を中核として地上、海上の計画を進めることとし、これを「十一号作戦準備」と呼称した。大本営はこの作戦準備の準拠として三月二十七日大陸指を以て指示した。その要旨は次の如くである。

南方軍総司令官は戦備強化及作戦遂行の爲特に左記要項の達成に

勉むるものとす

一、速に航空戦備を促進し特に航空兵力の活発なる集中使用に必要なる態勢を整ふ

右航空戦備は本年七月頃迄に約四飛行師団又本年末頃迄に約第六飛行師団の活発なる運用に應ずるものを完整す

二、太平洋方面戦局の変転に対処し且圈内戦備の現況に鑑み概ね本年七月頃を目途として特に比島及濠北方面要域の戦備を促進強化す

右に基く第十四軍の航空基地整備要領は左の如くであつた。

一、飛行場の設定

数箇の飛行場群よりなる航空基地をマニラ、クラーク、リバ、バゴロド、レイテ、マライバライ及ダバオに設定する

右の外ルソン島に一〇箇所、ビサヤ地方に三箇所、ミンダナオ地方に四箇所、パラワン島に一箇所の飛行場を設定する

二、燃料、彈薬、資材の集積整備

航空彈薬戦闘四飛行団、爆撃二飛行団三ヶ月分、航空燃料三万軒を集積するものとし昭和十九年中期までに終了する

三、修理廠、補給廠の設置充実、航空関係地上部隊の充実、対空部隊の充実（省略）

これより先昭和十八年秋大本営はフィリピンを以て南方全地域に対する大兵站基地たらしむべく計画を進め、十月これに関し第十四軍司令官に指示を与え補給体系、海運地施設設定基準、大本営直轄軍需品集積計画、患者収容施設設定基準を示して昭和十九年中期までに作戦根拠の造成を命じていた。十一号戦備の実施にあつてはこの計画を更に拡充した。

〔作戦準備実施の状況〕 第十四軍隷下の地上兵力は昭和十九年初頭においては第十六師団、独立混成第三十乃至第三十三旅団を基幹とするものであつたが、五月以降旅団以上の部隊は左の如く増加せ

られた。このうち旅団改編による師団の編制、装備は極めて不十分なものであつた。

五月 第三十師団 (師団長 両角業作中将)

六月 第百師団 (独混第三十旅団の改編)

(師団長 原田次郎中将)

第百二師団 (独混第三十一旅団の改編)

(師団長 福栄真平中将)

第百三師団 (独混第三十二旅団の改編)

(師団長 村岡 豊中将)

第百五師団 (独混第三十三旅団の改編)

(師団長 津田美武中将)

七月 独混第五十三乃至第五十五旅団

(師団長 佐伯文郎中将)

独混第五十八、第六十一旅団

抑々フィリッピンの東面防衛は南北蜿蜒一八〇〇軒に及び、多数

の島嶼よりなり、航空作戦に重点を置かなければ作戦は成立しないこととなるが、他面我が航空兵力の劣勢は結局地上、海上作戦を惹起することとなる。第十四軍は当初地上部隊の大部を以て航空基地の設定に協力せしめたが、後に上述の理由により空地総合決戦の見地より航空基地の整備は努めて現地人の徴傭等によることとし、地上作戦準備をも同時に実施した。

五月中旬には南方軍総司令官マニラに進出し作戦準備一段の進展を見ることとなつたので、同月中、下旬頃大本営は航空基地整備、築城、兵站、教育訓練等の主務者多数を内地からフィリッピンに派遣してこれを援助せしめ特に飛行場整備指導班は一時これを現地軍に配属した。

航空基地の整備は、人夫徴傭の困難、資材の入手難、雨期の到来、対空顧慮等のため進捗必ずしも順調ならず、船舶輸送による兵

力の増強、兵站資材の集積は船舶損耗の激増に基因する輸送力の衰退、匪賊跳梁の激化等により、これまたその成果計画に追隨することが出来ない状況であつた。

南方軍総司令官は五月その作戦計画においてフィリッピンを総決戦地域と決定して第十四軍に対し決戦準備を督励し、従来フィリッピンの既定作戦に没頭してきた同軍を外敵との作戦準備に専念させることとなつたが、時日の関係もあり当初の計画に比し概ね五割程度の戦備にも及ばない状況を以て目標時期たる七月を迎え、新たに計画された捷号作戦準備に継承せらるることとなつた。

7 本土防衛態勢の強化

〔大本営の指導——新統帥組織と任務〕 昭和十九年春太平洋方面戦況の変化に伴い内地防衛態勢の確立が急務となつてきた。大本営は五月五日の命令を以て内地部隊の統帥組織を次のように改訂した。

即ち従来内地の各軍は天皇に直隸しており、防衛総司令官は防衛に關してのみこれを指揮することに規定せられていた。しかるに今回の改正においては内地地上軍の主体たる東部軍、中部軍、西部軍及び内地防衛航空部隊たる第十飛行師団(東京)第十八飛行団(大阪)第十九飛行団(北九州)を新たに防衛総司令官の隷下に編入し、又防衛に關し第一航空軍司令官これを指揮し、朝鮮の防衛に關しては依然朝鮮軍司令官が指揮することとした。又従来大本営直轄であつた沖縄の第三十二軍を西部軍司令官の隷下に入らしめた。その状況左図の通りである。

防衛総司令官 (東久迩宮稔彦王大将)

—東部軍(軍司令官 藤江惠輔大将)

—中部軍(軍司令官 飯田祥二郎中将)

—西部軍(軍司令官 下村定中将)——第三十二軍

第十飛行師団（飛行師団長 吉田喜八郎少将）

——第十八飛行団（飛行団長 北島熊男少将）

——第十九飛行団（飛行団長 古屋健三少将）

——朝鮮軍（軍司令官 板垣征四郎大将）

——第一航空軍（航空軍司令官 李王垠中将）

註——は隷属関係……は指揮関係を示す

同日右改正に伴い防衛総司令官の任務に関し左の要旨の大本営命令を発令した。

一、大本営は皇土の防衛を強化す

二、防衛総司令官は海軍と協同し速に戦備を強化し左に準拠して皇土の防衛に任ずべし

1 敵の空襲破壊を防衛の第一義として主として本土の要域を掩護す

2 離島及本土沿岸要域の防備を強化し敵の侵攻に方りては機を失せず之を撃擯す

3 海上交通保護に関し為し得る限り海軍に協力す

4 空襲等に伴ふ警備実施の準備に遺憾なからしむ

三、防衛総司令官の防衛担任地域と第五方面軍の作戦地域との境界は津軽海峡とし津軽海峡及青森県に於ける津軽要塞地帯は第五方面軍に属す 防衛総司令官の防衛担任地域と台湾軍の作戦地域との境界は東経百二十二度三十分の線とす

右の命令に関連して、参謀総長は左の要旨の指示を与えた。

一、防空に在りては皇居を始め主として京浜地区次で倉幡地区、各古屋地区、阪神地区の軍事関係施設の掩護を確実ならしむるものとす

二、支那派遣軍総司令官、関東軍総司令官、第五方面軍司令官及台湾軍司令官は防衛情報速報の速報に関し密に防衛総司令官に連絡するものとす

三、警備は敵の各種企図に対し主要なる軍事上の要点又は行動を掩護するを主とし併せて空襲等に伴ふ民心の動揺防止に協力するものとす

四、防衛状況上緊急を要するもの及輕易なるものの外配備變更に關しては予め参謀総長の認可を受けるものとす

五、防衛総司令官は国土防衛作戦計画の大綱を成るべく速に、作戦計画を六月十五日迄に提出するものとす

〔防衛総司令部の防衛作戦要綱〕 新たに本土防衛の任務を受けた防衛総司令官は直ちに防衛作戦要綱を立案し、各軍の作戦準備並びに作戦実施の憑拠とした。この要綱においては敵の空襲破壊を防衛の第一義として航空に重点を置き、速かに防空作戦準備を完整すること、先ず離島の戦備を強化し敵の奇襲攻撃に備えつつ成るべく速かに本土要域における遡撃態勢を整えること及び敵の侵襲にあつては機を失せず空地の戦力就中航空戦力を極度に集中發揮してこれを撃擯することの方針の下に各軍の任務を明かにした。

〔各国の作戦準備〕 爾後各軍の作戦準備は左の如く行われた。

一、東部軍はその指揮下の航空部隊（第十飛行師団を骨幹とし臨機防空に任ずるものを含む飛行機約四〇〇機）及び高射砲部隊（東部高射砲集団、高射砲約三〇〇門）を以て皇居を始め主として京浜地区に於ける戦政略及び生産中樞の掩護に任ずる 又立川、太田、常陸、釜石等の一部の兵力を配置してこれ等地域の生産施設を掩護する

沿岸防禦としては先づ速かに伊豆諸島の戦備を強化し次で八戸平地、仙台平地、水戸平地、房総半島、相模平地附近の要域の戦備を強化し伊豆諸島、八戸平地、房総地区に重点を置く

二、中部軍はその指揮下の航空部隊（第十八飛行団を骨幹とし臨機防空に任ずるものを含む飛行機約二〇〇機）及び高射砲部隊（中部高射砲集団、高射砲約一五〇門）を以て主として名古屋

屋、広畑、京都等の地域の生産施設を掩護する

沿岸防禦としては浜松平地、豊橋平地、紀伊半島、高知平地附近要域の戦備を強化し浜松平地に重点を置く。又随時一箇師団を他に転用し得る如く準備する

三、西部軍はその指揮下の航空部隊（第十九飛行団を骨幹とし臨機防空に任ずるものを含み飛行機約一五〇機）及び高射砲部隊（西部高射砲集団、高射砲約一五〇門）を以て主として倉幡地区（関岡を含む）に於ける重要生産施設の掩護に任ずる。又長崎、福岡、大牟田等に一部の兵力を配置してこれ等地域の生産施設を掩護する

沿岸防禦としては先づ速かに南西諸島の戦備を強化し、次で種子島、宮崎平地、鹿屋平地、薩摩半島附近要域の戦備を強化し南西諸島、宮崎平地に重点を置く。又南西諸島に敵進攻せば一箇師団を増援し得る如く準備する

四、朝鮮軍は飛行機約二〇機、高射砲約五〇門の防空兵力を以て主として釜山、京城地区の軍事施設、平壤、水豊等の生産施設を掩護する

沿岸防禦としては離島並に元山以北の日本海沿岸地域に於ける戦備を強化する

第五章 「あ」号作戦計画

1 決戦の機迫る

〔四月における海軍の態勢〕 パラオよりフィリピンに向う移動途中における聯合艦隊司令部主要幹部の殉職（後述）後、五月初頭新司令長官豊田副武大将補職まで、聯合艦隊の指揮は在スラバヤの南西方面艦隊司令長官高須四郎中将が臨時にとつていた。

又朝鮮を縦貫する主要交通線の掩護に遺憾なからしめる

五、第一航空軍は海軍と密に協同し敵機動部隊の来襲に方つては第五飛行団等を併せ指揮して敵航空母艦を、敵の侵攻に方つては主として敵輸送船を撃滅する

〔防空作戦準備と沿岸防禦施設〕 防空に関する作戦準備としては基地施設の増強、兵器器材の改良、電波警戒機の配置、通信施設その他装備の改善、支那派遣軍、関東軍との連繫措置等を周密ならしめ、又訓練の向上を図つた。航空部隊の訓練においては高々度戦闘、夜間戦闘及び対爆戦闘に重点を置き、高射砲部隊の訓練においては特に高々度戦闘のため、測高精度の向上及び有効威力圏の活用に関し訓練の精進を図つた。かくて昭和十七年四月ドワリットル飛行部隊の来襲以来最初の空襲たる、昭和十九年六月十五日夜の空襲——成都方面基地から発進したB二九約一〇〇機の北九州地区来襲——に當つてはその七機を撃墜し、爾後頻度を増加した敵の来襲に對し、戦闘即訓練の主義を以て対処した。

沿岸防禦施設は防禦資材補給の不円滑、民用地使用に関する困難性等種々の障礙に逢着したが、昭和十九年七月頃までに各要域の要點に、野戦陣地を構築することが出来た。

この頃マリアナ、カロリン方面においては、第一航空艦隊が鋭意作戦準備の完成に努めつつあつた。又中部太平洋艦隊は、第四艦隊、第十四航空艦隊（第二十二及び第二十六航空戦隊基幹）及び陸軍の第三十一軍を指揮して中部太平洋方面の防備を固めつつあつた。濠北方面の防備は南西方面艦隊がこれに當つていた。三月一日編成されたところの第一機動艦隊の主力はシンガポール及びリಂಗ

方面において、又その一部は内地において訓練及び次期作戦準備に努めていた。

〔雄〕作戦構想——敵機動部隊急襲企図 一方敵はメジューロ等の前進根拠地を急速に強化中と認められ、遠からざる将来に大規模な攻勢作戦を企図しているものと判断された。かかる情勢に処して日本海軍は、敵反攻の核心たる空母を基幹とする敵機動部隊の撃滅を先決問題となし、かねてからこれが好機を狙いつつあつた。

即ち大本営海軍部は既に早くも三月、敵の来攻に先だち敵機動部隊の主力をその前進根拠地メジューロにおいて先制奇襲すべく「雄」作戦なるものを立案して聯合艦隊司令部と連絡中であつた。その要旨は我が第一機動艦隊及び基地航空部隊の大部約一、〇〇〇機並びに潜水艦部隊を以て、五月上旬又は中旬、東部内地方面より出撃して主として小笠原、マーカス及びウェーキ島方面よりメジューロに進撃するにあつた。しかしこの計画は三月末の聯合艦隊首脳部の遭難により中止の已むきに至つた。

〔五月初頭の敵情判断〕 後述する五月初頭の御前兵棋において軍令部長が説明した敵情判断は概ね次の通りであつた。

敵の対日主作戦は中部太平洋及び南東方面より比島に向ふ進攻作戦で、之により我が防禦線の突破及び我が艦隊の誘出撃滅を図り、更に進んで、中国本土を根拠とする我が本土に対する直接空襲並に本土と南方資源地間の動脈の切断を策し、之によつて我が戦力を枯渇せしめ南方要域を奪回することを企図するであらう。

之が為敵は中部太平洋方面よりする進攻作戦と南東方面よりする進攻作戦との連絡を密にするであらう。既にソロモン方面から進出したハルゼー麾下の南太平洋作戦部隊は濠洲、ニューギニア方面から進出したマッカーサー麾下の軍に合流し最近のホルランデヤ進攻作戦に於ては更にスプランス麾下の中部太平洋作戦部隊も参加してゐるやうである。

敵がニューギニア北岸に地歩を進めるに随ひ、トラック、メレヨン、パラオ等の我が航空基地は敵補給上の障碍となるので、大型機を以てする連続攻撃を強化し或は機動部隊を以てする空襲戦を反復し、之等要地を攻略するか又は無力化する作戦を企図するであらう。

比島に作戦線を指向するに際し之が攻防上最も重要な作戦地区をなす西カロリン就中パラオ、ヤップは敵としては多少の犠牲を払つても奪取の要あるものと思はれ、三月末の敵機動部隊による同地の空襲は我が艦隊の攻撃を企図すると共に之が強行偵察の意図があるであらう。

マリアナ及び小笠原南部地区に対する作戦は我がマーシャル、東カロリン方面の補給路遮断或は直接本土に対する空襲乃至我が艦隊の誘出撃滅を目的として之を企図する算はあるが、その攻略は犠牲が大きく又爾後の確保が容易でないので、我が基地航空兵力を減殺し、その弱化を見た後に於て企図するであらう。

敵は右の主作戦を助成する為又は主作戦の間隙に乗じ北東、印度洋、濠北等の方面に対し支作戦を実施するであらう。

又以上の諸作戦と共に敵は潜水艦、飛行機を以てする交通破壊戦を益々激化し、中国又は前進基地よりする空襲戦、機動艦隊を以てする直接本土空襲作戦等をも企図するであらう。

2 作戦計画

〔御前研究——陸海両次長の応答〕 大本営特に海軍部においては、日本海軍が従来消耗戦によつて戦力逐次に低下し、彼我の戦力比に著しい懸隔を生じて来た今日、敵の反撃を阻止して戦勢を一挙に打開する唯一の方策は、速かに決戦兵力を整備し、これを集中使用して敵攻路部隊に一大決戦を求め、特に敵機動部隊を撃滅するにありとなし、四月上旬以来陸軍部と協同してこれが研究準備に着

手していた。

陸海軍兩統帥部は四月末を以てこの計画を完成したので、五月二日午前九時三十分から約二時間三十分に亘り宮中大本営において大元帥陛下親臨の下に御前研究を実施した。嶋田、東條の兩総長が統裁官となつて主として御説明に当り、出席員は兩次長、兩作戰部長及び兩作戰課長で、他に兩作戰課の主務者が控えた。御説明を終わった後、後宮參謀次長は海軍部に對し左の事項を質問した。

一、ビアク島方面或はメレヨン方面に對し五月下旬以前及び同以後敵が攻略を企図する場合決戦を行ふか否か

二、敵がマリアナ、西カロリン、ニューギニア三正面全部に進攻し来る場合の決戦指導如何

三、主決戦実施の爲陸軍作戰に關し海軍より特に要望せられる事項如何

次いで伊藤軍令部次長は陸軍部に對し左の事項を質問した。

一、本作戦指導方針に依る場合トラック、マリアナ、ヘルヴェイン

グ湾、フォゲルコップ地区等に対する陸上防備自信の程度如何

二、本決戦期間ビルマ、アンダマン、ニコバル及び千島方面等に

於ける陸上防備の自信の程度如何

三、陸軍航空兵力の運用並に直接海軍の作戰指揮下に入れて作戰

せしめる航空兵力の内容如何

四、主作戰正面たる中部太平洋、比島、濠北方面の急速防備強化

就中航空作戰準備の見透如何

右の質疑応答中、海軍側が參謀次長の質問第一項に對し「ビアク、メレヨン方面に敵が來攻しても決戦を行はない」と答えたことと、又陸軍側が軍令部次長の質問第一項に對し「マリアナの確保には自信がある。トラック諸島は少くも敵に利用せしめないことが出来る。西部ニューギニアの確保には今の所自信がない」旨答えたことは共に後に影響ある意義重大な応答であつた。

〔大海指第三七三三號——「あ」号作戰命令〕 大本営は五月三日、

大海指第三七三三號を以て左記「聯合艦隊の準備すべき当面の作戰方針」即ち「あ」号作戰に關する命令を新聯合艦隊司令長官豊田副武大将に与えた。

第一 我が決戦兵力の大部を集中して敵の主反攻正面に備へ一挙に敵艦隊を撃滅して敵の反攻企図を挫折せしむ 之が爲

一、速に我決戦兵力を整備して概ね五月下旬以降中部太平洋方面より比島並に濠北方面に亘る海域に於て敵艦隊主力を捕捉之が撃滅を企図す

二、右決戦兵力整備以前に於ては特定の場合の外決戦を避くるを本旨とす

第二 決戦海面に於ける作戰要領は左記に拠る

一、五月下旬第一機動艦隊及第一航空艦隊の兵力整備を俟ち第一機動艦隊を比島中南部方面に待機せしめ、第一航空艦隊を

中部太平洋方面、比島並に濠北方面に展開し以て決戦即応の態勢を持し好機に乗じ特に右兩艦隊の適切な運用を期し全力を挙げて敵主力を捕捉撃滅す

二、決戦海面は爲し得る限り我機動部隊待機地点に近く選定するものとす

第三 我決戦兵力の整備に先立ち敵來攻する場合の作戰は左に拠る

一、特定拠点の確保並に状況特に有利なる場合を除くの外海上兵力を以てする決戦は之を避け主として基地航空兵力並に局地防備兵力を以て敵を邀撃撃滅す 特定地点は別に示す

二、此の場合基地航空兵力の使用に關しては全般戦局の推移を洞察し特に爾後企図すべき決戦を有利ならしむる成算ある場合の外努めて兵力の過大なる消耗を戒め以て次期海上決戦に

支障なからしむるを本旨とす

第四 決戦期間に於ける爾他方面の作戦は左記に拠る

一、陸海軍緊密なる協同の下に概ね所在兵力を以て来攻する敵を遂撃し爲し得る限り既定方針に即し所定の要域を確保す

二、努めて奇襲的作戦を実施し敵進攻氣勢の破挫を策す

第五、決戦準備に關しては特に左に留意す

一、陸海一如の作戦準備を行ひ概ね五月下旬達成を目途として中部太平洋方面より比島濠北方面に亘る地区就中西カロリン諸島比島中南部並にハルマヘラ及西部ニューギニア方面の作戦準備を促進すると共に之等要域の防備を強化し速に決戦海面に於ける我有利なる戰略態勢の確立に努む

二、航空作戦準備を優先実施し極力基地の造成並に防備強化所要燃彈の集積に努む

特に航空基地の強靱性を重視す

三、航空基地は既定使用区分に拘らず陸海軍部隊の一体的航空作戦実施に最も便なる如く活用し防備並に燃彈の集積も兩軍一体となり之を実施するものとす

第六、本作戦方針に拠る作戦を「あ」号作戦と呼称す

〔決戦海面と濠北との關係〕右指示中決戦海面については、中部太平洋方面からフィリピン並に濠北に亘る海面と示されているが、作戦準備の項の内容によつても窺ひ知り得る如く、大本營海軍部は、決戦はパラオ近海において起るものと判断し且つ期待していた。

その根拠は固より敵情判断にあつたが、当時我が機動部隊に配當し得る油槽船の数量にも相当強く影響されていた。即ち当時の油槽船狀況は我が機動部隊の行動能力を著しく制限し、その行動半径は約一千哩に限定されていた。この事實は、たゞ我が機動部隊の待機地点を最前方の中南部比島に進出せしめても、これをマリアナ方面の決戦に使用するには非常な困難を伴うことを意味した。しかし

てかかる事情は必然的に決戦海面をなるべく我が機動部隊の待機地点に近い方面、即ちパラオ近海に選定したいという期待と、これのための努力となつて表現されたのである。

この大本營の判断と期待は聯合艦隊にも強く影響し、後日米軍がマリアナに來攻した際、聯合艦隊の「あ」号作戦決戦發動の決心を遲滞させる有力な一因となつた。

なお「あ」号作戦計画策定に當つて一つの問題となつたのは、この作戦の右翼の軸となる濠北方面の処理、即ちカロリン、マリアナ方面より先に敵が濠北方面に上陸した際はどうかという問題であつた。事實この計画の発令前日の五月二日、大本營陸軍部は海軍部の諒解の下に後述の如くビアク島を第二方面軍の絶対確保すべき要線より除いている。即ちこの事實によつても知り得る如く、當時の海軍部の意図は、敵が若しマリアナ、カロリンに先んじてビアク方面に來攻した場合においてビアク確保のための決戦は行わない趣旨であつた。

当時我が海軍の実勢力はマリアナ、カロリン方面のみの決戦のためにも必ずしも十分ではなかつた。従つて大本營海軍部は、この不十分な兵力の一部を割いてビアク方面に使用することは、パラオ以北の決戦遂行上極めて不利となし、最悪の場合、ヘルヴィング灣附近を喪失するの不利を忍んでも兵力の分散を避けたいという方針で「あ」号作戦計画を樹立したのであつた。

〔第一航空艦隊の増強——基地航空の主戦力〕第一航空艦隊は前述の如く、昭和十八年七月以来、大本營が来るべき海上決戦における基地航空の主戦力としてその編成に着手した部隊であつた。大本營は特にこの艦隊の整備に意を用い、司令長官角田寛治海軍中将以下幕僚指揮官並びに基幹搭乗員には歴戦有能の人材を配置し、且つ器材はなし得る限り新器材を供給するに努めてきた。

この艦隊は最初訓練整備期間を約一年と予定したが、敵の反攻が

予想よりも早く開始されたので、昭和十九年二月中旬以降、遂次内南洋方面基地に進出し、聯合艦隊の作戰に協力を命ぜられていたが、三月十五日を以て聯合艦隊に編入された。

その編成は逐次増勢し、五月一日現在第六十一航空戦隊（十箇航空隊約六七〇機）及び第六十二航空戦隊（十箇航空隊約六七〇機）であつたが、第六十二航空戦隊は訓練未熟であつた。そこで大本営は五月五日第六十二航空戦隊を艦隊の編成より除いて内地に残留せしめ、その代りに練度優秀な第十三及び第十四航空艦隊の麾下航空部隊を編入して「あ」号作戰のため戦力の強化を図つた。その結果同日以後第十四航空艦隊は実質上航空兵力を持たないこととなつた。

六月五日「あ」号作戰發動直前における第一航空艦隊の編成及び定数は大要次の通りであつた。

第六十一航空戦隊（マリアナ）	九箇航空隊	六七二機
第二十二航空戦隊（カロリン）	八箇航空隊	五五二機
第二十三航空戦隊（濠北）	三箇航空隊	一六八機
第二十六航空戦隊（カロリン、比島）	三箇航空隊	二四〇機

飛行機定数はその他一二機を含んで一、六四四機であつたが、実際の整備数は一、一八八機であつた。

【第一機動艦隊の編成——唯一の母艦部隊】 第三艦隊の第一及び第二航空戦隊はソロモン方面敵反攻の開始に伴い同方面基地航空作戦強化のため昭和十八年十一月以後逐次ラバウル方面に使用されてその戦力の大半を失ひ、いずれも母艦部隊として海上作戰不能の状況に陥つていた。よつて大本営は、昭和十九年二月のトラック空襲を契機として両戦隊を内地及びシンガポール方面に撤退せしめ、整備訓練を急がしめつつあつた。

一方母艦部隊を有しない第二艦隊は開戦以来概ねそのまゝとなつ

ていたので、大本営は聯合艦隊水上部隊の綜合威力發揮を容易ならしめたるため、三月一日第二及び第三艦隊を以て第一機動艦隊（司令長官小沢治三郎中将）を編成した。同日におけるこの艦隊の編成は次の通りであつた。

第二艦隊

- 第一戦隊 長門、大和、武蔵
- 第三戦隊 金剛、榛名
- 第四戦隊 愛宕、高雄、摩耶、鳥海
- 第五戦隊 妙高、羽黒
- 第七戦隊 熊野、鈴谷、利根、筑摩
- 第二水雷戦隊 能代、第二十四、第二十七、第三十一、第三十二、第三十三
- 二駆逐隊

第三艦隊（第一機動艦隊司令長官直率）

- 第一航空戦隊 大鳳、瑞鶴、翔鶴
- 第六〇一航空隊（二三五機）
- 隼鷹、飛鷹、竜鳳
- 第二航空戦隊 第六五二航空隊（一三五機）
- 第六五三航空隊（九〇機）
- 第三航空戦隊 千代田、千歳、瑞鳳
- 第十戦隊 阿賀野、矢矧
- 第四、第十、第十六、第十七、第六十一駆逐隊

第三航空戦隊は小型空母のみを以て編成されていた。この戦隊の飛行機隊は初めての試みとして零式戦闘機を爆装（二五〇疋爆弾一発）した戦闘爆撃機四五機（各艦一五機）を主力として編成された。

3 聯合艦隊の準備

【聯合艦隊の計画準備——展開】 五月二日、新たに聯合艦隊司令

長官に親補された豊田副武大將は、翌三日東京湾上の旗艦大淀において前記「あ」号作戦に関する大海指を受領し、即日聯合艦隊「あ」号作戦計画を発令すると共に当時シンガポール、リンガ泊地及び内地方面に分散して待機訓練中であつたところの第一機動艦隊に対して、五月二十日までフィリピン南西部のタウイタウイ泊地に集結して作戦準備を完成する如く命じた。

五月三日の聯合艦隊「あ」号作戦計画においては、決戦海面をパオ周辺及び西カロリン方面に指定し、マリアナ方面に対しては第一機動艦隊は使用しない方針であつたが、後日機動艦隊に配当し得る油槽船の増加を得たので、マリアナ方面に対しても機動艦隊を使用することに改めた。又聯合艦隊の作戦計画における今一つの特徴は敵を我が希望する決戦海面に牽制誘致する方策を強調重視した点であつた。

五月十七日、後述する如く敵が西部ニューギニアのワクデ、サルミ方面に上陸して戦勢急迫するや、翌十八日第一航空艦隊に対して「あ」号作戦に應ずる展開を実施する如く命じ、次いで起つた敵機動部隊のマカス島襲撃及び通信謀報その他により敵の本格的来攻切迫せるものと認め、五月二十日「あ」号作戦開始を発令した。又南方方面との無線通信を容易にするため、五月二十二日東京湾発、その司令部を内海西部の柱島錨地に移して来るべき決戦に備えた。

〔第一機動艦隊の計画〕 聯合艦隊の計画に基づき、機動艦隊は「友軍特に基地航空部隊との緊密な協力の下に戦機に投ずる如く機動し我が基地航空兵力の攻撃に策応全力を挙げて猛烈果敢な攻撃を加へ一挙に敵戦力就中敵機動部隊を覆滅して敵の反攻企図を撃砕」する方針の下に大要左の如き作戦計画を樹てた。

一、機動部隊は五月二十日比島部隊待機泊地に於て決戦準備を完了する。令に依り牽制部隊をウルシー又はパオ方面に進出せしめ友軍と協力敵を決戦海面に導入するに努める。

二、機動部隊は令に依り出撃極力企図の秘匿に努めつつ比島東方海面に進出し機宜牽制部隊を合同する。

三、基地航空部隊及先遣部隊等の索敵触接に依り敵の全貌を明かならしめると共に自衛警戒を敵にしつつ好機所望の海面に進撃基地航空部隊の作戦に策応して敵機動部隊に対し果敢な先制攻撃を加へつつ決戦に転じ之を撃破する。

航空戦は昼間強襲を建前とし敵の翼側より攻撃するを主眼とする。

四、機動部隊進撃接敵に際しては敵の横懸り戦法及陥穽に対し警戒を厳にし、基地航空兵力の哨戒密ならず当面の母艦兵力大ならざる如き場合は敵情明確となる迄一部攻撃兵力を控置することがある。

五、追撃戦に転じた後は万難を排し全力を挙げて近迫敵を反復攻撃し之を殲滅する。海上機動戦を有利とする場合は其の儘作戦を続行する。状況に依り飛行機隊を陸上基地に展開せしめ或は水上戦闘部隊を進出戦果の拡充徹底に任ぜしめる。

〔第一航空艦隊の計画〕 聯合艦隊の計画に基づき第一航空艦隊の樹てた計画の骨子は次の通りであつた。

一、基地航空部隊の兵力を三箇攻撃集団に編成し各集団毎に各種を配分し移動集中を容易ならしめる。

二、正確な敵情入手の爲敵前進根拠地に対し挺身飛行偵察を実施する。

三、敵の来攻方面決定せば偵察機を残し同方面攻撃兵力は早期他集団配備地域に転進、敵攻撃に対し体をかわした後同基地より攻撃を集中する。

四、基地航空部隊を以て彼我機動部隊決戦前少くも敵機動部隊航空母艦兵力の約三分の一を撃破し爾後味方機動部隊其の他と協力して残存敵艦隊を撃滅する。

第六章 西部ニューギニアの作戰

1 濠北の作戰準備

〔第二方面軍の統帥發動〕 既述の如く、濠北に対し新たに第二方面軍の戦闘序列が令せられ、方面軍司令官阿南惟幾大將は昭和十八年十一月二十八日濠北の中心アンボンに進出し、軍司令官及び兵団長を会同して部署を定め、作戰の方針及び作戰準備の準備を示し、且つ肅然として楠公精神を以てこれを貫くべきを訓示した。各軍司令官及び兵団長は直ちにその部署に就いた。かくして方面軍司令部は仮りにダバオに位置し、十二月一日その統帥を發動したのであった。

〔濠北作戰の一般構想〕 第二方面軍の作戰地域は濠洲とフィリピンとに挟まれた地域であり、マカッサル及びロンボック海峡より東経一四〇度に亘る地区であつて、当時これを濠北と称した。而してその作戰方針はスンダ列島及びサルミ（西部ニューギニア）附近以西の太平洋沿岸地域を本防禦線とし「速かに作戰準備を整へ、來攻する敵を撃破して濠北方面の要城を確保し、以て攻勢の期を待つ之が爲先づ十九年春を目途として作戰準備を概成し、東部ニューギニア並に濠洲方面より侵攻する敵に対し、初頭に於て其の反攻意志を挫折せしむることに努む 特に航空部隊の運用及び海軍との協同を重視す」というにあつた。

そしてその部署は、年初以来悪条件の下困難を冒して漸く現地展開を完了した第十九軍（軍司令官北野憲造中將、第四十八師団、第五師団及び未着の第四十六師団基幹）を以て依然スンダ列島及びパシダ海周辺に、又新たに進出した第二軍（軍司令官豊島房太郎中將、第三十六師団及び第二野戦根拠地隊を基幹とし尚一箇師団増加

の予定）を以てサルミ附近以西のニューギニア太平洋沿岸に、又第一野戦根拠地隊（司令官武田寿少將）を以てハルマヘラに、第七飛行師団主力（師団長須藤榮之助中將）を以てセラム島にそれぞれ配置して作戰準備を強化し、海軍と協同し、空地一体、來攻する敵を撃破して本防禦線要城を確保せんとするにあつた。

又その本防禦線編成の構想は、集團飛行場を中核とする大小の支撐点及び戰術拠点（司令官武田壽少將）を以て構成し、これに計画兵力量に應ずる會戰資材及び半年乃至一年の常統補給軍需品を集積して空海陸に亘る交通、通信、連絡を整備せんとするものであつた。なお特に決戦方面に対しては増加が予定されている飛行二箇師団の全力を決戦手段として集結運用することを重視し、且つ「方面軍第一次の戦力發揮は東部ニューギニア方面よりする敵の連続反攻の企図を挫折せしむるに在り 之が爲第二軍を以て特にサルミ附近の支撐点及成し得ればハツヘマ湖ウィッセル湖附近の拠点を速かに完備すると共に、ヘルヴィング湾一帯に於ける海上機動及各方面各般に亘る優勢兵力の集中に関し諸準備の万全を期す」る趣旨であり、即ちヘルヴィング湾地域を以て第二方面軍の決戦点と判断し、第二軍増加兵団の主力はここに配置を予定し、先着の第三十六師団は取敢えず主力を以てサルミ、一部を以てビアクに配置せられることとなつた。同師団は十二月二十五日以後逐次右地点に到着した。

〔方面軍の作戰計画——合同示達〕 しかしながら濠北一帯の地域は、図上地名の存在する地点には若干の原住民がおり、就中オランダ、ポルトガルの植民地拠点には若干の施設はあるが、その他の殆ど全域が開闢以來人類の生存しなかつた所である。ここに近代軍を建在せしめ且つ短時日に決戦を準備するといふことは、およそ至難

の業であつた。第二方面軍司令部は東京出發にあたり、十一月十二日その決戦任務に應ずる部隊、資材、船腹等に関し大本營に對し要請するところがあり、更に一月月上旬幕僚を東京に派遣してこれが促進方を連絡せしめた。しかるに太平洋方面の戦況逼迫に伴い、第二方面軍に對する二、三月輸送の大部は中止せられ、その上期待したヘルヴィング灣配置予定の第十四師団はバラオ方面に転用せられるに至つた。——この頃第四十六師団主力は一旦シンガポール方面に輸送せられた後スンバ島附近の配備についたのであるがその輸送先変更は中央船繰りの關係上不可能事に属していた——ここにおいて諸般の事情明かとなり、方面軍は作戦計畫を最終的に決定し、三月十日をとし、軍參謀長及び直轄兵団長をダバオ郊外ダリヤオンに會同し、この計畫を詳細に亘り開示して、作戰思想の徹底を図つた。その作戰指導要領は主要次の通りであつた。

一、敵の輸送妨害を排除し且太平洋方面よりする敵の海上機動並に濠洲方面よりする敵の企図に備へつつ戰略態勢就中航空運用の基盤を整備強化し以て十九年夏を目途として会戰準備を促進す此の間特に航空の整備及船舶の運用を優先重視す

現地自給を強化し船腹の負担を軽減すると共に予め後方補給の断絶に備ふ

二、会戰準備の促進に方りては既に展開しある兵力並に施設及軍需の状態をして夏期を目途として会戰発起に應じ得るの態勢に整頓せしむると共に増加すべき軍隊及軍需をして速かに基本配備の骨幹を補正し且会戰へ逐次展開し得るの態勢を以て狀況の緩急及輸送力の増減に應じ逐次輸送展開せしむ

夏期に入るも会戰発起に至らざる場合に在りては依然同要領に依り残余の展開を継続す

三、会戰に先だち航空部隊を以て好機を捕捉して敵の準備基地に進攻し其の企図を破權乃至洪滞せしむ

四、ホルランヂヤは之に一部を配備し敵の前進妨害並に東部ニューギニア部隊の收容に當らしめ且狀況に依り要すれば敵に一撃を与ふるの支拂たらしむ

五、敵の來攻に方りては各方面は夫々当面の敵を擊破すべく方面軍は逐次重点を形成して決戦を連続指導するものとし先づニューギニア北岸を前進する敵を西部ニューギニア北岸方面に於て擊滅することを眼目として全般の作戰を律す

狀況に依り離島（アル、カイ、タニンバル）方面の反攻著しく右に先だつ場合に在りては一時重点を此の方面に形成して先づ此の敵を擊破することあり

六、展開未だ基本配備を完了せざるに先だち会戰発起に至ることを予期すべく此の場合常に主動の地位に起ち到着する軍隊及軍需を逐次会戰に部署し決戦を指導す

七、戦況就中小舟輸送力の不足に依り増加軍隊及軍需の前方展開不可能に陥りたる場合に在りては自主的に本防禦線上の縱深配置として且其の成し得る限り多くの兵力を以て決戦機動力として主動的に之を運用す

八、何れの場合に在りても初動の反撃を重視するものとし狀況の推移を予測し當時の狀態に於て集結し得る限りの戦力を以て反撃威力を強大にし其の綜合運用に依り敵に一大痛撃を与へ其の反攻意志を初頭に於て挫折することに努む

九、爾後に於ける攻勢正面は先づニューギニア北岸方面と予定す十、第八方面軍に對しては同情を以て望み大局を誤らざる範圍に於て武士道的協力に努む

その他この作戰計畫には本防禦線の編成、機動力の整備、軍隊の展開及び軍需品の集積、補給の確保及び輸送力の整備等作戰準備に關して詳細に規定せられ、方面軍司令部自らこれが率先力行を期すると共に各兵団に對し更に異常の努力を要求した。かくて各兵団は

重なる悪条件にも拘らず黙々として絶大の努力を続け、敵のはか大
自然とも戦いつつ、愈々その作戰準備を強化していった。

〔南方軍の企圖——四角要塞問題〕 南方軍の決戦構想は既に述べ
たように、フィリッピンを以て絶対なる総決戦地域とし、四角要
塞、ビルマ要塞、並びにバレンバン地区を以てこれが決戦支撐の三
本柱とするものであつた。その決戦支撐の中、バレンバン地区は直
ちに着手し得るが、ビルマに關しては既に發動中のイムパール作戰
の一段落を待たねばならず、情勢上特に急を要するのは太平洋正面
であつた。而してその四角要塞問題に關しては経緯があつた。即ち
この四角要塞の構想は敵の主攻勢がニューギニア北側からフィリッ
ピンに向かうという判断を前提とし、ややもすれば陥らんとする我が
海陸作戰分離の弊を是正し、フィリッピン攻略のための敵進路を扼
するヘルヴィング湾、パラオ、ハルマヘラ及びミンダナオの四点を
統一指揮の下に堅固に編成しここに陸海同時同正面作戰を指導して
戦勝の機を把握せんとするものであつた。しかるにこの一組織の下
に有機的活動をなすべき重要地域は、第二方面軍、第十四軍及び第
三十一軍（聯合艦隊指揮下）の三つの指揮系統に分割されていた。
そこで甚だ遅れ走せではあるが新たに進出した第二方面軍を以て専
らこれが統一指揮に当らしめここに航空の主力を集結運用すると共
に、艦隊主力と一体の決戦を指導せんとするにあつたが、關係する
ところは甚だ広汎であつて、到底その議は纏まらず、遂に本問題は
断念の已むなきこととなつた。

この結果南方軍作戰計画大綱は濠北の戦備に關し「濠北要塞は左
翼の決戦支撐となす 特に四角要塞を以て殲滅戦地帯を構成し、
來攻する敵を捉へて尽く之を撃滅す 之が為海軍との協同を適切に
し且海上輸送の確保に努む 基本兵力は六箇師団其の他若干と予定
し、航空基地整備の基準は小スンダ離島及ヘルヴィング湾各二師団、
ハルマヘラ附近一師団半とす 軍需集積の基準は地上一、五会戦、

六カ月分（糧秣一年分） 航空燃彈六師団二ヶ月分を目標とす」と定
められた。

2 ホルランヂヤの防衛

從來第二方面軍と第八方面軍との作戰地境は、東經一四〇度線で
あつた。ホルランヂヤはその東側即ち第八方面軍の作戰地域内にあ
り、同方面軍のためには重要な後方基地であると共に、一方第二方
面軍のためには、本防禦線前方の重要な戰略拠点でもあつた。従つ
て第二方面軍の統帥發動以來、これが作戰地域内への包括に關して
の交渉や、又作戰地域外ではあるが一部の戦闘部隊をここに配置す
る部署の研究やらが行われたのであるが、本防禦線ヘルヴィング湾
正面に僅か一箇師団しか到着しておらぬ現状では、兵力分散に陥る
ものとして結局これを保留したまま時日は経過した。

〔防備問題——第十八軍隷下に入る〕

に進出に伴い、大本營は三月二十五日第十八軍及び第四航空軍を、
第二方面軍の隷下に入れ、第二方面軍をして東部ニューギニア地域
をも統轄せしむることとした。方面軍はこの轉換に直面して大なる
困難を自覺したが、大本營命令に準拠して第十八軍に対し「その主
力を以て成るべく速にウェワク以西に転移し、ホルランヂヤ、アイ
タペ、ウェワク等特に主要航空基地の防衛を強化して持久を策し、
以て西部ニューギニア及び西部カロリン方面に對する敵の進攻を制
するに勉むべし、軍主力の転移間、新に上陸する敵に對しては隨処
に於て勉めて之を撃破すべき」任務を附与した。即ち逐次軍主力を
ホルランヂヤ附近に集結整頓し、同地を確保して進攻する敵の撃破
を企圖したもので、第四航空軍は主力を以てこれに協力すると共に
に、次期決戦準備を促進すべく、且つホルランヂヤ飛行場群を急速
に強化整備することとした。なお緊急措置として、右機動地域及び
ホルランヂヤ、サルミ間の駅站準備につきそれぞれ計画するとこ

があつた。しかしこれは任務上から、又現態勢上から、かくしなればならぬというのであつて實際問題としては有力な輸送手段もなく、方面軍は限らない苦慮と焦躁を感じた。

第十八軍（軍司令官安達二十三中将）は当時その主力をハンサ以东に保持しており、これをウェワク以西に移すためには、各兵团とも約五〇〇の機動を必要とし、利用すべき舟艇も兵站施設も共に甚だ乏しく、しかも過去一年間の激戦、機動に疲れ果てた軍隊にとつては至難なことであつた。更に又敵はウェワク、ハンサ地区に脅威を与えており、これが上陸に対する邀撃態勢を保持することも必要である。尚このほかにハンサ、ウェワク間には、幅約一〇〇の一大湿地帯が横たわつていた。

この大湿地帯はセビツク及びラム両大河の下流において、全域潮沼地帯の相貌を呈している。軍はおよそ利用し得る限りの舟艇、カヌー等を挙げて努力を続け、四月中旬には漸く一日約七七〇名の人員を通過せしめ得るまでになつた。しかしハンサ以东にはなお三万の兵力があり、これが通過完了には今後更に約二カ月の日子を必要とするものと推定せられた。

〔バラオ空襲——聯合艦隊司令部の遭難〕 二月十七日トラックに対して行われた米機動部隊の大空襲は第二の真珠湾といわれたほどの大損害を日本海軍に与えたのであるが、敵は更に余勢を駆つてサイパン近海に出現し、マリアナ諸島一帯は非常な危険にさらされた。この時の敵機動部隊は大型空母九隻を中心とするもので、米海軍の新造艦多数が戦列に加わつてゐることが明かになつた。

この敵の傍若無人の行動に反し日本海軍の航空兵力は戦力愈々低下して有効な攻撃を加へ得なかつたために、敵は三月三十日遂に内南洋の西端バラオの空襲を開始し、四月一日まで三日間連続の攻撃を行つた。当時バラオは内南洋における唯一の安全泊地として聯合艦隊旗艦武蔵を始め補助艦艇の主力が碇泊していたが、その大部は

避退の外なく結局、輸送船十数隻が撃沈された。

聯合艦隊司令長官古賀峯一大将は艦艇を避退せしめた後自らは幕僚と共にバラオの陸上に移つた。しかし三十一日夕、明四月一日には敵上陸の虞あるものと判断し、全局の作戦指導のためフィリッピン島のダバオに移動することを決心し、艦隊司令部の首脳は同夜大型飛行艇二機に分乗し、午後十時頃同地を出発した。一番艇には古賀長官以下、二番艇には福留繁謀議長以下が搭乗し、夜間飛行を続け、ミンダナオ島附近まで進出したが天候不良のため一番艇は行方不明となり、二番艇はフィリッピンのセブ島附近の海上に不時着し、福留参謀長以下約十名の生存者が陸軍守備隊に収容せられた。一番艇はその後全く消息を断ち、古賀長官以下は殉戦と認定せられ、司令長官の後任には豊田副武大将が親補せられた。

〔敵上陸〕 ホルランジャ附近の地形は、標高二、一〇〇米に達するシットロップ山が屏風の如く海岸正面に聳え立ち、この南側にセリタニ湖を湛える平地があり、平地の東方にホルランジャの所在するフンボルト湾、又西方にタナメラ湾がある。

ホルランジャは前述のように防備せられぬままに三月三十日以来屢々敵の空襲を受け、現地飛行部隊は大なる損害を蒙つた。更に四月二十一日には艦載機を含む計六〇〇機の銃爆撃を受け、同日ワグデ、サルミも艦載機に攻撃された。又ウェワク沖には艦船を含む約五〇隻の輸送船団が西進し、翌二十二日早朝から敵はホルランジャ地区に対し空襲及び艦砲射撃の援護下に、主力を以てフンボルト湾（ホルランジャ港正面）一部を以てタナメラ湾に上陸を開始した。

当時ホルランジャ地区には、第十八軍関係約六千、第四航空軍関係約七千、海軍関係約一千、合計一万四千六百の兵員があつたが、いづれも大部は後方勤務、補給兵站関係の部隊であつて、戦闘力、装備を有せず、加うるにこれらの指揮官第六飛行師団長稲田少将、第三野戦輸送司令官北園少将、第九艦隊司令長官遠藤中将はいずれ

も新部署に基き、十日ほど前に現地に着したばかりであつて、部署を統一し新配備を行う暇もなかつた。

第四航空軍は第七飛行師団の一半（戦爆二八機）を第二軍正面に推進してこれに協力せしめたるも、固より大なる成果を期待し難く、現地地上部隊は劣勢克く所在に奮戦し、二十二日から二十五日に亘り、逐次海岸附近、後方要点、次いで飛行場周辺においてそれぞれ戦闘を継続した。

しかるに糧秣始め軍需品の大部は海岸附近に集積せられていたため既に敵手に落ち、部隊の保有する糧秣また少なきは二日、多きも七日を出ない状況となつたので各部隊を現地自活の予定地ゲニム地区（ホルランチャ地区西南）に集結して、後図を策するの已むなきに至つた。

敵は四月二十二日ホルランチャと同時に、アイトベ附近にも上陸し、同地飛行場を占領した。当時アイトベには兵站部隊、補充要員、航空部隊等、計約二千名の兵員があつたが、これまた戦闘力に乏しく、軽戦の後、後退を余儀なくせしめられた。

〔救援——南方軍抑制〕 第二方面軍は敵のホルランチャ上陸の報に接し、四月二十二日第二軍（司令部マノクワリ）に対し、歩兵二大隊、砲兵一大隊を以てホルランチャに増援せしむべく命じた。第三十六師団（在サルミ）は第二軍の命令に基き歩兵第二百二十四聯隊長松山大佐をして右任務の実行に当らしめた。次いで二十四日第二方面軍はホルランチャの重要性に鑑み、速かに敵の企図を破摧し、西部ニューギニアに対する敵空軍の跳梁を封殺するため第三十六師団の主力を該地に増派するを必要となし、第二軍にこれが準備を命ずると共に南方軍に対して意見具申した。しかし南方軍総司令部は、第二方面軍の面目たる徳義はこれを諒とするも、本防禦線上の要点サルミ附近を解放することは到底忍び難く、且つその進路たるや錯雑遠大であつて、機動及び戦力の發揮に疑問あり、敢えてこ

れを抑制したため、本企図は中止となつた。

この頃第二方面軍司令部は現地の準備完了し、四月二十五日メナドに進出した。

〔撤退〕 敵の上陸部隊は約二箇師団と判断せられた。我がホルランチャ部隊は四月二十六日から五月七日に亘りゲニムに兵員約七千を集結したが、陸稲、芋等の現地物資は僅かに数日を支えるに過ぎなかつた。ここにおいて同部隊はサルミに向ひ転進することとなり、四月二十八日から五月六日に亘り十一梯団となり、行程約四〇〇料、未知のジャングル地帯を逐次西進の途に就いた。又ホルランチャ増援の松山支隊は、五月二日その一部を以てアルモバに舟艇機動し、主力は八日トル河の渡河を完了した。

〔確保要線の変更〕 敵のホルランチャ進出に伴い大本営はその制空圏の拡大を考慮し、且つは第二方面軍の積極的な統帥の傾向にも鑑み、大本営の責任において確保要線を後退するを必要なりとし、五月二日第十八軍の西部ニューギニア方面への転移を命令すると共に「西部ニューギニア方面に於ける確保すべき第一線は、ヘルヴィング湾底要域、マノクワリ、ソロン、ハルマヘラ附近の線とし、ピアク島要地は極力永く之を保持すべき」旨を指令し、且つ細部の配置に関しても干渉的に指示するところがあつた。蓋し大本営の絶対国防圏決定に遵由し、第二方面軍は昨秋進出以来、サルミを含むヘルヴィング湾一円を以て、本防禦線上の決戦地と定め、又南方軍の新統帥発動以降もまたこれを以て決戦正面と決定し、与えられた僅少な兵力及び資材を以て営々ここを死所として決戦準備を促進しつつあつたのである。

しかるにこの卒然たる確保絶対線の変更は海上輸送手段を始め何等の方法も持たせていなかった現地にとつては不利且つ不能の問題であつた。よつて第二方面軍司令官は統帥の混乱をさけるため、自己の責任において此の命令を呑み、変更に関する処置を保留する

こととした。

〔第十八軍の決意〕 第十八軍は前述の如く鋭意西進に移ったが、その行程は難渋を極め、四月中旬僅少の一部をアイタベ及びホルランチャ間の地区に推進し得たに過ぎなかつた。従来ホルランチャ及びアイタベは、第十八軍のため後方地域に属し、軍が過去一年以上に亘り、任務上マダン以東の作戦に苦戦、精魂を尽して来た経緯からして、これら後方地域の不備は軍として事情已むを得ないところである。

しかるに、ホルランチャ及びアイタベの失陥は痛く第十八軍司令官の道義的責任を刺激することとなつた。即ちホルランチャの戦略価値、就中これが喪失の絶対国防圏に与える影響に鑑み、全力を尽して速かにアイタベ及びホルランチャの奪回を図り、已むを得ざるもこれが作戦行動によつて、敵の西方に向う突進を牽制するを以て、第二方面軍の作戦に寄与する所以なりと決意するに至らしめた。

当時ウエワク地区には当面の保有糧秣完全定量四カ月分、他に現地物資二カ月分の期待あり、至難ながら現地の長期持久敢えて策なきにはあらざるも、孤立の地に遊兵徒食し、やがて開始せられんとする決戦を傍観するが如きは、第十八軍の到底忍び得ないところであり、又アイタベ、ホルランチャを迂回して第二方面軍に合一し、決戦に参加することは一応の理であるが、未踏のジャングル一千杵の機動のもたらす戦力の喪失は、屢次の経験によつて余りに明瞭であり、共に採らざるどころであつた。即ち第十八軍はセビツク以東の兵力を速かにウエワク周辺に集結し、戦力既に疲憊せりといえども挙軍一体、乾坤一擲先ずアイタベ附近の敵を撃破することを決意し、四月二十九日攻撃計画を示達し各部隊をして直ちにこれが準備に着手せしめ、第二方面軍またこの決心に同意し且つ激励した。願れば南東太平洋正面の戦局既に破綻に陥つてから東部ニューギ

ニヤに進出した第十八軍が、人跡未踏の蛮地を、年余に亘り苦闘戦した後、これ等待っている運命は、かくの如く冷酷と絶望とに満ちたものであつた。しかるに第十八軍は毅然として大義に就いた。

即ち軍は第二十、第四十一師団を基幹とする主力を以てアイタベ攻撃に部署し第五十一師団の主力基幹をウエワク地区作戦基盤の確保に当らしめることとした。軍は困難を排してウエワク—アイタベ間約一三〇杵の兵站を推進して概ね六月上旬において攻撃準備を完了すべく予定し、第二十師団（師団長中井増太郎少将）をして速かにアイタベ附近の敵に接触して軍の攻撃を準備せしめることとした。第二十師団はハンサよりの長距離機動の勞を医する暇もなく直ちに西進を開始し、往く往く敵を撃破して、六月初めドリニューモール河（坂東川）附近敵の前進陣地帯に接触し、軍主力のため攻撃準備を整えた。

3 サルミ作戦

〔ヘルヴィング湾強化問題〕 第二軍ヘルヴィング湾正面は、既述の如くこれに配置予定の兵団が、二月中旬太平洋方面に転用せられたままに情勢は推移したが、大本営は四月に至り第三十五、第三十二師団を、第二方面軍の隷下に入らしめ、第二方面軍は固よりこれを第二軍正面に配置することとした。

両師団は五月初め輸送船八隻を以て船団（竹一船団）を編成し、駆逐艦三、駆潜艇数隻を以て護衛し航空の掩護下に南下したが、五月六日メナド西北海面において、敵潜水艦の攻撃を受け、三隻（重丁丸、但馬丸、天津山丸）遭難し、第三十二師団は歩兵一聯隊と砲兵の約半部、又第三十五師団は歩兵一聯隊と砲兵の大部を喪失するに至つた。

右情況下においても、第二方面軍及び南方軍は、更に航空掩護を強化し、依然両師団の主力を、ヘルヴィング湾正面に配置すべく、

第二軍また第三十五師団の主力をビアク島に配置すべく準備を進めていた。しかるに大本営はこれら前方進出を危険なりとし、五月九日再び確保要線を後退し「西部ニューギニア方面要域に於て確保すべき第一線はソロン、ハルマヘラ附近の線とし、ヘルヴィング湾底要域ビアク、マノクワリ附近要域は努めて永く之を保持すべき」旨を指令し、且つ新着の各一師団をソロン及びハルマヘラに配置するよう指示した。

旬日ならずして大本営は二度に亘つて確保要線の変更を命令したのである。これは海軍並びに船舶情勢の苛烈に基くものではあるが、他面現地軍にとつてはヘルヴィング湾を決戦正面とする従来の基本構想を破壊するものであり、又不可能のことに属していた。

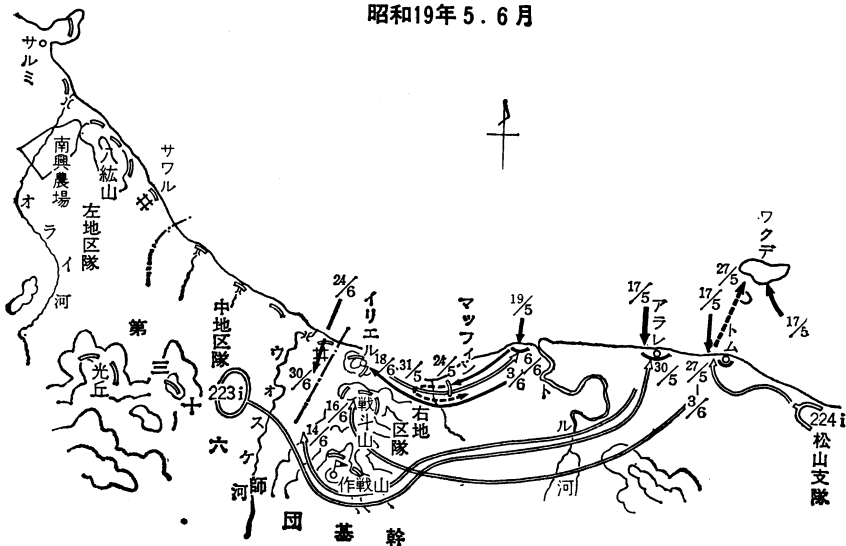
〔サルミ附近の作戦準備〕 華北方面より転用せられた第三十六師団主力（師団長田上八郎中将、参謀長今田新太郎少将）は昭和十八年十二月二十五日より十九年一月十六日に亘り、サルミに上陸し、その配属部隊は、更に三月上旬に至る間に逐次到着した。

サルミ附近の地形は、ニューギニアに共通するジャングル地帯であつて、サルミ附近、フーマオ農場（南興農場）及びマッフィン地区の若干が伐開せられているに過ぎず、現地自活力は殆ど皆無に近かつた。その上ジャングル内は河川、湿地が錯綜しており、悪性マラリヤが侵潤し、軍隊の行動及び生存に大なる障碍を呈した。

師団の任務は「サルミ附近を占領し、先づ航空軍に協力し航空基地の設定に任ずると共に、来攻する敵をその要域に於て破摧し、濠北決戦の支障たるべき」にあつた。師団は先ず航空基地特にサワル及びウオスケ飛行場の設定に主力をそそぎ、且つ交通通信、軍需品の揚陸、輸送、集積並びに衛生施設等に日も尚足らず努力をつつけ、状況の近迫と共に逐次地上作戦準備に移行した。四月二十一日以降この地区は連続空襲を受けるに至つたが、対空部隊善戦して相当の戦果を挙げた。この間ホルランデヤ派遣問題の経緯については前述

サルミ附近戦闘概見図

昭和19年5.6月



の如くであり、第二軍はこれが実行を督促した。

師団の作戦構想は、作戦山及び八紘山附近に拠点を構成し、周辺地区を道場となし準備せる道路により活発なる戦場機動を行い、随時随所に敵を撃破せんとするものであつて、機動の範囲は準備の進捗に伴い、先ずトル河附近まで、次いでワクデ対岸地域に及ぼすものと予定し、兵力配置の重点を作戦山附近に置いた。

〔敵上陸〕 五月十七日午前四時頃より約三時間に亘る爆撃及び艦砲射撃の後、約三十隻の艦艇に護衛された輸送船一一、舟艇二〇の敵は、ワクデ島及びその対岸トム、アラレ附近に上陸を開始した。

師団は十八日情況判明すると共に松山支隊を以てこれに反転攻撃を命じ、十九日トル河右岸に攻勢を取るに決し、中地区隊主力（聯隊長吉野大佐の指揮する第二百二十三聯隊主力基幹）を以てトル河上流より、又右地区隊主力（加藤中佐の指揮する歩兵第二百二十四聯隊残撃部隊基幹）を以て直路それぞれ敵の上陸点に向つて攻撃に前進する如く部署した。

ワクデ島に関しては八紘山展望哨が、十七日には火の島となつて望見せられ、終日砲撃を受けていること、十八日には多数舟艇が達着していること、十九日には静穏に帰し午後にはかすかな煙が各所から立上つてゐることを逐一報告した。これを望見するものは孤城奮戦六〇〇の靈に對し、等しく凜然としてこれを弔らつた。

右地区隊は十九日トル河左岸において敵と接触し、二十一日以降劣勢克く果敢な攻撃を反復したが、優勢なる敵は逐次西方に進出し、二十四日奮戦の後、地区隊長加藤中佐の戦死と共に、マッフィン地区は敵手に委することとなつた。師団はこれに對し兵力を転用して二十七日敵の前進部隊を攻撃してその進出を阻止した。

〔攻撃に前進〕 トル河右岸においては二十五日以来攻撃準備中だつた松山支隊が、二十七日夕第七飛行師団の適切な爆撃協力の下に、トル附近の敵を攻撃して海岸に達し、ワクデ方向に舟艇によつ

て退却する敵に追撃射撃を加えた。同日歩兵第二百二十三聯隊主力はアラレ附近の敵の前面に進出し攻撃を準備しつつあつた。——この日は敵がビアク島に上陸を開始した日でもあつた——従つて爾後の戦闘は同師団友軍の急に策応すべく猛烈果敢に相次いで実施せられた。

即ち五月三十日歩兵第二百二十三聯隊主力は、アラレ附近の敵を夜襲して一部は敵陣に突入り、火砲及び重車輛を破壊し、爾後後退して果敢なる遊撃戦を反復しそれぞれ相当の戦果を取めた。又トル河左岸においては三十一日以来新右地区隊たる歩兵第二百二十三聯隊の一部の奮戦により、六月二日夜マッフィン地区を奪回し、一挙トル河河口方向に敵を圧迫したが、敵の抵抗また逐次頑強となり、爾後五日間に亘る反復攻撃にも拘らず、これを完全に撃退することは出来なかつた。この間トル河右岸松山支隊は、糧食既に尽きたるも屈せず所在のサゴ椰子を食ひ、六月三日トム附近に對し再度攻撃を敢行したが、敵の抵抗は頑強であつて幹部の死傷続出し、戦闘は爾後遊撃戦に移行した。

〔本陣地の防戦〕 六月六日敵はトル河左岸に攻撃を再開し、マッフィン地区において、攻防争奪の激戦が繰返されることとなり、同地区は遂に再び優勢な敵の占領するところとなつた。爾後右地区隊の生存者は、側面にあつて敵の突進を拘束したが、九日敵の一部はイリエル山方面に突進するに至つた。

ここにおいて六月十日師団はトル河右岸の攻勢を断念し、主力を作戦山附近に集結し敵を錯雑地に誘致して撃破するに決し、歩兵第二百二十三聯隊主力は十四日作戦山西側に中地区隊として、又松山支隊は十六日戦闘山及びイリエル山附近に右地区隊として旧右地区隊を併せ指揮し、各その配備に就いた。

六月十八日頃より敵は逐次イリエル山に進出してきた。右地区隊長松山大佐は二十二日、自ら陣頭に立つて終日逆襲したが、一部拠

点奪取のほか奏効せず、自らは右大腿部に貫通銃創を負うた。松山大佐は愈毅然として諸隊を督勵し、二十三日も二十四日も逆襲を回復し、二十四日にはイリエル山最高点を奪回するに至つた。この日イリエル山西麓に上陸を企圖した水陸兩用戦車を先頭とする七、八隻の上陸舟艇を一度は洞窟内山砲を以て見事に撃退したが、敵は更に肉迫火烙攻撃を以て右山砲を制圧し、遂にその上陸に成功した。敵は同日更にその西方ウオスケ地区にも上陸するに至り、師団は戦線を戦闘山及びモラルテレン山の線に收縮し、次いで光丘、八絃山附近の作戰根拠地内に集結し、長期持久の態勢に転移することとなつた。而して当時敵の総兵力は二師団を基幹とするものであつた。この間五月下旬より六月中旬に亘りホランデヤ撤退部隊はトル河上流地区を経て、サルミ附近に到着し、方面軍予めの指示に基き第二軍の集積した糧食により体力を回復しつつ後方勤務に就いた。而してそれは地障、飢餓、悪疫の四〇〇料を突破し得た一部であつた。

4 ビアク作戰

敵はサルミ附近上陸の十日後、即ち五月二十七日ビアク島に上陸を開始し、濠北方面乃至全戦局に一転機を画するビアク作戰が展開された。

〔戦備〕 既述したようにヘルヴィング湾は、第二方面軍並びに南方軍の新統帥発動以来、本防禦線上の決戦正面として、当初よりその価値を重視してきたところであり、且つビアク島は湾内第一の要点を成すものである。しかるに大本営は二、三月においては兵力の転用、五月初頭においては再度の確保要線の後退指令と兵団前送の拘束等があり、現地の戦備強化は彼我双方より阻碍を受けつつ事態は推移した。

前年十二月二十五日第三十六師団の一部が第二軍直轄のビアク支

隊として上陸以来現在までに同島に配置せられた部隊は、葛目直幸大佐を長とする歩兵第二百二十二聯隊の大部、師団後方部隊の一部、野戦高射砲一中隊、飛行場設定隊三隊、軍直轄後方勤務諸隊の各一部並びに航空地区部隊等であつて、ほかに海軍部隊としては千田貞敏少将の指揮する第十九警備隊基幹の諸隊であつた。

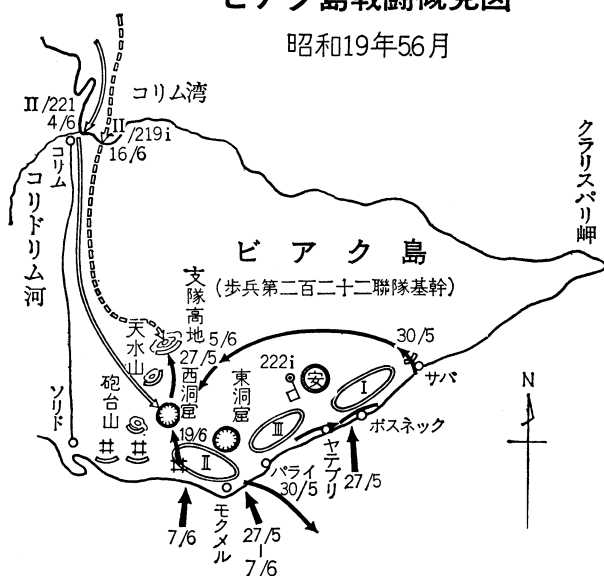
第二方面軍はその濠北への進出にあたり大本営より、同方面の作戰に際しては二箇の飛行師団を推進せらるるとの指示を受けていた。方面軍はその航空全力を主決戦正面たる西部ニューギニア北岸地域に集結運用する策案を樹て、本防禦線の編成もまた集団飛行場を中核とする支撐点方式とした。ビアク島はこの方面の重要支撐点であり、従つて先づ航空戦備を優先重視することとなつた。支隊長葛目大佐が軍旗を奉じ、航空基地の建設を督勵するの日の続いた。しかるにこの期に至り第六飛行師団はホランデヤ以東の作戰において殆ど潰滅し、在来の第七飛行師団といえどもその出動機数は四、五〇機を出でない程度の補充状況であつた。この方面担任の海軍第二十三航空戦隊もまた二〇機に足らなかつた。

ビアク島は五月上旬以来連統敵の爆撃を受けた。敵の上陸當時における支隊は、第一大隊をボスネック附近よりサバ附近に、第二大隊をモクメル及び同飛行場附近に、第三大隊をその中間にそれぞれ配置し、航空地区部隊及び飛行場設定隊は飛行場地区を守備し、ヤテブリ北方に支隊本部及び安藤集成大隊が位置していたものと推定せられる。支隊は兵種の如何に拘らず全力を以て戦闘に任ずるの方針をとり、後方部隊の多くを戦闘部隊に改編して右基幹部隊に配属し自ら戦力の増強を図つた。この間第二方面軍並びに第二軍はヘルヴィング湾戦備強化のため、兵力軍需品の前送及び後方部隊の武装改編等に努力を継続して来た。

〔反撃——沼田參謀長の現地指導〕 五月二十七日午前五時頃より、敵はビアク島東南岸一帯を艦砲射撃及び爆撃し、その掩護下に

ビアク島戦闘概見図

昭和19年56月



七時頃から水陸両用戦車並びに上陸用舟艇を以てボスネック附近に上陸を開始し、海上には約四〇隻の艦船が認められた。折柄視察のため米島中の方面軍参謀長沼田中将は、帰還しようというところであつたがこの戦況を目撃して暫らく現地に止まつて作戦を指導し、射を以てビアクの戦力を増強することとした。

ボスネック附近我れは予め五〇米の断崖上に配備していた。敵は眼下幅約一五〇米の海岸低地に上陸して来た。第一大隊は先ず全火力を以て邀撃し、次いで一部の突撃を行い、それぞれ相当の戦果を収めた。夜間に入り第一大隊主力はボスネック附近に、第三大隊主力はヤテブリ附近に、安藤集成大隊はボスネック附近にそれぞれ活潑に夜襲し、各々戦果を収めた。又第二大隊はモクメル附近の隘路を扼し戦車を先頭に突進し来つた敵を撃退した。

第七飛行師団及び海軍第二十三航空戦隊はこの日全力を挙げて出撃し本作戦に協力し、自らも傷ついたがこれまた相当の戦果を挙げた。殊にソロン飛行場にあつた飛行第五戦隊長高田少佐は勇躍ビアク上空に出撃し、奮戦の後僚機と共に敵艦に体当たり攻撃を決定した。これは特攻の魁であつた。

本作戦にどの程度の航空兵力を使用するやに關しては、南方軍総司令部において激論がたたかわされたが、結局第七飛行師団を以てする協力ということになった。同日海軍は本作戦協力のため第一航空艦隊の九〇機をバラオ方面よりハルマヘラ方面に転用するの部署をとつた。

五月二十八日戦闘は益々熾烈となつた。敵は強引に上陸を続行し、我れは昼間火力戦闘を行い次いで夜襲を復行した。殊に第二大隊はモクメル附近を夜襲して多大の戦果を収め、天明後二十九日も終日戦闘を継続し、配属戦車中隊体当りの奮戦あり、敵を海岸に圧倒し更にこれを東方に敗走せしめた。諸隊の意気は正に軒昂たるものがあつた。この日戦闘の重点は第二大隊正面にあり、支隊長葛目

大佐はこの方面に移り、ソリド方面を警戒して第一大隊の主力をもこの方面に転用したものである。第二十三航空戦隊は中攻を以て巡洋艦及び中型輸送船各一撃沈、その他の戦果を報じた。敵は辟易してアウイ島に軍隊、資材の揚陸を開始したように思われる。沼田方面軍参謀長及び千田第二十八特別根拠地隊司令官は西洞窟にあつて作戦指導に任じていたが、有利なる現戦況に乘じ戦局転換の契機を作すべき旨、それぞれ関係方面に通電した。

〔運作戦〕「ビアク突入作戦」これより先南方軍は、ビアク島の重要性に鑑みザンボンガ（ミンダナオ島西端）にある戦略予備、海上機動第二旅団をこれに推進せんことを企図し、南西方面艦隊と協議中であつたが、敵のビアク上陸の報至るや直ちにその議まともり、大本営またこれを諒承した。

抑々南方軍の本来意図するところは、既述のようにこの方面を決戦支撐とし、空地綜合一体、陸海同時正面の決戦を指導することを以て作戦の根本としたが、航空及び地上戦力の実体は上述の如く、強力なる艦隊の協同また到底望み難く、南方軍はこの重大なる作戦に直面しながら、僅かにその保有する戦略予備を現地海軍部隊との協同により、右の如く推進補填せんとする努力以外には何等の方法も持たせていなかった。ビアク作戦は「あ」号作戦と並んで本期における作戦の枢軸をなした。

即ち既述の如く大本営の企図は中部太平洋方面「あ」号作戦第一主義に決定せられていたが、ビアク作戦開始と共に、俄かにビアク島を固守する方針に変わったものである。

即ち南方軍は、海上機動第二旅団を五月三十一日以後第二方面軍の指揮下に入れ、第二方面軍はこれをビアク上陸と共に第二軍の指揮下に入れることとし、海軍は第十六戦隊（青葉、鬼怒、浦波、敷波、敵島）を輸送隊とし、第五戦隊及び駆逐艦四を警戒隊とし、扶桑及び駆逐艦二を間接護衛隊となし、その主力は六月一日ダバオに

投錨し、海上機動第二旅団長玉田少将、第十六戦隊司令官左近允少将並びに南方軍、南西方面艦隊、第二方面軍及び第二軍各主任参謀等会同し、六日四日ビアク北岸コリム上陸の作戦を協定し、該部隊は二日薄暮作戦会議を終えた関係者一同に見送られてダバオを抜錨出陣した。当時このビアク突入作戦を運作戦と称した。

〔善戦敢闘〕この間ビアクの奮戦はなお続いた。五月三十日第七飛行師団及び第二十三航空戦隊の出撃は継続せられ、ビアク島においては第二、第三大隊の攻撃により、ヤテプリ以西モクメルに亘る一帯の敵は主力を撃砕せられ、ボスネック及びオウイ島方面に退却した。当日諸隊の活動は目覚しく水際撃滅将に成らんとするの概があつた。但し左翼にあつては第一大隊転用のためサバ附近の敵が一部台海上に進出することとなり、支隊長は同大隊を急遽この方面に反転を命じた。同夜安藤集成大隊の一部はヤテプリ西北方地区に進出せる敵に対し夜襲を行つた。この日沼田方面軍参謀長は、この戦機を捕捉すべき旨重ねて関係方面に電報を發した。

この間既にそれぞれビアク増援の処置が講ぜられていた。第二軍（司令部マノクワリ）は所有する大発の全部約十隻を挙げて第三十五師団（師団長池田浚吉中将）——司令部は既にマノクワリに進出しあり——をして約一箇大隊をビアクに増援せしめ、又方面軍は、第四南道艦隊の協力を得て、引きつづき兵力及び軍需品の前送を継続した。

ビアク支隊の健闘は更に続いた。五月三十一日第三大隊は各小部隊を以て当面の敵を攻撃しその進出を阻止した。同夜第一大隊は反転に引続き、台上進出の敵を夜襲し、第一線を突破して宿營地を攻撃し多大の戦果を挙げたが、天明後敵の火力により大隊長以下多くの損害を蒙るに至つた。

以上支隊の善戦敢闘も酷熱の地、水とそして糧食も不足勝ちな悪条件の下に戦われたのである。即ち台上水の所在は限定せられてお

り、又糧食は敵の上陸により海岸集積の多量を喪失した。

六月一日以後台上の敵は第一大隊の果敢なる反撃にも拘らず機械力を以てジャングル内に道路を開設して重材料を推進し、緩徐な西進を開始した。

〔運作戰中止——最後の希望絶ゆ〕 運作戰部隊は出発の翌日、即ち六月三日、敵機二の接触を受け、又敵の機動部隊がビアク方面にあるらしいというので、同夜聯合艦隊司令長官は惜しくも運作戰を中止し、輸送隊はソロンに至り機を見て作戦を復行すべき旨命令を発した。かくして期待したビアク決戦最後の希望も、空しく消え去つてしまつた。

〔奮戦——運作戰二度、三度中止〕 敵の台上進出部隊は我が反撃に阻碍せられ緩慢なる前進ではあつたが、六月四日には東洞窟、五日には西洞窟を射撃するに至つた。第三大隊は腹背に敵を受けながら善戦克く海岸正面の敵の進出を撃退したが待望の運作戰部隊は遂に來らず、第二軍の処置せる増援第二百二十一聯隊第二大隊だけは、四日予定の如くコリムの上陸に成功し逐次西洞窟に向つて前進した。第七飛行師団及び海軍航空部隊はこの間主として増援の敵艦船並びにオウイ島とワクデの制圧を行つた。海軍航空は第一航空艦隊より増援せられその戦闘も目覚ましいものがあつた。しかしこの転用部隊が機動とマラリヤのため多くの戦力を消耗したことは残念であつた。五日敵は五日間の損害三千余名なるを報じその苦戦の状また歴然たるものがあつた。

支隊長はヤテブリ北方にあり、先の反撃に続いてボスネック附近の残存敵主力を夜襲するに決したものの如く六月六日第二大隊主力をこの方面に招致した。しかるに不幸にも新たな敵が七日モクメル飛行場正面に上陸を開始した。支隊長は直ちに夜襲企圖を中止し、第二大隊を反転原態勢に復帰せしめた。同大隊は天山水山に到着したが、敵火のため昼間における爾後の前進は困難であり、そして敵の

上陸は逐次進歩した。西洞窟にあつて作戦指導中の方面軍參謀長沼田中将は八日支隊長の指揮及ばざるバライ以西の諸隊を以てモクメル飛行場附近の敵主力を夜襲するに決し、第二大隊主力と集成の佐藤部隊とをこれに当てた。しかるにこの夜襲は天明後敵火のため相當の損害を受け旧位置に復帰した。第二大隊長牧野少佐は本戦闘において遂に戦死した。この間第三大隊は依然その陣地を保持して敵と至近距離に相對峙した。九日支隊長は西洞窟に至り沼田中将と會し、諸隊を完全に掌握し、支隊主力を此の方面に集結せんことを企図した。

沼田方面軍參謀長は阿南方面軍司令官よりの再三に亘る帰還命令あり、又葛目大佐、千田少将より運作戰促進のため速かに帰任せられたく懇請されたため、第二軍増援輸送の舟艇により帰任の途に就いた。

海軍は六月八日第十六戦隊を以て約六百の兵員を輸送する運作戰の再興を企図し、コリム沖まで到着したが、敵艦隊と遭遇して不成功に歸し、又十日には第一戦隊（大和、武蔵）及び第二水雷戦隊を運作戰部隊に編入して三度復行を企図したが、いずれも戦機は既に去つていた。そして六月十三日聯合艦隊の「あ」号作戦決戦用意の発令と共に、さしにも迂余曲折を重ねた運作戰もここにその一切を解消することとなつた。

〔死闘——葛目大佐軍旗奉焼、自決〕 六月九日以後モクメル飛行場正面海岸の敵は更に圧倒的空军、艦砲、重砲その他全火器を挙げ、中戦軍を先頭に逐次北進し、台上の敵と呼応しつつ攻撃の重点を西洞窟に指向した。これに対し第一、第二大隊は天山水山附近、第二百二十一聯隊第二大隊は西洞窟附近に在つて、肉迫攻撃、出撃及び火力戦闘を併用して、連日連夜敢闘を続けた。この頃に至り支隊の火砲は大部を破損したが、長谷川高射砲中隊のみは健闘を続け、対空対地の戦闘に戦果を挙げた。六月十一日敵は漸く右端に進出し

たが、疲労困憊甚しくその前進は遅々たるものであつた。而して此の間南中佐（第十四野戦飛行場設定隊長）の指揮する集成部隊は東洞窟附近にあつて飛行場を制圧し、又第三大隊は近接戦闘に入りながらも旧陣地を死守していた。

かくて敵軍団長アイケルバーカー自ら第一線に進出し、態勢整理の上六月十九日総攻撃を開始した。——この日マリアナ方面においては聯合艦隊が再びZ旗を掲げた「あ」号決戦が開始された。——支隊長葛目大佐は西洞窟にあり、二十日敵の攻撃を撃退しつつも、既に最後の迫れるを察し、軍旗を奉焼して、御紋章、旗竿及び房の一部を残し、房はこれを各大隊に分配した。二十一日敵の執拗なる攻撃は続き、西洞窟は完全に包囲され、戦車砲及び火焰放射器等の攻撃を受けた。諸隊は決死敢闘、洞窟入口には死屍累々として凄惨を極めた。

ここにおいて支隊長の胸中、既に期するところがあつたが、千田少将及び部下の切なる諫止により、漸くにして思い止まり、二十二日夜暗を利用して西洞窟を脱出した。支隊長に従う者、聯隊本部五〇名、通信隊四〇名、第一大隊四〇名等僅かに百数十名で装備は小銃と擲弾筒のみであつた。脱出に先だち、歩行不能なる重傷患者約百数十名が、皇国の必勝を祈りつつ、莞爾として各々自決を遂げ、主力の脱出を容易ならしめたことは悲壮の極みであつた。

残つた支隊主力は西洞窟西北方高地線（支隊高地と称す）に、第二大隊主力は天山水山北方高地にそれぞれ陣地を占領し、又第二軍が苦難を冒し新たに増援した第二百十九聯隊第二大隊到着して新鋭の戦力を加え、更に抗戦を続けた。六月二十七日頃より敵は陣前に近迫し、戦闘は連日惨烈を極めた。

東洞窟の戦闘は六月二十八日南中佐の自刃を以て終りを告げ、これと相前後して第三大隊の陣地も同様惨烈なる戦闘の後、敵手に落ちた。敵の戦場兵力は軍団長の指揮する約一師団半を基幹とするも

のであつた。

支隊長葛目大佐は七月一日副官に託するに、後方高地に後退し、奉焼軍旗を護持して、飽くまで敢闘すべきを以てし、自らは洞窟において従容として自決を遂げた。かくして葛目大佐はビアク島防備、即ち飛行場を中核とする決戦支隊たるの任務とその運命を俱にした。これと偶々日と同じうして阿南將軍は今後のビアク作戦に關し遊撃戦に転換して過早の玉砕を避くべき旨訓令を発したが、その到達はおくれた。

ビアク支隊が僅かに歩兵一聯隊とその配属部隊とを以て、敵の大軍を引受け、月余に亘り断乎この戦略要点を確保したその必死敢闘振りには壮烈殉に鬼神を泣かしむるものがある。

その後この部隊は戦友の遺志を継ぎ久しきに亘つて果敢不屈の遊撃戦を継続した。第二軍は舟艇による挺身隊を派遣して連絡をとり、又空輸補給を行つたが、八月中旬以降地上との連絡が杜絶した。

〔マンホル及びサンサポールの戦闘〕 ビアク西方のマンホル島は七月二日敵が上陸し、同島を準備していた歩兵第二百十九聯隊長の指揮する同第三大隊基幹（第三十五師団所屬）の部隊も、当初上陸点に向い主として夜襲による果敢なる反撃を反復したが、遂に目的を達することが出来ず、後退して同島中央の高地に抛り遊撃戦を継続した。

又、フォゲルコップ半島マル及びサンサポール附近には七月三十日敵が上陸し、第三十五師団はソロンより補給の困難を冒して遊撃戦を継続した。

5 アイタベ作戦

四月下旬以来の西部ニューギニアに対する矢継ぎ早の攻撃は、東部ニューギニアに在つた第十八軍の孤立を決定的ならしめた。しか

し同軍の戦意はこれを以て挫かれることなく、生命の存するかぎり抗戦を継続し、以て友軍の決戦に策応せんとするの意志に燃えた。

〔攻撃準備〕 第十八軍司令官が、敵のアイタベ、ホルランデヤ上陸直後、同地の奪回を決心したことは既に述べた如くである。当時第十八軍の兵力は、新転属のアイタベ以東所在の第四航空軍所屬部隊及び海軍第二十七特別根拠地隊を含め、合計五万五千であり、実戦力としては一師団半強に過ぎなかつた。即ち第二十師団は六割、第四十一師団は八割、第五十一師団は三割の戦力を保持するに過ぎなかつた。右兵力のうち軍は第二十一、第四十一師団の全力と第五十一師団の一部等、合計約三万五千をアイタベ攻撃に部署し、第五十一師団の主力等計約二万を以てウェワタ地区の作戦基盤を確保せしめることとした。

而して第二十師団の緒戦は極めて順調であつたが、軍主力の攻撃準備は容易には進展しなかつた。ウェワクからアイタベまで約一三〇キロの兵站線を推進するため、当初自動車道を構築すると共に大発輸送を極力利用する計画であつた。ウェワクより約六〇キロの急造自動車道が工兵部隊の努力によりジャングル内に構築されたが、不運にもこの年は五、六月がこの地方の雨期にあたり、急造の自動車道は連日の降雨のため泥濘と化し殆ど自動車通過を許さなかつた。

又大発輸送も適当な達着点と秘匿位置を欠いたため、ウェワクの西方約六〇キロの地点までしか軍需品を前送することが出来なかつた。

馬のない第十八軍の軍需品の前送は、勢い主として人力担送によらなければならなかつた。この目的のために兵站部隊の主力約七千が部署されたほかに、将来攻撃の第一線に立つべき第四十一師団の主力と第二十師団の一部をも使用するを余儀ならしめた。敵は艦艇十数隻を以て海岸地帯を絶えず監視し猛射を繰返した。しかも道は泥濘であつた。かかる状況にも屈せず各部隊は聯隊長級の将校以下ネパール兵に至るまで軍需品の前送にその努力を傾けた。当時

ウェワク地区における空襲被害増加のため糧食の絶対量は逐次減少し、日々の定量は三分の一に減ぜられ、将兵の体力は衰え患者は累増し、それに逆比例して担送能率は急激に低下していつた。

遙か西方において戦われたつあつたサルミ、ピアク等の奮戦に依るために、攻撃開始はなるべく早いことを必要とした。しかし予定の六月上旬末に至るも軍需品の集積量は予定量に達せざること甚だ遠く、攻撃開始は延期の已むなき状況であつた。

〔決心の再確認——安易に就かず〕 第十八軍汝々營々の攻撃準備の間、一方においては、西部ニューギニヤ方面全般戦況の変化に基づき、更に、第十八軍任務の変更が行われた。即ち大本營は六月二十日附を以て第十八軍を第二方面軍の隷下より除き、南方軍の直接隷下に入らしめ且つ「第十八軍をして東部ニューギニヤの要域に於て持久を策し全般の作戦遂行を容易ならしむ」る如くすべきを命じた。

右に基く南方軍命令は六月二十一日第十八軍に到着したが、この命令は軍司令官に対して全く自由裁量の余地を与えており、それは消極的な目で見れば健在主義の意にも解し得るものであつた。

今や軍司令官は振り出しに戻つて決心を新たにする必要に迫られた。担送に任ずる将兵の労苦が真に絶大なものであり、これが長期続行は將兵の大部を失うの結果に陥るであろうことは安達軍司令官の熟知するところであつた。安達中将は又反面將兵の士気が異常に高揚し、病氣のため攻撃に参加出来ないことを悲しんで自決した幾多將兵のあることを知つてゐた。一方当時の西部ニューギニヤの戦況は、よし我れに非なりとするも絶対国防圏なるものはなお存し依然激闘が繰り返されつあつた。時あたかもマリアナの激戦がたたかわれつあつた。正に絶対国防圏上の決戦機であると判断された。又アイタベに対する攻撃準備そのものも、過去二カ月必死の努力によつて今や概成しつあつた。

各種要素を綜合して、敵上陸當時の決心の誤りに非ざることは明かであつた。しかしながら安達中將を最も苦しめた更に他の一要素があつた。前記諸考察がよし誤りに非ずとするも、既に一年有半に亘り言語に絶する辛酸を嘗め尽した部下將兵をして、再び苦難の死地に赴かしめるべきか否かの問題がそれであつた。この問題につき、安達中將は戰術的に何等か解決法なきやと日夜熟慮を凝らしたが、手持の糧食二カ月分を以てしては結局可能の道は発見されなかつた。

軍司令官安達中將は以上の如き事情を考慮しつつ六月三十日前線に進出し、更に一夜の熟考の後遂に予定の攻撃断行を決心した。しかしながらホルランジャに対する作戦は今や到底望み得ないものとなつたので、作戦目標をアイタベにのみ限定した。果してアイタベを奪取し得るや否や多大の疑問がない訳でもなかつたが、これが奪取は全軍士氣の象徴でもあり願望でもあつた。或は單に敵をアイタベ方面に牽制するのみの結果に陥る虞れなしとするも軍主力の攻撃により、且つは牽制の効果なるべく大にし、且つは国軍の決戦に任ずる他方面部隊の敢闘に應えんとする趣旨であつた。この悲壯な決心は左記要旨の訓示を以て部下將兵に伝えられた。

〔軍司令官の訓示——大義捨身〕

惟ふに日米戦局は愈々重大化し且下西部ニューギニア、サルミ及びビアク島方面並に中部太平洋サイパン島方面に於て兩軍主力の決戦を惹起しあり。且本土の一部も空襲を受けある状況にして形勢必ずしも逆睹し難きものあり。本職從來の決心の如くホルランジャの奪回に依りニューギニア方面に於ける戦勢を一挙に打開するの方途は今遽かに望み難く軍は茲に東部ニューギニアに於て絶対不退転の境地に独立せざるべからざる戦況に立ち到れり。

本職は深く信愛する全軍將兵の心事を憶ひ断腸痛心斯の事に外ならず。然れども靜かに国史を想ひ又現下に於ける他方面軍の状

況を觀るに遠征の軍として斯くの如き状況に遭逢すること敢て稀なりとせず。本職は茲に先訓を懷ひ更に不屈の信念を振起し全軍相率ゐて皇軍獨特の本領發揮に邁進し以て国史の光榮に副はんことを期す。而して其の道たるや要は要地確保持久と敵戦力の破摧とに存す。雖も国軍諸般の形勢を按ずるに之を戰略戰術的に解決すべき合理的の方策を求め得ず。本職は此の難局に処する方策を国軍多年の鍛練に係はる軍人精神の教ふる道に求めんとす。

今や敵は正にアイタベ附近に我好餌を呈しあり。是れ天佑にして軍の有する戦力を最も有効に發揮し敵戦力を撃滅し得べき絶好最後の機会なり。若し夫れ当初より持久を主とせんか終に軍の有する戦力を發揮し得ずして悔を千歳に遺すに至らんこと必せり。持久の如きは猛号作戦の孤遺を以て実施して足らんのみ。況んや西部ニューギニアに於て国軍主力が死闘しある現下の急迫せる状況に於ておや。乃ち本職は愈々意志を鞏固にして全軍渾身の努力を此の一挙に凝集しアイタベ附近の敵に徹底的攻撃を加へ之を撃滅して且は軍の収むる戦果に依り全軍の士氣を作興し且は西部ニューギニアに於ける友軍の健闘に應へて急迫せる戦況に策応し以て皇軍の眞価を發揚せん。是れ今大作戦の終局的意義にして本職の誓つて達成せんとする宿志なり（中略）

夫れ必勝は吾人夫々其の任務に渾身の努力を献げ之に殉ずるに於て初めて求め得べく皇國の光榮は各人夫々皇國の危急に殉じ悠久の大義と無窮の国史に生くるの道を全くするに於て初めて折念し得べきは諸子の既に熟知するところなり。而して今や全軍を挙げて此の関頭に立つ宜しく畢生の努力を傾倒して皇軍の本領を余すところなく發揮し悔を千歳に遺さるることに於いて遺憾なからむことを期すべし。

〔攻撃計画〕第十八軍の反撃企図を察知した敵は上陸後引續きアイタベ附近の兵力を増強し、軍団長指揮の下にこれが防備に努めつ

つあつた。アイタベの直接防備のためには約一師団のほか多数の工兵部隊を使用し、永久築城を構築中なるものの如く、又別に歩兵約三大隊及び砲兵一大隊の兵力はアイタベ東方約二〇キロの坂東川（ドリーニモール河）の西岸に進出して前進陣地を占領し我が第二十師団と相対峙していた。坂東川は川幅約五〇米（河床は一〇〇乃至一五〇米）、水深五〇乃至八〇浬であつたが、流速は三乃至四米にも達し可成りの激流であつた。同河西岸の敵前進陣地は海岸のパウプより、トリセリー山系の北麓のアフア高地帯に亘る正面約七キロの線にあつた。

右のほか、敵はアイタベを基地とする約六〇機の飛行機及び約一〇隻の巡洋艦以下の艦艇を以てアイタベ周辺の海空を制し、且つ第十八軍の攻撃準備を妨害しつつあつた。

右の如き敵情に対し第十八軍が七月一日樹立した攻撃計画の大意は次の通りである。

一、第二十師団の主力及第四十一師団の歩兵第二百三十七聯隊を以て七月十日夜坂東川を渡河し敵前進陣地の中央部を一举に突破する。

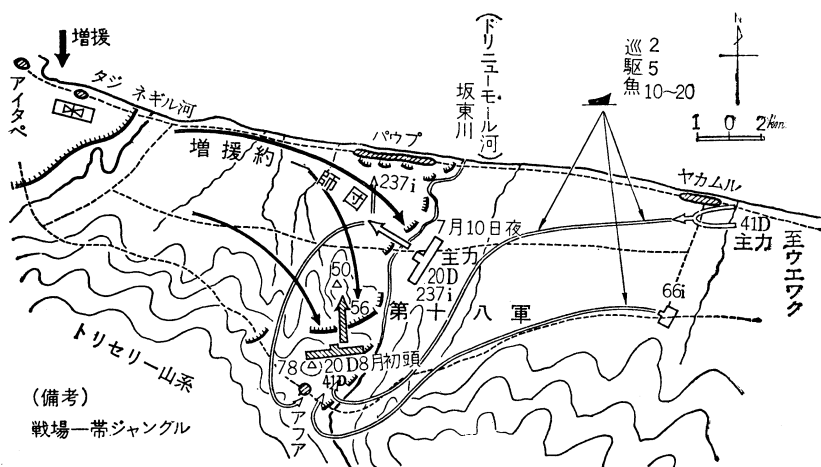
二、右突破に引続き急速にアイタベの敵本陣地に迫り所要の準備を整へた後、軍の全力を揮つて之を攻略する。此の間の補給は両師団携行するの外全兵站部隊の突込輸送によつて維持する。

三、アイタベ攻略後の補給は、アイタベの舟艇秘匿位置を利用してウェワクより大発輪送するの外、敵糧に依る。

四、全作戦を通じ主決戦は海岸の平地方面に求める但し一部を以て山地方面より敵の側背を脅威して主力の攻撃を容易ならしめる。

〔坂東川の渡河戦〕 四月末以来千辛万苦に打ち克つて準備された攻撃は愈々七月十日夜十時、川中島附近の坂東川渡河戦を以て開始された。第一線は右より歩兵第二百三十七、第八十、第七十八聯隊

アイタペ作戦経過要図



の順を以て、狭正面に戦力を集めて一奮に坂東川を押し渡つた。我が渡河を知つた敵は猛烈な銃砲撃の集中を以てこれに応えた。我が損害は多数に上り坂東川の流れもために朱に染まるかと思われるばかりであつたが、各第一線部隊は不屈の攻撃により敵の河岸陣地の奪取に成功した。

爾後、歩兵第二百三十七聯隊は右に旋回し、又第二十師団の部隊は左に旋回して敵の残存陣地の掃蕩とアイタベの本陣地に向う急追準備とを開始した。この行動は初期、特に第二十師団正面においては順調に進捗しつつあるかに見えた。しかるに、一度退却した敵は十三日頃より海岸道及びジャングル内の諸通路を利用して我が間隙より旧陣地に向つて侵入を開始した。海岸道及び旧渡河点附近の諸処において彼我の間に遭遇戦の戦闘が始まつた。

事態の容易ならざるを察した軍司令官は、第四十一師団をしてアイタベに対する本攻撃の準備を一時中止し、その主力を戦線に増加して渡河点を確保すると共に戦果を拡張せしむる如く指導した。しかし敵の兵力増加の速度は我が第四十一師団のそれを上廻り、十七日までには我が渡河点確保部隊約一大隊は優勢な敵歩砲兵の攻撃のために玉碎するの悲運に陥つた。敵は完全に旧河岸陣地を恢復し、我が歩兵第二百三十七聯隊は敵中に孤立するに至つた。

一方第二十師団長は敵陣地の右翼たるアフア附近の高地帯を奪取して該方面に進路を開拓するに決し、十八日より予備隊であつた歩兵第七十九聯隊を自ら指揮して敵陣地の最右翼を繞回して坂東川を越え、アフア地区において、反撃攻撃し來つた敵と既に半遭遇戦的な戦闘を交へつたあつた旧第一線部隊の激闘に加入した。

〔坂東川西岸の決戦〕 今や戦況の大変化が認められた。両師団の当面する敵兵力は攻撃開始時のものに数倍し、一師団を下らないものと判断された。敵がアイタベ附近の主力を推進して、坂東川畔において我れに決戦を求め來つたことは最早明瞭である。これに対し

て我が戦力は両師団合するも漸く実力一師団程度に過ぎず、特に火砲は約二十門のみの劣勢であつたので当面の敵を撃破するためには軍の全力を揮う必要が認められた。更に問題だつたのは補給の關係である。第十八軍の手持糧秣が三分の一の定量で八月末までの分であつたことは前述の通りであるが、作戦後の各種状況を考慮すれば若干の予備を保有しなければならなかつた。

ここにおいて、第十八軍司令官は七月二十一日、目下坂東川畔に相見えある敵主力との決戦に軍の全力を使用するに決した。アイタベの敵本拠に対する急迫のために控置してあつた歩兵第六十六聯隊は第二十師団に増加され、同師団は先ずアフア高地帯を奪取し次いで海岸方面に戦果を拡張する如く命ぜられた。第四十一師団主力は、第二十師団の攻撃の進展に策応し二十六日頃より再び川中島附近において坂東川を強行渡河する如く準備を開始した。

第二十師団の攻撃は徐々に逐次成功を収めた。一方第四十一師団正面の敵河岸陣地は逐次堅固となり、砲兵力の少い我が方としては渡河攻撃至難と判断されるに至つた。そこで軍司令官は二十六日早朝、第四十一師団をも第二十師団方面に転用し両師団の戦力を凝集して最後の攻撃を敢行するに決した。

第四十一師団の再展開には数日を要したが、八月一日より第二十師団の直接右翼に連繫して攻撃を開始した。軍司令官もまたアフア附近に戦闘司令所を進めて親しく戦闘を指導するところがあつた。両師団將兵およそ人間として發揮し得る最後の力を絞つて攻撃を強行した。ジャングル内の肉迫攻撃は繰返され、八月三日頃までには概ね敵陣地の右翼地帯を制し海岸に向う戦果拡張を期待し得るに至つた。

しかしながらこの頃、七月十日以来約二十五日間の連続的激闘による冷徹な戦力の消耗が如実に訪れつつあつた。米軍の百数十門を算する砲兵及び迫撃砲火のために突撃歩兵大隊が一瞬にして全滅

するが如きことも一再に止まらなかつた。八月三日頃には各歩兵聯隊の残存兵力は概して約百名、少きは僅かに三〇名となつてしまつた。その上、担送能率低下のため糧食も数日前より尽きつつあつた。第一線部隊は既に久しく一日に何勺かの生米を囓りつつ攻撃を強行してきていたが、その生米さえ尽きようとしていた。勿論敵の遺棄糧食や現地の野草類も利用されたが、これらとて全体から云えば極めて少量に過ぎなかつた。かくして、生存者といえども今や全く精魂尽き果て、これ以上の攻撃続行は最早如何にするも不可能の状況となつた。而して当時アイタベを含むこの方面における敵の兵力は約二師団を算するものであつた。

当初期待したアイタベ奪還を果し得ず、今や又眼前の敵を今一步のところでは海岸に圧倒撃滅出来ないのは全將兵の如何にも残念とするところであつた。しかしこれ以上の攻撃は、極度に伸び切つた態勢のまま軍主力を無意味な餓死に陥れること火を賭るより明かであつた。かくて軍司令官は八月三日、自主的に攻撃を打ち切り、ウェワク地区を核心とする新たな邀撃作戦に移行するに決した。當時、眼を他方面戦況に転ずれば、マリアナは既に敵手に落ち、新戰場は比島に移りつつあつた。

〔その後——東方機動〕 現実の攻撃は八月四日正午を以て打ち切れ、各部隊は同夜より再び坂東川を渡つて東方に機動を開始した。坂東川畔に散つた幾多戦友の英霊に対しては後髪を引かれる想いであつたが、二十数日間人力の限りを尽して全く刀折れ矢尽きる

第七章 マリアナの失陥

1 敵のマリアナ来襲

〔敵の来襲〕 六月上旬、第二方面軍及び聯合艦隊がビアク増援の

まで戦つた清々しい満足と、これにより些かでも西部ニューギニア方面友軍の作戦に策応し得たであろうという慰めとを以て、全將兵は東を指した。

しかし、この心の満足に引き代へ現実の軍の姿は慘憺たるものであつた。当面の敵は八月初頭より我が右翼方面に攻勢を採りつつあつた。この攻勢は反転した我が一部兵力によつて巧みに阻止されたが、衰え切つた体力を以てする東方機動は容易ではなかつた。現地のサゴ椰子に糧を求めながらの前進は遅々として進まず、僅かに約二〇軒の距離の移動に十数日を費した。この時の兵力約二万二千、攻撃開始時の兵力に比し約一万三千（第一線両兵団約八千、後方部隊約五千）の減耗であつた。

ヤカムル、マルヂップに集結した各部隊は最後の糧食十五日分を受領してそれぞれの新配備地へ向う前進を開始した。第十八軍の計画は軍の主力を以てウェワク及びブーッ地区並びにその南方山系を、又海軍第二十七特別根拠地隊を以てカイリ及びムシウ両島をそれぞれ確保し、急速に現地自活の施策を講じつつ敵の来攻を邀え撃たんとするものであつたが、軍作戦指導の根本精神は飽くまでアイタベ決戦の続行にあつた。

ともあれ、第十八軍將兵は最後の糧食十五日分を以て、自らの衰えた体力で多数の病める戦友を擁しつつ、かねて期したるより險難にして悲惨なるべき機動についた。時は八月下旬であつた。

ため渾作戦の復行を重ねつつあつた頃、中部太平洋のマリアナ群島に対する敵来攻の兆が逐次濃化しつつあつた。即ち我が中部太平洋方面の前方基地トラックは、二月の大空襲以後更に四月一日及び同

月末の二回に亘り敵機動部隊の攻撃を受けたが、五月二十日及び二十一日の両日には南鳥島が、又二十四日にはグワム島がその攻撃に曝された。一方敵の基地航空もまた五月下旬マリアナ方面に偵察攻撃を加えて来た。

六月十一日に至るや、敵群より成る敵機動部隊（各群空母二―三、戦艦又は巡洋艦三―四隻基幹）は突然グワム島東方一七〇哩附近に現出し、サイパン、テニアン及びグワム島に対して空襲を開始した。攻撃は特にサイパン及びテニアンに対して猛烈であつた。翌十二日も攻撃は続行され、この日サイパンに対する来襲機数は五〇〇機を算した。攻撃目標は主として飛行場、港灣施設、工場及び陣地であつた。

六月十三日敵は空襲を続行すると共に、新たに戦艦八、巡洋艦三及び駆逐艦約三〇隻を以てサイパンの艦砲射撃を開始した。我が海軍砲台、高射砲陣地及び主要建物は終日猛射を受けた。我が人員資材の損害は軽微であつたが、敵の上陸は今や略々明白となつた。

六月十四日も敵のサイパンに対する砲撃は続いた。更に午前七時三十分より敵は小舟艇を以てオレイイ正面のリーフの偵察破壊を開始した。

六月十五日午前四時三十分、敵の輸送船二五乃至四〇隻はガラパン西方沖合に現出し、猛烈な艦砲射撃の支援下に午前七時四十分より舟艇による上陸を開始した。敵の上陸正面はオレイイよりチャランカノア南側に亘る地区にして第一回の舟艇群はアリゲーターを含む約一二〇隻を算した。上陸兵力は約二師団と判断された。^{（註）}

註 この日上陸した敵兵力は海兵二師団であつた。米軍は翌十六日更に陸軍の一師団を増強した。

〔マリアナ基地航空の潰滅〕 マリアナは日本本土に対する太平洋の防波堤である。この故にこそ日本海軍が昭和十八年七月以来各種の不利を忍びつつ決戦兵力として鋭意整備に努めたところの第一航

空艦隊（第五基地航空部隊）の主力が配置され、マリアナ方面に「あ」号作戦生起の場合には特にはその主役を演ずべき立場にあつた。

五月下旬頃、艦隊司令長官角田中将はその司令部をテニアン島に置いて第六十一航空戦隊を直率していた。第二十二及び第二十六航空戦隊はその司令部をそれぞれトラック及びパラオに置いてカロリン及びマリアナ方面の作戰を、又第二十三航空戦隊はその司令部をケンタリーに置いて主として濠北方面の作戰を担当する態勢にあつた。艦隊の全整備実数は一、一八八機に達していた。

その後敵のビアク島上陸に伴い同方面作戦強化のため艦隊の約半数に近い四八〇機（主として第二十二及び第二十六航空戦隊所屬）を逐次同方面に転用せられたこと前述の通りであるが、六月上旬その主力は依然マリアナ方面に位置していた。

右の如き態勢を以て第一航空艦隊のマリアナ方面兵力は敵の攻撃を受けたが、その終焉は余りにも呆気なく又瞬間的であつた。即ち我が航空部隊は主として哨戒の不備と後述する聯合艦隊の攻撃抑制方針とに基因して又もや敵の先制攻撃を受け、その主力は六月十一日以後数日間の敵の攻撃により空しく地上において戦力を喪失し、十八日までには少数の攻撃隊の編成さえ困難となつた。固より一部兵力は敵を邀撃し又は艦船攻撃を企てたが大勢を左右するに足るものではなかつた。かくして「あ」号作戦においては我が機動部隊の決戦以前に敵空母兵力の約三分の一を撃滅するはずであつたところの第一航空艦隊は殆ど戦わずしてその主力を失うこととなり、爾後は僅かに残るカロリン方面配置兵力と濠北方面よりの帰還兵力に期待を懸けざるを得ないこととなつた。

〔敵上陸時のサイパン——軍司令官不在〕 当時サイパン島には第三十一軍司令部、第四十三師団主力、独立混成第四十七旅団、戦車第九聯隊、独立山砲兵第三聯隊、高射砲第二十五聯隊及び独立工兵

第七聯隊等のサイパン守備兵力のほか、バガン及びロタ島に移動予定の独立混成第九及び第十聯隊の各第二大隊がおり、その陸軍総兵力は二七、五〇〇を算した。海軍部隊としてはこの方面の最高司令部たる中部太平洋艦隊司令部、第五根拠地隊司令部及び第五十五警備隊等が位置していた。但し第三十一軍司令官小畑英良中将は、当時グワム島の作戦準備指導のため同島に出張中で、サイパン島にはいなかった。

しかし、六月中旬のマリアナ方面陸上の一般状況は敵を逐え撃つべき万全の備えにはなかつた。即ち第三十一軍全般の兵力展開は一応概成はしていたが前述の小部隊の如く展開未了の部隊もあつた。特に前記軍司令官の行動によつても知らるる如く、当方面陸海軍部隊一般は、敵のマリアナ上陸時機は七月以後であろうと判断していた。事実第三十一軍の作戦準備は六月末概成を目途としていたのである。又仮りに七月以前に敵の来攻を予期したとするも特にサイパン島における部隊の実情はこれに十分に即応し得るものではなかつた。即ち同島地上戦闘の骨幹兵力たる第四十三師団は一カ月以前に同島に到着したばかりであり、新配属部隊の掌握は十分でなかつた。築城は敵の上陸当時漸く野戦陣地を概成していた程度であつた。又同島に進出の途中歩兵第百十八聯隊の主力が海没したので、他の一大隊のテナアン島派遣と相俟つて実戦力を五大隊程度に低下せしめていた。

作戦準備の状況右の如く、その上サイパンの上陸防禦方式は水陸撃滅主義により陣地を海岸近くに構築していたため敵の艦砲射撃による陣地破壊は大であつた。敵の上陸正面にあつた歩兵第百三十六聯隊は、或は射撃により或は肉薄攻撃により海岸附近において敵のアリゲーター多数を炎上せしめたが、六月十五日午後に至るや遂に敵をしてオレイアイ、チャランカノア間の地区に幅約四料、縦深数百米の橋頭堡を確保せしめるの已むなきに至つた。

〔地上部隊の反撃〕 ここにおいて第三十一軍参謀長井南敬治少将は軍司令官の名を以て第四十三師団及び第五根拠地隊に対し、敵橋頭堡に対する夜襲を命ずると共に、タナバグ方面に対する敵の新上陸を考慮して第四十三師団の歩兵第百三十五聯隊を軍直轄とした。第四十三師団及び第五根拠地隊の部隊は同夜夜襲を試みたが、地上火力及び艦砲射撃に妨害されて突入するに至らなかつた。

翌十六日敵は依然砲爆撃を続行しつつ新鋭兵力を揚陸しつつあつた。同日第四十三師団長（齊藤義次中将）の直接指揮し得る実兵力は約四大隊及び戦車一聯隊に過ぎなかつたが師団長はその全力を提げて同夜チャランカノア方向に夜襲を決行した。海軍部隊及び陸軍歩兵一大隊がガラバン方面よりの夜襲を以てこれに呼応した。第四十三師団方面においては師団長自ら戦車に搭乗して戦闘を指導した。諸隊の奮戦により、十七日に至るや戦況進展して敵をススベ岬附近海岸に圧迫し正に海岸に達せんとしたが、敵の銃砲火及び戦車の反撃によつて損害続出し、今一步のところで戦力尽き反撃は終に不成功に終つた。

サイパンの南部方面においては、敵はこの日アスリート飛行場地区に対して猛攻を加えて来た。独立混成第四十七旅団（旅団長岡大佐）等所在部隊の努力も甲斐なくアスリート飛行場は十七日夕までには遂に敵手に帰し、我が残存部隊の一部はナフタン半島に圧迫されるに至つた。

この間第三十一軍はグワム島の第二十九師団より歩兵一大隊、トラッタの第五十二師団より歩兵二大隊をそれぞれサイパン島に増援せしめる如く処置したが、いずれも実現しなかつた。

2 マリアナ海戦——「あ」号作戦

〔「あ」号作戦決戦発動〕 敵機動部隊のマリアナ攻撃の二日前、即ち六月九日、我が偵察機が米艦隊の根拠地たるメジューロ港を偵察し

た結果によれば、最近までいた米艦隊の姿が見えなかつた。これは通信諜報とも相俟つて敵艦隊の大規模作戦の迫つたことを示すものであつた。よつて聯合艦隊司令長官は六月十日「あ」号作戦決戦準備を発令した。

果せる哉、敵機動部隊は六月十一日大挙マリアナに來襲したが、聯合艦隊はすぐには決戦用意も決戦発動も発令しなかつた。從來聯合艦隊は、海上決戦はバラオ近海で行われるであらうと予期してゐたので、マリアナを空襲中の敵機動部隊の企図に疑問を持つた。今回の來襲も従来屢々行つたのと同じく空襲だけが目的で、三日間も経てば帰つて行くかも知れず、又他方面に上陸するかも知れないとの懸念もあつたので第一航空艦隊を以て積極的攻撃を差控へしめた。

しかし、十三日の艦砲射撃開始により事態は今や略々明白となつた。かくて同日夕、豊田聯合艦隊司令長官は内海西部の柱島錨地において、「あ」号作戦決戦用意と渾作戦の一時中止とを發令すると共に、第一航空艦隊及び第一機動艦隊より派遣中の渾作戦兵力の原隊復歸を命じた。次いで十五日早朝には「あ」号作戦決戦發動を令すると共に、初めて第一航空艦隊に攻撃開始を命じた。

大本營においてはこの「あ」号作戦を更に強化するため六月十五日發令を以て横須賀海軍航空隊の主力(約一二〇機)を聯合艦隊司令長官の指揮下に入れた。豊田聯合艦隊司令長官は同部隊を以て八幡部隊を編成し、これを硫黄島に進出せしめて第一航空艦隊司令長官の指揮下に入らしめた。この配置を以て、当時の日本海軍の基地航空部隊兵力の殆ど全力が「あ」号作戦に参加する態勢となつた。

【第一機動艦隊の出撃】 「あ」号作戦決戦兵力の一たる第一機動艦隊は五月三日の聯合艦隊「あ」号作戦要領に基き、五月十六日フイリッピン西南部のタウイタウイ泊地に集結を完了してゐた。

當時の實際の整備機数は約三六〇機で定数の約八〇%に過ぎなかつた。その上搭乗員の練度が所望の域に達してゐなかつたので訓練

を向上するの要があつたが、同泊地附近においては殆ど訓練不能であつた。元來タウイタウイ泊地は機動部隊の行動能力に鑑み、なるべく決戦海面に近くという趣旨で決定されたのであつたが、その辺には敵潜水艦蟄集して港外出動訓練は出来なかつた。附近には陸上基地も乏しく待機期間の延長に伴い、練度は却つて低下する一方であつた。

よつて小沢第一機動艦隊司令長官は、泊地を中部比島のギマラスに変更するに決し、六月十三日朝タウイタウイを出撃してギマラスに向ひ航行中「あ」号作戦決戦用意の命令を受領した。小沢長官は直ちに、渾作戦のため分遣中の第一、第五戦隊並びに第二水雷戦隊の原隊復歸を下令すると共に主力は依然航行を続行してギマラスに至り、十四日夕より十五日朝にかけて全艦隊の燃料補給を行つて出撃準備を整えた。時あたかも「あ」号作戦決戦發動の命令に接し、機動艦隊は午前八時ギマラスを出撃してマリアナに向つた。

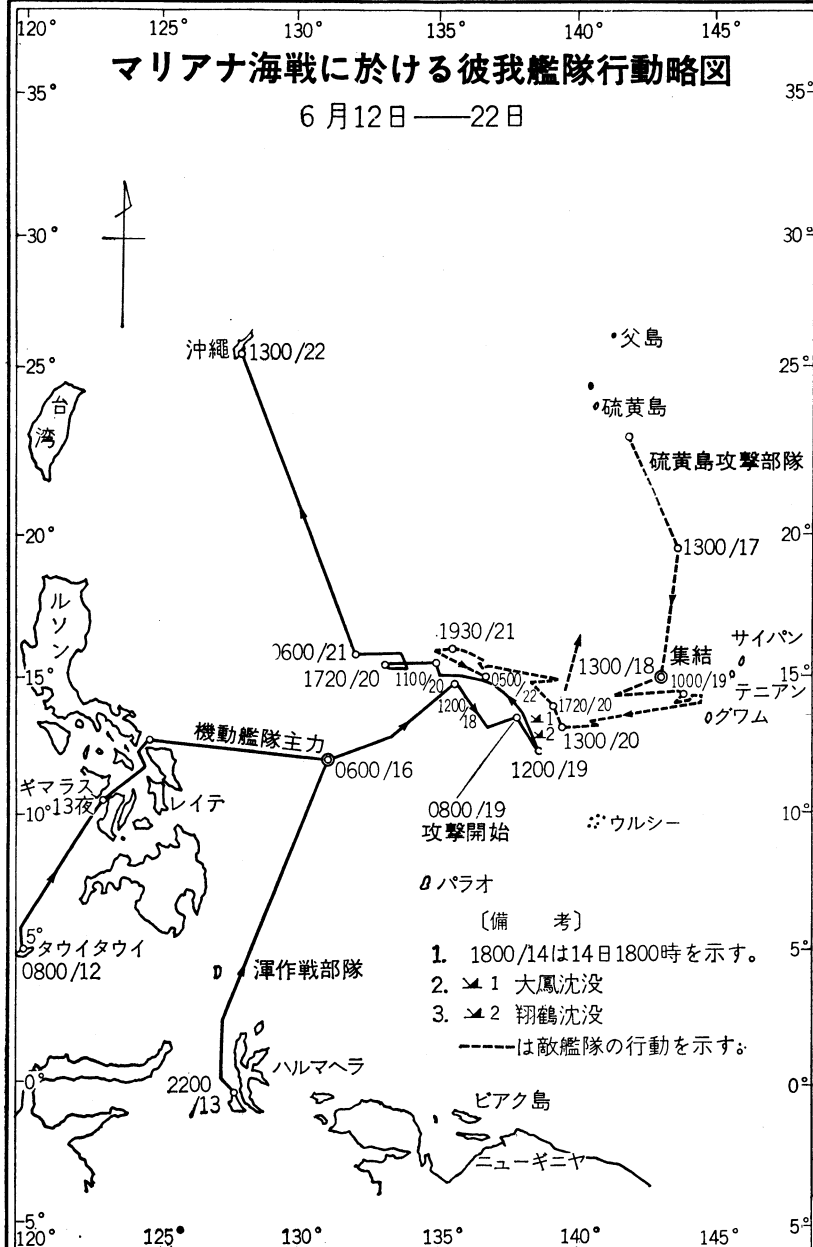
六月十五日夕、機動部隊はフィリッピン中部のサンベルナルジノ海峡を通過中であつた。敵潜水艦の通信傍受により我が部隊の行動が既に敵の偵知してゐるところとなつてゐることが判明した。この頃、小沢長官は諸情報綜合して敵情を大要次の通り判断した。

一、マリアナ方面の敵艦隊は概ね五群より成り、正式空母七隻、改装空母八隻計一五隻を基幹とする米機動部隊の大部である。

二、サイパンに対する現在のの上陸状況は未だ一部開始されたのみであつて早晚大規模な攻略船団が現出するであらう。特空母乃至護衛空母は現在列島線の東方に一部認めるのみであるが決戦前後には相当多数列島線附近に來攻の算が大である。

三、既に我が機動部隊の行動を知つた敵は列島線西方に二分の一乃至三分の一の兵力を配して我れを遡るであらう。

四、列島線附近には最大限全兵力の三分の二即ち空母一〇隻前後の兵力を配するであらう。而してこの兵力は攻略戦の現状より



判断して西進する距離は大でなく三〇〇哩内外と推定される。小沢長官は決戦の時機に關して、決戦海面は我が機動部隊及び基地航空部隊の戦力を最大限に發揮し得る時機を有利と認めたが、一方機動部隊の行動能力特に燃料の關係を考慮するの必要があつた。従つて小沢中将は、決戦を十九日又はその前日に予期し、十九日黎明概ね列島線西方三〇〇哩に進出する如く爾後の前進を律した。

〔第一航空艦隊の潰滅〕 先にマリアナ方面基地航空主力の潰滅に伴い、今や基地航空作戦の期待が濠北方面より帰還すべき四八〇機に懸けられていたことは前述の通りである。しかしこの期待は全く裏切られる結果となつた。即ち主として基地整備の不良と搭乗員の術力不足のため、機材は破損し、兵員はマリリアに冒され、戦力として殆ど期待し得ない状況であつた。勿論濠北方面における作戦損耗もあつたが大部は自滅に等しい結果となつた。

かくして「あ」号作戦決戦に参加し得る兵力としては、内地よりの八幡部隊及びトラック方面に僅かに残る兵力のみとなつた。しかも、悲劇はこれら部隊の上にも襲いかかつた。即ち角田中将はトラック方面部隊の主力を、決戦発動と共にグワム島に転用して決戦に参加せしめんとしたが、同部隊はグワム上空において敵戦闘機群と交戦して兵力を消耗し、爾後は少数兵力を以てサイパン周辺の敵艦船を攻撃したに過ぎなかつた。八幡部隊もまた敵機動部隊と交戦して敵に大なる打撃を与えないうちに決戦兵力としての能力を喪失した。

かくて、我が海軍基地航空部隊の殆ど全力を以て編成した第一航空艦隊も、敵に対して何等有効な打撃を与えず、又我が機動部隊に對して適切な敵情すら与え得ずして潰滅するに至つた。その原因の主なるものとして敵に先制攻撃を許したことが致命的なものであることはいふまでもないが、作戦指導の不適当、搭乗員の練度の不十分及び基地整備並びに設営の不良などが挙げられた。實際「あ」号

作戦に参加して戦闘を実施し得た機数は総数の僅かに二〇%に過ぎなかつたのである。

〔海戦の経過——海戦史上空前の規模〕 第一機動艦隊は、六月十六日東進を続行中パラオ北方洋上において大和、武蔵を含む渾作戦部隊と合同した。十七日夕全部隊の補給を終えて最後の戦闘準備を整えた機動部隊は、十九日黎明サイパンの概ね西方に進出、先ず敵正規空母群を撃砕したる後全力を挙げて敵機動部隊及び攻略部隊の覆滅を図るに決し、愈々決戦態勢を以て前進を開始した。

十八日黎明より索敵開始、午後漸く空母六隻を含む三群の敵機動部隊を東北三八〇哩に発見したが距離遠きに過ぎ、戦闘を翌日に延ばした。この日の索敵により、機動部隊がかねて懸念していた敵機動部隊の北方よりの横懸りの攻撃企図はないものと判断された。

明くれば十九日、黎明索敵で四群の機動部隊発見、午前七時三十分乃至八時三十分の間に第一航空戦隊一二九機、第二航空戦隊四九機、第三航空戦隊七八機の第一次攻撃隊が発進した。彼我の間合は前衛三〇〇哩、本隊三八〇哩であつた。十時頃より第一航空戦隊一八機及び第二航空戦隊六四機の第二次攻撃隊が出撃した。

第一次攻撃隊は十時前頃から攻撃にかかつたが、この日、米艦隊は強力な遠撃戦闘機を配置していたので、これが突破は未曾有の苦戦となつた。目標発見の困難等もあつて敵艦隊に突入攻撃したのは第一次第二次を通じ結局、第一航空戦隊及び第三航空戦隊の第一次攻撃隊のみであつた。第二航空戦隊の第二次攻撃隊は再攻撃の目的でグワム着陸を企てたが、同島上空において敵戦闘機の大群と交戦し六四機中四七機を失つた。第一次攻撃隊の収容は午後三時となつたので、これを以てする再度攻撃は中止された。

この間、旗艦大鳳は第一次攻撃隊発進後敵潜水艦の雷撃を受けて六時間後に大爆発を起して沈没し、翔鶴もまた大鳳の被雷後三時間余りで敵潜水艦に雷撃されて火災を起し、旗艦と相前後して沈没し

た。

翌二十日、小沢中将は將旗を瑞鶴に移し、依然攻撃の続行を決意した。同日機動部隊は燃料補給を急ぎつつ索敵警戒を続け攻撃の機会を求めた。しかし、午後になると東方に敵機らしきものを認め、次いで一群の機動部隊の追撃するを発見、間もなく敵機約三〇〇の攻撃を受けて僅かに残った戦闘機も消耗した。この攻撃により旗艦瑞鶴は直撃弾と至近弾多数を受け、飛鷹は雷撃機の魚雷命中、漂流中に再び敵潜水艦に雷撃されて沈没した。隼鷹もまた直撃弾を受けその他にも被害が多かった。これより先小沢長官は夜戦部隊全力を以てする突入を発令していたが、午後の戦闘において航空兵力の大半を喪失して翌日の航空支援が不可能となつたので遂に夜戦を断念するの已むなきに至つた。

以上の状況に鑑み、聯合艦隊司令長官は二十日夕、機動部隊は当面の戦況に応じ機宜敵より離脱し指揮官所定により行動すべきを命じた。

(二度目のZ旗——海上決戦の終焉) かくしてマリアナ海戦は終り、機動部隊は二十二日、沖縄の金城湾に帰投した。本海戦においては未帰還機多く戦果の確認は困難であつたが、大本営は機動部隊の判定に基き、敵空母四—五隻、戦艦又は巡洋艦一隻撃沈又は撃破、敵機一六〇機以上撃墜と発表した。^(註)

註 米側正式報告によれば四隻の艦に軽微な被害があつただけで沈没艦はない。又飛行機喪失は戦闘によるもの三三機、二十日の攻撃帰還時の夜間着艦によるもの七三機となつてゐる。

本海戦は大東亜戦史上のみならず第二次世界大戦史上最も大規模な、しかも正々堂々の海上決戦であつた。^(註)

註 但し米艦隊はサイパン攻略部隊の掩護を主とし、寧ろ受けて立つ戦闘方針で果敢な機動攻撃及び追撃は行わなかつた。

事実聯合艦隊司令長官は本次作戦が日本海軍の航空並びに水上部

隊の全力を以てする最後の決戦となるを予期して、決戦の開始にあたり「皇国の興廃此の一戦に在り」と全軍に訓示した。聯合艦隊のかくの如き信念と諸部隊の奮戦とに拘らず、日本軍は米軍の母艦空軍と潜水艦とに圧倒されて敗北を喫した。日本艦隊は「あ」号作戦決戦において、先ず基地航空の大部を失ひ、次いで参加空母九隻のうち、大、中型三隻を失ひ、同じく四隻に損傷を受け、無傷で残つたものは僅かに小型二隻のみとなつた。戦艦、巡洋艦等においては沈没艦なく損傷も軽微であつたが、艦隊戦闘の主力が既に空母群となつていた近代海戦においては日本軍の以上のような損害は致命的であつた。更に重大であつたのは母艦飛行機隊の損害であつた。この海戦に参加した約三六〇機の母艦搭載機のうち残存したものは僅かに二五機のみとなつた。訓練のために熟練した多数の教官要員と多大な時日とを要する母艦飛行機のこのような大きな減勢によつて、日本艦隊は爾後近代的決戦艦隊として再建するには約半年の歳月を要する実情であつた。

しかし、「あ」号決戦の損害は深く秘匿され、寧ろ相撃ち又は引分け程度に諒解され発表されていたので、その反響はすぐには現われなかつた。

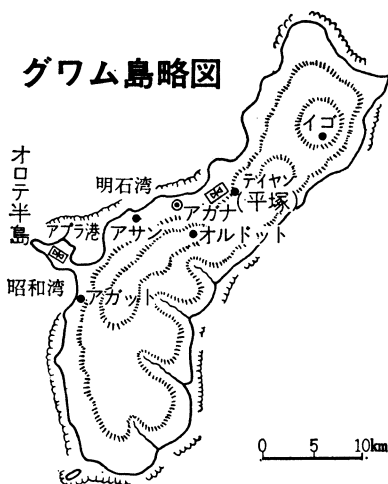
3 太平洋の防波堤潰ゆ

〔タポチョー山の激闘〕 海空の決戦我れに利あらず、既にマリアナの要衝は敵手に歸したるも同然であつたが、サイパンの地上部隊の敢闘はなお続いた。

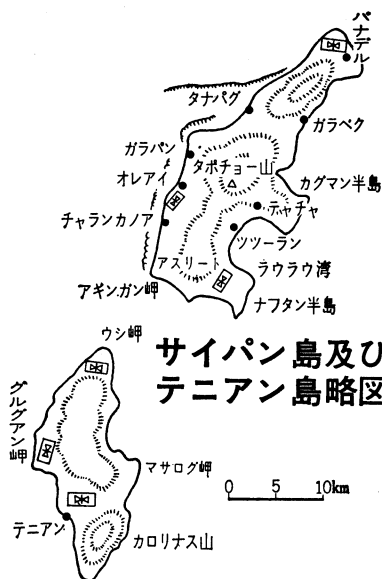
六月十七日第四十三師団の海岸攻勢不成功に終るや、第三十一軍司令部は翌十八日、地上部隊の主力を以てガラパン南端、タポチョー山南麓、ラウラウ湾中央部に亘る西南面の線を占領して敵を遡撃するに決した。

十八、十九日の両日、オレイイ方面の敵は橋頭堡の強化に努めて

グワム島略図



サイパン島及び
テニアン島略図



いるものの如く大なる地上進撃はなかつたが、早くも十九日には敵小型機はオレアイ飛行場の使用を開始した。我が諸隊は前述軍の企図に基き新配備に移行して二十日には概ねこれを完了した。第四十三師団主力及び独立混成第四十七旅団の残存兵力約半大隊等の部隊はタポチー山以東の線を占領し、その他の部隊（陸軍集成一大隊及び海軍部隊等）はガラパン及びこの東側地区の守りについた。

二十一日敵は我が新陣地に対して一斉に地上進撃を開始した。その攻撃は特に我が左翼方面に対して活発であつた。ナフタン半島は我が西側高地の陣地は同日敵の手に歸した。翌二十二日には、アスリート飛行場に敵のグラマン戦闘機の進出が認められた。

六月二十三日以後敵の攻撃は特に猛烈となつた。砲爆撃に支援された歩兵と戦車は逐次我が陣地を滲透した。タポチー山は我が守備部隊の敢闘によりこれを確保していたが、二十四日以後同山兩側の我が陣地は逐次敵の蚕食するところとなつた。

二十六日は果然、敵の猛攻はタポチ・山に集中した。我が將兵は手段を尽して防戦に努めたが、夕刻頃には遂に山頂部は敵の手に歸した。爾後月末に亘る間、敵の猛攻は継続されたが、各部隊はタポチ・山北側の要線を確認して死闘を続けた。二十九日より食糧も欠乏したが野草樹皮を嚼りつつ戦つた。

累加して、七月二日頃には戦力殆ど消耗し、最早ガラパン、タボチ
■ 山北側の線の保持は困難となつた。特に我が左翼方面は早くよ
り崩壊の兆があつた。ここにおいて第三十一軍司令部及び斎藤師団
長は兵力をタナバク東南地区に集結して最後の抵抗を試みるに決し
た。各部隊は二日夜第一線を撤して、三日タナバク北側地区から二
二一高地北側を経てガラベク西南側高地に亘る線に新陣地を占領し
た。

しかし、敵の追尾攻撃は迅速であつた。七月四日には二二一高地西側地区より我が陣地内部に侵入し、戦況は急速に最後の段階に到達した。ガラバン地区に最後まで踏み止つていた海軍部隊も同日玉砕したものと認められた。ここにおいてサイパン島所在の陸海軍首脳部は、七月五日「我等玉砕以て太平洋の防波堤たらんとす」の訣別の電報を發した。南雲中将及び斎藤中将は六日午前十時自決して総突撃の餞とした。当時のサイパン島残存兵力約三千は七日午前三時三十分以後各々当面の敵に対して総突撃を敢行し、かくしてサイパン島の地上戦闘は終りを告げた。

〔大本營の処置〕 サイパン島失陥の衝撃は大きかつた。サイパンを基地として米軍の遠距離爆撃機B二九が本土爆撃を企図するに至るであろうことは誰にも容易に判断し得るところであつた。「あ」号作戦の真相は秘匿されていたが、サイパン陥落の現実具体的且つ直接的であつた。大本營内外を通じてサイパン奪回を望む声が相当強く起つた。

元来大本營は、サイパン島は短期間ながら懸命の防備を施してきただけで優勢な敵の攻撃に対しても克くこれを破摧して同島を確保し得るものとは判断していたが、敵の上陸に際し万一を考慮して在満兵力を抽出する等陸軍兵力増派の準備を行つていた。

しかるに「あ」号決戦の不成功及び大本營の期待に反するサイパンの早期陥落は大本營特に作戦部をして奪回企図を断念せしめるに至つた。即ち奪回作戦のためには新たな母艦兵力と油槽船とを要したがこれが速急取得の道はなかつた。硫黄島を基地とする航空兵力の掩護下に奪回兵力を送るガダルカナル島式作戦も一応考慮はされたがこれに要する基地航空兵力捻出の道もなかつた。即ち海軍基地航空は既に殆ど潰滅しており、陸軍航空にはサイパン島までの行動能力を有する飛行機は極めて乏しかつた。いづれにせよサイパン周辺の制空制海権は既に敵手に帰し、これが奪回及び陸軍兵力の派

遣ともに不能であつたのである。

しかし三、四月後に予想されるB二九のサイパン利用を妨害することは当面の急務であつた。そこで大本營陸軍部は七月二十日航空總監に対し、司偵及び重爆より成る三中队の遠距離攻撃部隊の編成訓練を命じた。海軍部もまた略々同様の処置を採つた。

サイパンの失陥に失い、小笠原諸島方面の戦略的重要性は増大した。一方この方面に対する第三十一軍司令官の指揮は事実上不可能となつたので、大本營は六月末同方面陸軍部隊を大本營直轄として新たに小笠原兵団の戦闘序列(第百九師団及び歩兵二聯隊基幹)を令し、爾後輸送状況の許す限り部隊軍需品の追送に努めた。

4 グラム、テニアン島の失陥

〔孤立したグラム、テニアン〕「あ」号作戦の不成功は必然的にグラム、テニアンに対しても我が海空よりの支援を絶つた。しかしこの孤島に対する米軍の攻撃は慎重を極めた。

註 米軍は当初六月十八日にグラム上陸作戦を行う予定であつた。しかしサイパン島における意外に頑強な初期の抵抗と我が機動部隊の出現のためこれを延期し、十分な準備の後上陸を行うことに改めた。

米軍の攻撃準備はマリアナ海戦の直後より開始された。両島は六月下旬より猛烈な爆撃及び艦砲射撃に曝された。テニアン島に対してはサイパンの西南角に布陣した砲兵の射撃も行われた。七月中旬に至る間、グラムは約五、五〇〇機の攻撃と約一八、五〇〇発の海軍砲弾を蒙り、テニアンは約四、三〇〇機の攻撃と約一一、二〇〇発の砲撃を受けた。

〔グラムの玉砕——小畑軍司令官戦死〕 当時グラム島には第二十九師団(師団長高品彪中将にして歩兵第五十聯隊主力を欠く)、独立混成第四十八旅団(旅団長重松潔少将)、独立混成第十聯隊主力、

野戦高射砲第五十二大隊及び海軍第五十四警備隊等の部隊、計約一万八千五百が高品中将の統一指揮の下に地上防禦に任じていた。防備の重点はアガナ西方アサン方面（明石湾）に指向せられ、独立混成第四十八旅団及び歩兵第十八聯隊主力が守備に當つていた。

又アガット正面（昭和湾）には歩兵第三十八聯隊が配置されていた。第三十一軍司令官小畑中将は、參謀副長田村義富少将等と共に、前述の如く敵サイベン上陸當時作戰準備指導のため本島に在り、遂にサイベンに帰還し得ずしてグワム島に止まつていた。

米軍の上陸は七月二十一日朝、明石湾及び昭和湾の両正面同時に開始された。敵の上陸兵力は明石湾方面約一師団半、昭和湾方面半師団計約二師団と判断された。

註 實際の上陸兵力は海兵一師団半、陸軍一師団。

我が守備部隊はサイベン陥落の悲報にもめげず、断乎同島を確保して国軍将来の攻勢の橋頭堡たらんことを決意し、引続く砲爆撃にも屈せず上陸する敵を逐え撃つた。しかし猛烈な艦砲射撃に支援された敵は二十一日夕までには両方面とも橋頭堡を獲得した。同夜第二十九師団は両正面に対して逆襲を行つたが、多数の損害を生じ成果を収むるに至らなかった。

翌二十二日より二十四日に亘る三日間、我が軍は小部隊を以て敵の橋頭堡を攻撃したが、全般の戦況は変化なく兩軍対峙の態勢を保つた。

この間敵は逐次兵力を増加し爾來の攻勢を準備中なるが如く時日の経過は我が軍に不利をもたらすものと認められた。ここにおいて第三十一軍司令官小畑中将は断乎全力を揮つて敵に決戦を求め勝敗を一挙に決せんと決意し高品師団長を指導するところがあつた。

この全力攻撃は二十五日夜明石湾方面の敵橋頭堡に対して行われた。しかし、敵の優勢な艦砲射撃及び地上火力によつて損害続出し、攻勢は再び不成功に終つた。

翌二十六日、敵は橋頭堡を出て攻勢に転じ両方面共我が主陣地の保持は困難となつた。各部隊は二十七日夜より海岸附近の主陣地を撤し、東北方のティアン（平塚）附近に新陣地を構成した。この間、独立混成第四十八旅団長重松少将は二十六日、第二十九師団長高品中将は二十八日戦死したので、爾後小畑軍司令官自ら残存兵力約五、〇〇〇を指揮して戦闘を続行した。

平塚附近陣地も敵の砲爆撃と戦車を伴う攻撃のため長くは保持出来なかつた。八月初頭グワム島残存の日本軍は最後の復讐たるイゴ附近の陣地（又木山及び高原山）に拠つたが戦力の減耗は著しかった。八月十日には島外との連絡も絶え、軍司令官は十一日遂に戦死してグワム島における日本軍の組織的抵抗は終つた。

（ティアンの玉碎——角田長官も共に） ティアン島には第一航空艦隊司令長官角田中将が位置していたが、地上防禦は陸軍の歩兵第五十聯隊（聯隊長緒方敬志大佐）の主力及び第四十三師団歩兵第三十五聯隊の一大隊並びに海軍第五十六警備隊等がこれに當つていた。

この方面の敵は七月二十三日艦隊掩護の下に、輸送船七隻を以て島の西南部のティアン港に上陸を企図したが我が砲撃によつて撃退された。翌二十四日午前敵は多数舟艇により、三回に亘つて再びティアン港附近に上陸を試みたが、いずれも現地部隊の奮戦によつて撃退した。

しかるに、敵はこの間、我が判断に反して島の北部海岸に奇襲的に上陸した。同日午後四時までに上陸した兵力は歩兵三大隊、戦車約一〇輛と判断された。同夜歩兵第五十聯隊は兵力を北方に転用して反撃を行つたが、敵は既に橋頭堡を固めていた。

爾後敵は逐次兵力を強化して攻勢に転じて来たので、我が守備部隊は島の中央部に北面の陣地を占領して敵を阻止せんとしたが、敵の強圧のため二十八日にはその企図も放棄の已むなきに至つた。

最後の復讐は島の南端のカロリナス山であつた。敵は三十日より我が復讐の前面に進出し、猛烈な砲爆撃の支援下にこれを圧迫し

第八章 東條内閣の総辞職

1 マリアナ敗戦の衝撃と和平気運の萌芽

〔情勢の悪化と戦争指導の行詰り〕 昭和十九年六月及び七月は、日本、独逸ともに開戦以来最大の苦難に見舞われた時であつた。戦争指導上好ましくない事態は、相次いで起つてきた。

先ず欧洲においては、六月六日、待望の第二戦線が仏国ノルマンディー半島より開始されたが、独軍の反撃には見るべきものはなかつた。六月十五日より、独逸の新兵器V一号は忽然としてロンドンに攻撃を始めたが戦勢挽回の極め手とはならず、六月三十日、ノルマンディーの要衝シェルブル陥落するに及んで上陸攻防線の大勢は決し、独側が敵を海上に圧倒排擠し得べき機会に完全には去つてしまつた。かくして、独側は逐次内陸に向つて窄縮せらるべき運命となり、七月二十日にはヒットラー総統に対する暗殺未遂事件が起る等、独逸国内における反戦和平の気運は、漸く表面化するようになってきた。

翻つて東亜においては、あたかも独逸の頽勢と軌を一にするかの如く、既に述べたように、マリアナ決戦の帰趨われに利あらず、遂に中部太平洋方面の絶対国防圏の一角に破綻を生ずるに至つた。六月十六日には、突如として、成都を根拠とする在支米空軍による北九州の関門、幡倉地区に対する初空襲が行われた。来襲機数は、B二九を含むB二四を主体とする二十数機であつたが、済州島のわがリーダーにキャッチされたため奇襲の効果なく、敵側は七機(B二九、一機を含む)撃墜の損害を受けて立ち去つた。次いで七月八日

た。八月三日夜、歩兵第五十聯隊長は手兵を集めて左翼に向つて最後の攻撃を行い、ここにテニアン島における組織的抵抗は終つた。

再度十数機をもつて九州西北部に來襲した。この再度の空襲は、われに与えた実際の損害は軽微であり、マリアナ決戦に策応する敵側の神経戦的狙いであると考えられたが、日本にとつては苛烈なる戦局の波動を本土に身近かに感じさせるものであり、且つ今後B二九を以てするマリアナ基地からの本土大空襲の可能性を如実に示唆するものであつた。

又この頃わが支那派遣軍は、幾多の困難を克服して大陸打通作戦を実施中であつて、六月十八日には長沙を占領、次いで六月二十六日には衡陽飛行場を占領する等作戦は順調に進んでいたが、一方ビルマにおいて去る三月六日より發動したイムパール作戦は、当初快調な出足を示して既に三月二十三日には緬印国境を突破して怒濤の如く進撃を続けたにも拘らず、その後わが方の補給の不如意と敵抵抗の増大とにより、イムパールを指呼の間に望みながら成功するに至らず、遂に大本営は七月四日、本作戦の中止を決定するに至つた。

マリアナ海空決戦の敗退とサイパン守備部隊の二旬に亘る力戦奮闘の後の玉碎は、右に述べたような情況と相前後して起つたものである。かくして東西両戦局の推移は、日本にとつて悲觀的要素の累積となつて現われて来た。

もともとマリアナ決戦には、前年九月の御前會議以来、日本は國を挙げて物心両面に亘り精魂を傾けた。従つて、その影響するところもまた深刻であり、戦争指導の前途に暗影を投ずるようになったのは当然の帰結と云わねばならぬ。敗戦の結果、作戦的には対米主

戦力たる我が海空軍戦力の事実上の壊滅を招来した。我が国力、戦力の造成も峠を越して低下の一途を予想される。独逸の悲境に關連してソ連の対日中立態度も愈々あやしくなつて来る。大東亞諸國家、諸民族の戦争協力、確保も困難の度を増す。国民の間にも表面的ではないが戦争の前途に対する不安の念が兆し始めている。近衛公を中心とする重臣層及び宮中側近には、反戦和平の動きが活発化し、責任なき人々の戦争批判の声が漸く高くなろうとしている。

かかる情勢下において、大本營及び政府は、局面打開のため戦争指導の新たな構想の検討に着手していたが、豈に凶らんや倒閣の布石は着々進められていた。

〔和平氣運の萌芽〕 およそ戦争終末の方途を考え、如何にしてこれを実行に移すかを探究し続けることは、戦争指導の最も重要な因子である。しかし戦争を終結に導くことは、難事との難事と云わねばならぬ。特に今次戦争の如く、交戦国双方に対し仲裁的役割を果すべき実力のある第三国の存在しない場合において然りであつた。今やこの戦争の本質的性格は、いずれか一方が無条件降伏するまでは断じて矛を納めない、真に喰うか喰われるかの苛烈な戦争であつた。この故に、平和を求むべき時機と方法を誤れば、それは屈服即ち無条件降伏に通ずるものであつた。平和の探求は、それが戦争指導の責任当局において考えられる限り当然なことであるが、直接責任の衝にない人々によつて行われることは、それがたとえ善意によるものであつても、ややもすれば国内に敗戦、反戦の思想を起すの弊に陥り易いものである。

この時に至るまで大本營及び政府首脳部が、和平問題のみを採りあげて議したことはないが、対重慶工作や、対独、対ソ施策の遂行に當つては、常に世界平和導入への含みをもつて考えられていた。要は、それらの考え方が、日本の屈服でなしに妥協和平へ發展し得るや否やが問題であつた。戦争指導首脳部の苦慮は、まさしくここ

にあつた。

既に述べた如く、サイパンの喪失は、日本の戦争指導に一大転機を画するものであり、日本の前途が極めて重大な危機に臨んでゐることは明瞭に看取されたが、それかと云つて、かかる不利なる情況において和平が成立し得るとは考えていなかつた。大本營及び政府の見解は、一刻も早く態勢を立て直して戦勢を挽回したい、独逸との共同戦争遂行の望みが殆ど絶望となつた今となつては独力長期戦即応の態勢を固めねばならぬ、そのためには飽くまで鞏固な意志を以て国内の結束を強化しなければならぬ、かかる態勢を採ることによつて始めて和平への外交上の手も譲ることが出来る、というにあつた。

近衛公及び木戸内府を中心とする一部の人々の間においては、既にミッドウェイ及びガ島の頻頻以来平和探求への動きがあつたが、それらの人々は、その信ずる構想を現実の戦争指導に反映せしめ、責任ある当局者と共に危局を打開しようとする行動には出なかつた。

しかし、今次のサイパン喪失を契機として、これらの人々の動きは俄然積極活発化した。その主張は、陸軍が主動権を握つてゐる限り戦争を終末に導くことは出来ない、その前提として東條大将を退陣させねばならぬ、そうして陸軍を抑えて行ける人によつて内閣を作らねばならぬ、というにあつた。

かくして東條内閣打倒の議は着々進められ、その前提として東條参謀総長更迭の問題が表面化してきた。

2 東條参謀総長の更迭

首相兼陸相としての東條大将が、別の性格において参謀総長に就任した主なる狙いは、既に述べた如く、戦争指導に關する國家機構の欠陥——國務と統帥の併立——を人事的に解決しようとするもの

であつた。

しかし、これは全く異例の措置であつたので、軍内及び部外より幾多の批判を受けたばかりでなく、国務と統帥との吻合調整も陸軍に関する限りは或る程度の目的を達し得たが、海軍統帥に関しては一指をも触れることが出来なかつた。従つて、東條大將が参謀総長を続けて行くことについては、その利とするところよりも、同一人に過大な権力と事務とが集中することによつて生ずる弊害——疑惑と不満、嫉視と被圧迫感、施策の混濁と不徹底——の方がより多かつた。これらの弊害は、戦局が沈静している間はことなきを得たが、情勢の急迫と共に逐次表面化して来た。特にサイパンの喪失は、この傾向を助長させた。

〔総長問題に関する秩父宮の御質問〕 東條大將の参謀総長就任については、右に述べたように陸軍部内においても非難と疑惑とがあつたことは事実であるが、この難局を切り抜けるための思い切つた措置として納得する向きが多かつた。

当時御殿場において御静養中の秩父宮殿下は、本問題に関し御附武官を通じ前後三回に亘り質問せられた。第一回は、昭和十九年二月下旬補任課長へ、第二回は、四月二十二日参謀次長に対してなされた。これに対しては、その都度「今回の総長就任は戦争完遂の爲の特別の措置であること、本措置により結果は良好である」旨を御答へした。

しかるに、五月十六日、重ねて次のような御質問があつた。

総理、陸相が参謀総長を同一人にて兼ねる形式は、戦争指導上理想的のものなりや又戦争指導上統帥部の意見と政府幕僚の意見とが一致せざる場合、東條大將は如何にするや

今回の御質問は、内容にたとえ条件が設けてあるにしても、前二回とは甚しく趣旨を異にし特に当時の政治情勢とも関連して意味深長なものが感ぜられた。そこで東條参謀総長は、後宮高級次長を通

じ次のような趣旨を御答へした。

国務と統帥は総て上御一人の発動により生じます 東條はこの本義に立脚し拳々服膺致してをります。

陸軍大臣たる東條が参謀総長となつた経緯は、さきに既に御答へした通りであります。但し異例の御処置でありますから、異論のあるのは当然でありますが、その是非の論議は後世史家に委せたいと思ひます。現実には、統帥と国務とは十分うまく行つてゐる支障はありません。

尚ほ国家の本義にもとるやうなことは東條自身の気持の許さなところでありますから、この点御疑問がありましたら、直接参上して御答へ申上げます。

時あたかも、西部ニューギニア方面及び中部太平洋マリアナ方面に対する敵の動きは活発化し、その真面目な反攻が愈々切迫して来た。

〔梅津大將の総長就任〕 マリアナの戦局が悪化するに伴つて、政界上層部の政変気構えは愈々濃厚となつてきた。当時陸軍の省・部首脳者の間においては、マリアナ作戦終末後における戦争を如何に指導するかについて、連日深刻な検討が続けられ、海軍に対しても協議を始めようとしている時であつた。

東條首相としては、かかる困難な情勢下において政変を惹起することは、国内の動搖を来し戦争指導上不利な事態となるから、極力避けねばならぬとの強い信念であつた。そこで、内閣を強化して政局の安定を図るため、七月十三日、木戸内府と会見してこれが対策を相談した。ところが、木戸内府の態度は、全く東條首相の予期に反するもので、却つて次の三条件が提示された。

- 一、総長と大臣とを切り離して統帥を確立させる
- 二、海軍大臣を更迭させる
- 三、重臣を入閣させて挙国一致内閣をつくる

東條首相としては、右三条件の中で海軍大臣の更迭には非常に苦慮した。しかし結局右三条件は、木戸内府個人の意見というよりは、寧ろ全重臣の意向を反映しているとの印象を得るに至つたので遂にこれが実行に着手せざるを得なくなつた。

かくして先ず総長切り離しを決意し、後任參謀総長には現高級參謀次長後宮淳大將を昇格せんとしたが、諸般の状況を考慮して七月十七日、閣東軍總司令官梅津美治郎大將を後任総長として内奏した。

右に伴い陸軍首脳部の人事異動が行われ、七月十八日、新參謀総長に梅津美治郎大將、新閣東軍總司令官に山田乙三大將、新教育總監に杉山元帥がそれぞれ親補せられた。

右のような経緯をたどつて、木戸内府提案の一つの条件は達成された。これは陸軍部内に関するものであつたから多少の問題はあつたとしても可能であつたが、残りの二つの問題の解決は東條首相にとつては容易ならざるものであつた。

3 重臣及び木戸内府の動向

當時の重臣は、首相経歴者たる若槻礼次郎、岡田啓介、広田弘毅、近衛文麿、平沼騏一郎、阿部信行、米内光政の七氏であつた。重臣は制度上の存在ではなく、明治以来最後の元老たる西園寺公望公爵の歿後においては内閣首班の奏請、時として重要國務に関する諮問に奉答することもある。従つて憲法の定むるところは、國務

に関する補弼の責は、天皇に対し専ら國務大臣が負うべきものである。重臣の言動それ自体には直接の責任はなかつた。しかし重臣の存在は、云わば政府に対し睨みをきかせる立場であり、政界における地位と慣習的役目とからして政府当事者にとつては、その言動に重大な関心を払わざるを得なかつた。

〔重臣の動向〕 東條首相は、開戦以来屢々重臣と会合して意志の

疎通を図る努力を続けてきた。しかし、会合の内容は、儀礼、懇親的のものが多く、戦争指導の實際に立入つて論議されたことはなかつた。東條首相としては、現在の複雑な戦争指導は、あらゆる要素を分析綜合して行わなければならない、断片的現象や個人の印象によつて左右せらるべきではない、重臣の意見や批判は参考として聞くが制肘は受けない、との見解であつた。

右のような東條首相の態度は、その個人的性格とも関連して多くの重臣との感情的疎隔の原因となつた。この感情問題ともからんで戦局の悪化と共に戦争指導への批判となり、倒閣へと發展して行つた。

重臣の中で、近衛公、若槻男、平沼男、岡田大將の四人は、特に連絡が緊密であつて鋭く東條首相に対立していた。しかし、当初は四重臣の考え方は必ずしも一致していなかつたようである。

この頃における近衛公の思想の根底には、勿論反戦和平の考え方があつたが、陸軍に対する嫌惡の感情がより強かつた。即ち近衛公の見解によれば、陸軍部内の一部には左翼革命の企図があり、かかる陸軍の傾向は日本にとつて敗戦以上の危険がある、この故に何とかして陸軍を抑えて行かねばならぬというにあつた。元來近衛公は、この戦争は敗戦に終るであらうが、戦争責任の一切は東條首相が負うべきであるから途中で内閣を交代させ責任の帰趨が不明瞭になるのは宜しくない、東條首相が責任を感じて過早に自決でもされると困る、とまで極言していた。しかし、ミッドウェイ及びガ島の趨勢以來、若槻、平沼両重臣の考え方や公側近の示唆もあつて、和平に導く前提として逐次内閣更迭に考え方が變つたやうである。

岡田大將や米内大將の考え方は、当初から反陸軍であり、この傾向は特に嶋田海相に対する海軍部内の不評と相俟つて強くなつた。嶋田海相に対する海軍部内の不評とは、陸軍の言いなり放題になつてゐる、というのであつて、軍令部総長就任以來その傾向は益々強

くなつてきた。かかる感情問題のほかに、岡田、米内両大將は、ミッドウェイの敗戦を転機とする日本海軍の実力喪失の実情から戦争の前途に極めて悲観的見解を持ち、逐次和平思想に傾いて行つたことも事実である。

広田、阿部の両重臣の態度は、戦争の前途を深く憂えていたが右に述べたような反東條の積極的な感情問題ではなく、是々非々主義で事態を解決しようとするものであつた。特に阿部大將は東條首相と重臣との対立緩和については、好意ある協力と支援とを惜しまなかつた。

〔内閣の密議〕 かくして、重臣大部の意向は、事態を解決するためにはともかく東條内閣を退陣せしめるという積極的な考え方に期せずして一致し、マリアナ戦局の悪化と共に行動は具体化した。内閣打倒のためには、東條首相の内閣改造構想を阻止することであつた。そのためには重臣に対する入閣要請を拒否すると共に、東條首相に不満を有すると思われる関係——岸國務相、重光外相等——と策応するをもつて足れりとした。

七重臣は、東條首相の内閣強化構想を阻止するため七月十七日夕刻より平沼邸に会合して協議したが、阿部大將の意見を除く結論として「この際内閣改造ということは、多難な時局の前途に対して何の効果もない。国民全部の心をつかんで、道を切りひらいてゆく強力な挙国一致内閣の登場が必要である」との意見に一致し、この旨木戸内府に連絡することとなつた。木戸内府に連絡すれば、重臣の意向として上聞に達するとの見解によるものであつた。

〔木戸内府とその周囲〕 側近に奉仕する木戸内府の言動は、直接間接陛下のお考えに影響するところ大であつた。もともと、木戸内府は東條首班の推挙者である関係もあつて、比較的永く東條首相を支持し続けた。又内府の重臣に対する態度も、各重臣が個別に天皇に意見を述べることを避け、内府を通じて天皇に反映させることを

欲していた。従つて重臣中には、近衛公を始めとし内府に対し面白からぬ気持を抱いていた人もあつた。木戸内府は、右に述べたような重臣の東條内閣打倒に関する空気は十分承知していたが、自ら積極的に働きかけることなく、従来第三者的立場を堅持して来た。

一方、木戸内府は、戦局の前途に対する考え方は大部の重臣と同様の見解を持ち、成るべく早い時機に和平を実現したいとの意向であつた。内府はこの線に沿つて、重臣を始めとし、各界の指導的立場の人々と連絡し、特に重光氏の外相就任と共にその和平を望む傾向は強くなつた。そうして、当然の帰結として、東條内閣打倒への重臣の考え方に同調して行つた。

かかる空気の中において、内府は七月十三日、東條首相の事態改善についての相談に対し、三条件を提示したことは既に述べた通りである。この三条件は、東條首相にとつては正に命取りの重大事であつた。その結果が、十七日夕の平沼邸における重臣の申合せとなり、この申合せは十七日夜内府に報告された。

内府は、翌十八日朝右重臣会同の模様を言上したが、この時既に窮地に陥つた東條首相は総辞職を決意していたのである。

4 内閣改造の行詰りと総辞職

〔内閣改造行詰まる〕 東條首相は、木戸内府より三条件の提示を受けるや、困難ではあるが忠実にこれを履行しようと決意した。この難局に際し政変は、敵を利用する以外の何物でもないで極力これを回避すべきであるとの堅い信念によるものであつた。参謀総長の切り離しは既に決意し実行した。

問題は嶋田海相の更迭である。かかる要求の震源地は、岡田、米内両大將に発していることは明瞭に察せられたが、東條首相としては、開戦以来苦難を共にした僚友、しかも時には海軍部内の意向をも大局的見地から抑制してきた同氏に対し、かかる話を切り出すこ

とは容易に決し得ないことであつた。躊躇と逡巡を重ねていたが、十七日に至り漸く決意した。嶋田大將は、大乗の見地から快くその要請を受け入れ、後任海相候補には呉鎮守府司令長官野村直邦大將を推挙し、その親補式は即刻同日夕とり行われた。しかし、嶋田大將は、依然軍令部総長の職に留つた。

第三の問題、即ち重臣を入閣させて挙国一致内閣をつくる工作は、右の措置と併行して進められたが、これには二つの難関があつた。一つは、若干の關係に勇退を求めること、他の一つは、重臣の入閣を懇請することであつた。

第一の關係勇退については、先ず、岸國務相に向けられた。しかし、これより先既に岸國務相に対しては重臣よりの工作の手が延びていたので、同相は単独辞任には頷として応じなかつた。そのみならず、閣内においても改造よりも総辭職を可とするとの意向を漏らす者も出て來た。第二の重臣の入閣については、米内、阿部、広田の三氏に無任所相としての入閣を要請したが、阿部大將以外はこれを拒絶してきつた。

かくして、東條首相の挙国一致内閣の構想は完全に行詰まつてしまつた。しかし、首相は希望を棄てることなく、十七日夜半に至るまで執拗に努力を続けた。

〔内閣総辭職〕 時あたかも既に述べた如く、十七日夕刻から平沼邸における重臣の会同が行われ、東條内閣退陣を要求する申合せが行われていた。

東條首相が右情報を受取つたのは、十八日未明であつたが、ここに至つて始めて辭職を決意した。東條首相は、十八日午前九時三十分参内拝謁を願ひ出でてこの決意を言上し、午前十時閣議を開いて總辭職するに決し、辭表を取り纏めて捧呈した。

かくして、東條内閣は組閣以來二年有八カ月目に退陣するの已むなき事態となつた。この日はあたかも、四年前の昭和十五年七月十

八日、東條中將が第二次近衛内閣の陸相に決定し、夜間飛行にて上京した日であつた。

〔政変と陸軍の態度〕 陸軍としては、この政変がマリアナ喪失の直後であるだけにその戦争指導に及ぼす影響について憂慮した。新參謀総長梅津大將が十八日午後一時新京より空路上京するや、直ちに杉山新教育總監、東條陸相と會し陸軍三長官會議が開かれ、今後陸軍は今次政変に左右せられることなく、次の如き態度を以て戦争完遂に邁進すべきことを決定し、陸軍部内に徹底を図ることとなつた。

一、陸海一体にて邁進すること

二、作戰に絶對に影響せしめないこと

三、政変と関連し、敵側の宣伝、謀略、空爆等に乘ぜられ、国民の戦意を消磨しないやう万般の措置を講ずること

四、後継内閣問題に関する陸軍としての一切の言動を禁ずること

5 重臣會議

昭和十九年七月十八日午後四時から、御召により参集せる若槻、岡田、広田、近衛、平沼、阿部、米内の各重臣、原首相及び木戸内大臣は、東條内閣総辭職に伴う後継内閣首班の奏請につき所謂重臣會議を開催して協議し、午後八時四十五分散會した。

〔東條大將の態度〕 これより先、この日朝九時三十分総辭職の決意言上のため参内せる東條首相に対し、木戸内府は「陸軍の国内態勢に有する重要性に鑑み、円満に政変を推移せしむる為自分の含み迄に後継首相に御考えあらば承り度し」と申出でたが、これに対し東條首相は、「今回の政変には重臣の責任が重しと考ふ。従つて重臣には既に腹案がおりのことと思ふ故、敢へて自分の意見を述べず、只皇族内閣等を考慮せらるる場合には陸軍の皇族を御考へなき様願度云々」と答えた。かくして、重臣會議の審議には陸軍側の意

見は全然反映しないこととなつた。

〔會議の状況——木戸日記〕 會議の模様は、極東國際軍事裁判における木戸被告の宣誓口供書——所謂木戸日記——によれば、先ず木戸内府より東條内閣総辭職の事情を説明、次いで米内大将より内閣からの入閣交渉を受け拒絶するに至つた経緯を報告し、その後協議に入つたが、主なる問題は次の如くであつた。

若槻 内府の意向は如何。

木戸 未だ確定的なる意見を有せず、先づ御意向を承りたし。

平沼男邸に於ける御会合の際の申合せの趣旨にて考慮すれば可ならざるか。

原 その会合とは何か。

若槻 事態を憂慮の余り重臣が平沼男邸に集つたもので、後継内閣等については別段の話なかりき。

阿部 問題の進行上末席より意見を述べ。國務と統帥との間に間隙が生じては大変故是非密接に持つて行くことが必要なり。端的に云へば此の際軍人にして現役の者がよしと思ふ。而して現下最も大事な所は海軍なれば、この際海軍より出られては如何。就てはこの際米内閣下に御願ひしては如何。

米内 自分は、軍人と云ふものは作戰統帥のからに入りて専念之に従ふを本旨とすと考へ居り、政治は文官が當るが至当なり。今度は陸軍、次は海軍等と源平の如くなるは宜しからず。

阿部 そんな考へにはあらず。

米内 文官に適任者がなければ陸軍から出らるるが宜しからん。自分では一ヶ月持てずと思ふ。嘗ての自分の経験から見て却つて御迷惑をかけることと思ふ。

若槻 問題を出す意味にて試案として云ふ。戦争中は矢張り軍人が宜しいと思ふ。この際國防の第一線は海軍に頼む外なし。之に海軍から首相が出られると却つて御氣兼ね御遠慮がありはし

ないかと思ふ。従つて陸軍から出らるるが宜しからんと思ふ。首相たる以上は政治的手腕を有せざるべからず。この意味にて最近の事情は自分は知らないが、宇垣大将が適任ならんと思ふ。先回は阿部閣下に御異論ありし様に思ふが。

阿部 宇垣大将の近情を知らず。

米内 海軍が第一線に立つと云ふことは判る。軍は要するに作戰に専念すべきものなり。元來軍人は片輪の教育を受けて居るのでそれだからこそ又強いのだと信じて居る。従つて政治には不向なりと思ふ。

若槻 米内閣下の御説は一応尤なるが、英米の如き習慣あるところとは違ふ。國民もその点で養成せられず、日本で一躍そこに行くのは困難と思ふ。

米内 今直さざれば国は滅びる。

近衛 軍自ら此点を直すにあらざれば文官がやることは無理なり。それは理想論なり。現実の問題としては、この段階にては軍人が宜しからん。さう云ふ考へを持つた軍人が宜し。陸海軍何れかは段々と狹めて行つたら決することなり。

木戸 要するに現実の問題なり。戦争完遂が第一目的なり。同時に政治の建直し迄やらんとしても実行は不可能なるべし。この際二面的に考ふれば目的を混迷ならしむる虞あり。

平沼 近衛公と全く同意見なり。国体の擁護、皇室の御安泰迄考へざるべからざる段階なり。軍需増産の点丈けにても、軍人にあらざれば切りさばきがかずと思ふ。

若槻 現役に限らず軍人と云ふことにしては如何。

近衛 段々選衡方針を狹めて行くが宜しからん。

米内 自分は首相としての経験からして自信なし。

若槻 それは平時なり。

原 実は自分の位置は政治情勢が判らぬ所なり。時局は極めて

重大にして、この内閣により国の運命がきまると云ふ時なり。

軍人の一人に全責任を負へと云ふは無理なり。真に威望のある人の挙国一致内閣たるを要す。就ては五人位協同して御引受けすることにしては如何。卿等協力して内閣を組織せよと仰せが可ならん。此処に居らるる五人に對し大命が下り、お互に首相を選び協同一致して国政に當る、この態勢を採らざれば如何なる人でも一人にて引受けらるる時勢にあらずと思ふ。

木戸 原さんの御氣持は良く判る。此点恐らく誰も御異存はないと思ふが、実行法は頗る難しいと思ふ。

若槻 内大臣の云はるる通りで、矢張り奉答としては誰々と云ふ個人にせざれば御困りになるのではないか。

広田 捨身の業をなす事態が生ずるやもはかられず、皇室の御安泰をも考へざるべからず、最高最大の組織ならざるべからず、此の際皇族を中心に戴くことの必要はなきか。

陛下の左右には陸海軍将官が汎山附随することが必要なりと思ふ。

近衛 現段階にては皇族内閣は不可なり。

平沼 自分も現段階にては不可なりと思ふ。さう云ふことを考へねばならぬ時が来るかも知れないが。

若槻 皇族内閣はいけない。

岡田 今度の内閣は、外国より見ても又国内より見ても強力挙国一致内閣ならざるべからず。戦ひ抜かねばならぬ。無理な戦争をもしなければならず、如何にすれば眞の挙国一致内閣は出来るや。

原 自分もさう考へる。一人にては無理なり。個人と云ふことなれば自分は意見を述べず。

岡田 今度出来る内閣は誰々の内閣ではないけない。陛下の内閣ならざるべからず。

木戸 氣持はよく判るが、實際どうしようと思はるのか。

原 誰々の内閣と云ふことではないけない。

平沼 氣持はその通りなるが、何れにしても首班に立つべき人を決めざるべからず。今日の段階にては軍部出身ならざるべからず。御親政であることは勿論なり。

若槻 其の通りなり。

岡田 其の点になると米内と同様に思ふ。陛下の聖慮も判られ、国内の情勢も充分判り居る内大臣がやらるるが一番宜しからん。

原 統帥は、陸海軍大臣が総長を選ぶ故それにてもよし。

木戸 内外の情勢殊に今後国内の防衛態勢を強化する点より見て陸軍軍人ならざるべからずと信ず。

若槻 余りばくとした奉答ではないけない。原さんの案では又協議することとなる。

阿部 ざつくばらんに云ふが軍人がよからんとは大体決まり。しかし軍人が軍人丈ではないけない。総力戦の実情より見て文官や予備軍人では作戦との連絡不十分なりと思ふ。國民を明朗ならしむる為海軍が宜からん。

広田 此の際中心に皇族を戴き眞に挙国一致の内閣を作るの必要ありと思考す。

若槻 皇族に政治上の責任を帰することとなるは不可なり。

木戸 然り。

平沼 現段階にては未だ不可なり。

木戸 国土防衛態勢の強化、陸軍の内地に於ける配備増強、憲兵の強化より見て此際陸軍より出すより外なしと考ふ。

阿部 それでは人氣一新にならぬ。

若槻 陸軍宜しからん。

米内 今迄の内大臣の説明を聞いて一応は文官と云ふ説を出し

たが、矢張り陸軍から出られるが宜しと考ふ。此点前説を取消す。

阿部 陸軍は不人気なり。海軍への国民の輿望は現はれて居る。

平沼 現在国民の見方は二つあり。陸軍の方評判悪し。

広田 内府の先程の説明は戒厳令を意味せらるるや。

木戸 否、その意にあらず。只国内津々浦々迄陸軍が配備せらるると云ふ意味なり。

米内 寺内元帥は如何。

阿部 実現困難と思はるる節あり。

平沼 此際組閣の長びくことはいけない。

近衛 東條内閣は何が故に倒れたるか、陸軍が不評を買ひ人心離反したる為なり。従つて人心を一新する為には陸軍は従来の態度を変へることが必要なり。

平沼 各方面の希望は軍が各方面に干渉することを廃止することなり。

近衛 十数年来陸軍内一部に左翼思想あり。今日軍官民に亘り連絡をとり左翼革命を企てんとするものあり。此点は敗戦以上の危険にして自分は敗戦よりも左翼革命を恐るるものにして、敗戦は皇室国体を維持し得るも革命は然らざるを以てなり。此点より見て陸軍大臣の選任が重大なり。

米内 其点なれば陸軍より選ぶがよし。

若槻 この点は従来より疑ひ居りたるところなり。

平沼 全く御同感なり。

近衛 寺内は其点押へ得るや。

阿部 寺内は直情径行なるが、第一、第一線より抜くことに困難あるべし。軍の輿望あるものならざるべからず。

若槻 宇垣には軍輿望なきや。

阿部 近況を知らず。

米内 阿部さん、誰か輿望を荷へるものなきや。

阿部 梅津等は人物なり。其他二三あるも皆前線に居り実現困難なり。

平沼 梅津氏は問題に出来ず、海軍に他に人はなきや。

米内 先程内府の云はれたるところより見れば陸軍から出す方宜しからん。

平沼 近衛公の云はれし左傾を押ゆることは余程経験を要すべし。

近衛 世間では鈴木貫太郎氏を云ふものあり。

米内 之はおやりにならぬ方が宜しからん。

平沼 個人の事情は兎も角今日国家の為なれば出らるる方が至当ならん。自分はよく知れるが立派な人と思ふ。

広田 總当なる人と思ふ。

平沼 強いところもあり、人の言を容れる人なり。

原 自分も樞府にて一緒に仕事を為し居りよく知れるが、鈴木氏は常に自分は軍人なれば政治的位置には絶対に就かず、仮令大命ありとも絶対に拝受せずとさへ云へり、御参考迄申す。

岡田 人としては立派なるが前線の将兵等のことを考へるとき陸軍の方がよろしと思ふ。

広田 日本の制度の根本を改正して行かねばならぬ様な重大段階と思ふ。総ては大本營に列すると云ふことにせざるべからず。

平沼 之は事実上出来ぬことなり。

広田 戦争第一なれば陸海軍の四本柱がしつかりすれば宜し。

木戸 寺内元帥等も一人なり。

若槻 今日我々がここに会合し大命が一兩日中に下らざる時は、人心不安を起す。故に宇垣が梅津大将が宜しからん。

木戸 烟元帥は如何。

近衛 陸軍より出るとすれば先程申した様に人心を一新する為に面目を改むることと左傾を押ゆることが必要条件なり。之が出来れば梅津にてもよし。

平沼 政治の経験あることが必要なり。

木戸 宇垣氏に対し前線よりの批判は如何に思はるや。敵側宣伝攻勢もあり前線に不満と動揺を与ふるやうでは困る。

阿部 海軍案は少数なるや。

木戸 大体に於て陸軍案とすれば人の問題なり。

阿部 一、寺内、二、梅津、三、烟と云ふ順序か。

木戸 梅津については総長を拝命したる許りなること、大臣の

経歴を有せざること等が問題なり。

平沼 この次は海軍の米内。

近衛 鈴木貫太郎氏。

平沼 宇垣氏の問題は。

木戸 昨今を知らず。

阿部 陸軍大将中此の外に如何なる人ありや。

木戸 本庄、荒木、小磯等あり。その次が東条と云ふことなる。

木戸 小磯は如何。

米内 小磯はよい人なり、手腕もあり腹もある。

近衛 宇垣を小さくした人にあらずや。

阿部 全然異る。

木戸 陸軍の現役方面との折合は如何。

阿部 格別のこととはなかるべし。東条とは性質が異なる。

平沼 人物は大きい。敬神家なり。

木戸 思想問題については如何。

若槻 人を知らざるが異存なし。

岡田 余り知らざるも米内、平沼阿内閣の關係なりし故阿閣下の御意見は如何。

近衛 異存なし。

岡田 之にて真に挙国内閣を實現し得るやを再検討するを要すべし。真に重大なる時にして一、二時間を争ふことにもあらざれば充分検討したし。

木戸 往年の元老大臣會議の如き重臣大臣會議を宮中に於て御開催を願ふと云ふ如き腹案も有り居り、目下研究し居れり。

岡田 組閣に対し工夫を要すべし。

広田 勅命内閣、陸海聯立内閣等は如何。

若槻 如何なる内閣にても事實は副総理は居るものなり。

木戸 原氏の御意見は委細奏上すべし。候補者の順序は如何。

若槻 寺内、烟、小磯、海軍。

平沼 寺内、小磯、海軍。

米内 寺内、小磯、烟。尚小磯を閣員として内奏せし際其理由につき御尋ねありたり。

平沼 小磯については宇垣の事件につき御尋ねありたり。

近衛 三人とも知らず。

広田 寺内、小磯、烟。

阿部 寺内、小磯、烟。

岡田 三人とも知らず。

木戸 今回は重臣の支援と云ふ意味に於て大命拝受者と重臣との懇談につき考慮ありたし。

若槻 首相候補者を制肘する様になりては却つて面白からず、本人が希望するならば喜んで会見すべし。

木戸 長時間の御協議を謝す。御意見のありたるところは委曲奏上すべし。

〔寺内元帥、小磯大將を奏請〕 右重臣會議終了後、木戸内府は御

文庫において午後八時五十分より午後九時十五分まで拝謁、會議の模様を委細奏上した。なお第一候補たる寺内元帥は南方軍總司令官なるゆえこれが起用が作戰上支障なきや否やについては統帥部に予め御下問ありたき旨を言上した。これに対し、陛下は、あたかも梅津新參謀総長の親補式挙行のため参内し来れる東條大將に武官長をして尋ねしむることとすべし、との御説であつた。

木戸内府は、午後九時五十分御召により拝謁、左の如き御説を拝した。

「寺内元帥を召すことにつき、作戰上の關係を東條大將に尋ねたるに、大將は左の二点にて反対せり 尤ものことと思ふ故小磯大將を召すことにす」

一、反攻の苛烈なる際第一線の總司令官を一日にてもあけることは不可能なり

二、内地の政治情勢を前線に影響せしむるは志氣に関し面白からず

又東亜共榮圏は勿論その他の中立国等に与ふる影響も甚大なれば極力避けたし

かくして、小磯大將御召の手續がとられた。

6 小磯・米内連立内閣の成立

〔近衛公連立を示唆す〕 かくの如き経緯によつて小磯大將の奏請が決定したが、戦争の早期終結を意図する近衛公には、果して小磯大將がこの難局を收拾し得るやの不安があつた。よつて、翌七月十九日に至り、近衛公は米内大將の入閣を木戸内府に示唆した。近衛公の意見は、所謂木戸日記によれば「米内大將は最も大局に通じており、同氏を加へることにより陸海軍部統帥一元化の問題を解決することにも資すべく、且舉国一致態勢を取ることも出来る」という

にあつた。

木戸内府は、右近衛提案に同意し、平沼男も賛成しているのとことであつたから、松平秘書官長をして他の重臣の意向を聴取せしめた。その結果、阿部大將のみは、小磯、米内連立内閣に反対であつた。

〔再び重臣會議——小磯・米内連立決定〕 七月二十日、木戸内府は、右事情とともに小磯・米内連立内閣について奏上した。

この奏上に伴い、同日午後四時重臣會議が再会され、連立に関し全員の賛成を得ることとなつた。阿部大將もまた反対を取消した。

昭和十九年七月二十日午後四時十五分、朝鮮總督小磯国昭大將は朝鮮から東京に到着し直ちに参内、木戸内府より東條内閣総辭職に至るまでの政情について委細説明を受けた。

かくして、同日午後五時十分、小磯、米内両大將は組閣の天命を拝受し、左の御言葉を賜はつた。

「卿等協力して内閣を組織せよ 特に大東亜戦争の目的を完遂せよ 尚ソヴェトロシアを刺戟せざることに努むるを要す」

〔小磯大將の陸海軍に対する要求〕 小磯大將は、組閣に当り統帥と國務の調整吻合について最も苦慮した。前任者東條大將は陸軍大臣を兼任し、後には參謀総長に就任する等、主として人事措置によつて戦争指導上の制度的欠陥を補つた。予備役たる小磯大將にはかかる手段はなかつた。

よつて小磯大將は、陸海軍に対し、今後戦争指導の運営を円滑ならしめるため次の三条件の達成に協力せられたき旨を申入れた。

一、現在の大本營令を改正して、総理大臣が大本營に列するやうにせられたい

二、右が不可能ならば、今回の戦役限りの措置として総理大臣を大本營に列するやう、単行軍令を出してもらひたい

三、右二つとも不可能ならば、他の何等かの方法をもつて、総理

大臣が統帥指導の面に強力に干与し得るやうな組織を考慮せられたい

尚右申入れと共に、陸軍に対しては、陸軍大臣候補者として山下奉文大将、若しくは阿南惟幾大将を希望する、海軍に対しては、海軍大臣候補者として米内大将の現役復帰を希望する旨、それぞれ要請するところがあつた。

〔陸海軍の態度〕 右申入に対し、陸軍においては三長官を中心として予め協議が進められていたので、七月二十一日夕、富永陸軍次官より組閣本部において次の如く小磯大将に伝達した。

新内閣組織に際し其の首班たるべき小磯大将の求めに応じ東條陸軍大臣より左の通り陸軍の態度を明確に表明す

一、新内閣の首班たるべき小磯大将の確言に信頼し、新内閣は戦争遂行に関する鞏固なる決意を有せらるべきものと認め、陸軍は為し得る限りの協力を惜しまざる旨を表明す

二、仮令海軍側の在郷者を現役に列せらるることあるも、陸軍に此の例を適用せらるることは、三長官一致の堅き信念として不同意なり

三、内閣総理大臣其他の閣僚を大本營に列せしめらるることは同意する能はず 即ち政戦両略の關係は現在の大本營政府の連絡會議等に依り緊密に律せられ得るものと認むればなり

四、陸軍三長官の議に基き杉山元大将を陸軍大臣候補者として推薦す

右陸軍側の意向伝達と相前後して、海軍側は次の如く回答した。

一、三条件に就ては陸軍側の態度と同様である

二、米内大将を現役に復帰して海軍大臣とすることに同意する

〔連立内閣の誕生——首相の第一声〕 かくて二十一日夕刻陸海軍大臣の人選が決定したので組閣工作は順調に進み、二十二日午前中に閣員の詮衡を完了した。

よつて、小磯大将並びに米内大将は、共に二十二日午後一時半参内、天皇陛下に拝謁仰付けられ、謹みて大命拝受の旨を奏上、閣員名簿を捧呈し、陛下にはこれをお嘉納あらせられた。ついで、雷雨沛然たる中に午後二時三十分より宮中において親任式をとり行われ、ここに小磯・米内協力内閣は成立、難局に立ち向うこととなつた。

新内閣の顔触れは次の如くであつた。

内閣総理大臣 小磯 国昭 陸軍大将、元拓務大臣、前朝鮮總督

外務大臣(留任) 重光 葵 兼大東亞大臣

内務大臣 大達 茂雄 元内務次官、元昭南特別市長、前東京都長官

大藏大臣(留任) 石渡 莊太郎 元帥陸軍大将、元陸軍大臣、元参謀總長、前教育總監

陸軍大臣 杉 山 元 元海軍大臣、元總理大臣

海軍大臣 米 内 光 政 前檢事總長

司法大臣 松 阪 広 政 陸軍中將、前滿拓總裁

文部大臣 二 宮 治 重 元厚生大臣、前産業設備營団總裁、貴族院議員

厚生大臣 広 瀬 久 忠 元農林大臣、衆議院議員

農商大臣 島 田 俊 雄 元農工大臣、前國務大臣、貴族院議員

軍需大臣 藤 原 銀 次 郎 元商工大臣、元鐵道大臣、衆議院議員

運輸通信大臣 前 田 米 藏 元農林大臣、元商工大臣、衆議院議員

國務大臣 町 田 忠 治 元内務大臣、貴族院議員

國務大臣 児 玉 秀 雄 伯爵、元拓務大臣、元通信大臣、元内務大臣、貴族院議員

國務大臣 緒 方 竹 虎 前朝日新聞副社長

兼情報局總裁

法制局長官 三浦 一雄 元農林次官、衆議院議員
兼内閣書記官長

小磯新首相は、二十二日宮中における初閣議後、首相官邸において左の如き談話を發表し、大和一致して敵を撃砕し戦争完遂に邁進すべき決意を披瀝した。

不肖今回揣らずも米内海軍大将と共に組閣の天命を拝しました。が、まことに恐懼感激に堪へません。今や戦局は極めて重大であります。此の未曾有の国難を突破するの途は唯々国民大和一致敵米英の反攻を撃砕するのみであります。

政府は内益々政戦両略の緊密化を図り愈々国政運営の諸方策を強化し戦争完遂の爲の施策は余す所なく之を実行し断じて必勝を期し、外飽く迄従来の外交方針を堅持し、大東亜共同宣言を徹底具現し、聖戦を完遂し以て聖慮を安んじ奉らんことを期するものであります。国民各位は政府の決意に信頼協力し、克く戦局の重大性を認識し、焦躁に陥らず沈着精勵事に処し、各々其の持場に於て一瞬の撓みなく、凡ゆる困苦を克服し其の全力を国家奉仕に發揮せられ度いのであります。

〔東條大将予備役編入、米内海相現役帰復〕 もともと東條大将は、総辞任後においても、陸軍大臣として留任の意向を持っていた。しかし、七月二十日東條陸相、梅津新參謀総長、杉山新教育總監の陸軍三長官會議において、主として梅津大将の意見により東條大将の留任は全般情勢上適當ではないとの結論となり、後任陸相には杉山元帥を推薦することに意見が纏つていた。

これに伴い七月二十二日、新陸相の発令と共に東條大将は予備役に編入せられることとなつた。その法的根拠は、昭和十六年三月七日勅令第百七十八号陸軍將校分限令の規定によるものであつた。即ち同大将は、さきに内閣総理大臣に親任せられた際同勅令の定むるところにより予備役に編入せらるべきであつたが、陸軍大臣は現役

將官たるを要したので陸軍大臣兼任に伴い特旨を以て現役に列せしめられたのであつた。

一方米内大将は、同日海軍大臣在官中特旨により現役に列せらるることとなつた。

註 この海軍関係の唯一の先例としては、大正八年原内閣当時、すでに同六年予備役に編入されていた斎藤実大将が特旨をもつて朝鮮総督在任中特に現役に列せしめられた。

